

中国における新史学の形成について
―梁啓超を中心として―

東洋大学大学院
文学研究科中国哲学専攻
学籍番号：4130010005
馬場 将三

中国における新史学の形成について
― 梁啓超を中心として ―

東洋大学大学院博士後期課程

文学研究科中国哲学専攻

学籍番号：4130010005

馬場将三

目次

前言	………	1
第一章 『新史学』への過程	………	3
第一節 史学の目的	………	5
第二節 日本の明治期の歴史学が梁啓超に与えた影響について	………	13
第三節 「旧史」と「新史学」の「新」の解釈。	………	35
まとめ	………	50
第二章 『新史学』の周辺	………	51
第一節 章太炎について	………	53
第二節 鄧實の『史學通論』について	………	64
第三節 馬叙倫の『史界大同説』について	………	72
まとめ	………	80
結語	………	81
注釈	………	83
付録 1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査	………	
付録 2 近代中国の雑誌に所収される歴史関係論文目録	………	
付録 3 梁啓超著述繫年索引	………	
付録 4 梁啓超関係論文目録	………	

前言

本稿では、近代中国において、新史学が如何に形成されたのかを考察するものである。果たして近代中国において、旧来の史学の視点を離れて、新たな視点からもう一度中国史を見直すという考えが、何時頃から成立したのかは詳細にしない。ただそのことをはつきりと意識または意図して実行しようとしたのが梁啓超であろう。梁は一九〇二年、『新史学』という論文を発表し、「史界革命」を提唱し、旧来の史学とは違った視点で、中国史を見直そうとする。

そこで本稿では「新史学の成立」という漠然としたテーマに一つの基軸を設けるために、この梁啓超の『新史学』を中心に考察を進めることにする。

まず第一章では、梁啓超の『新史学』がどのようにして成立したかを考察することにした。そしてその第一節では、梁が「新史学」を提唱した目的が何であるのかを考察し、第二節では、「新史学」の発想をどのようにして発想したのかを考察し、第三節では梁の「旧史」に対する考えと、『新史学』の「新」の解釈を通して、梁啓超が考えた「新史学」とは一体何であったのかを考察することとする。

また梁啓超の『新史学』を基軸として中国における「新史学の成立」を考察するわけであるが、それでは梁の『新史学』が同時代において、どういう評価、位置づけにあるかの押さえないければ、より客観的な見方をすることは出来ない。

そこで第二章では、梁が『新史学』を発表した時、同時代人はそれにどう反応したのかを考察することにした。そのため、何人かの同時代人の「史」または「史学」に対する

論文を例にとり、実際に『新史学』がどのような位置づけにあるのかを考察することにした。

第一章 『新史学』への過程

本章においては、次の三点に絞って論じることにした。

一つ目は梁啓超が史学の目的をどのように考えていたかである。史学と言っても、現代で言う歴史の因果関係を求める学問的な意味で、果たして梁啓超がこの言葉を使っていたとは限らない。後述するように、梁啓超は確かに歴史には因果関係を求めることをしているが、そのために梁は史学に注目したわけではない。そのため、梁啓超がこの「史学」（または「史」）に注目する目的、または理由というのは何であつたか、その点を考慮しなければならない。

従来の研究では愛国思想発揚の為というのがその理由であり、目的であつた。またこれ自体は全く間違いではない。それは後述する梁の自伝『三十自述』や『新史学』に書かれていることであるから。

ただここでは更に踏み込んで、なぜ愛国思想を発揚するために、「史学」（または「史」）が必要であつたのかを考察し、梁の史学（または「史」）に対する目的をハッキリさせたい。（この点は第一節で論じる。）

二つ目は『新史学』の発想をどのようにして思いついたのか。従来の研究では梁啓超は戊戌の政変（一八九八年）失敗後、日本へ亡命した訳であるが、その亡命先の日本で、日本書を経由して、旧来の史学とは違う西洋の方法論などを吸収しながら、『新史学』を発想したということになっている。後述する竹内弘行の論文はその先駆的な研究と言えよう。確かに竹内氏の言うように、梁啓超が日本の学術書を紹介した『東籬月旦』には、『新史

学』が基にしたと思われるものが無いわけではない。しかしどうしてもそれが直接結び付く要素が少ない。そのことから考えても、梁が『新史学』を書く前に、日本の学術と『新史学』を結び付ける役割を担ったものがあるのではないかと推察する。

論者の考えとしては、日本の学術の直接の影響を受けて成立したのは『中国史叙論』ではないかと推察する。そしてそこで発想したことを更に発展敷衍させたのが『新史学』ではないかと考える。(二)

また梁啓超は日本書を経由して、西洋の学術を吸収したとよく言われるが、では果たしてそれはどれほどの理解を持ってなされたのであろうか。たとえば、「進化」という言葉文章中に見えるからと言って、それが即「進化論」を理解していたと言うことにはならない。単に流行語のように、何の考えもなしに使っているということも考えられる。

確かに梁啓超は図の明晰な人であったかも知れない。日本に亡命してきて多少日本語も読めるようになったとは言われるが、だからと言って、そう簡単に理解できるとも考えがたい。本稿ではそのことを改めて、『中国史叙論』がどのように日本の学術を吸収したのかを見て、その判断の一つとしたい。(これらのことは第二節で論じる。)

三つ目は梁啓超が旧来の「史学」をどのように捉え、彼の考えていた「新史学」とは何であったのかを考察することにした。い。「新」という言葉は、一般にその対義語である「旧」との対立の中で考えられがちである。そしてその場合、「新」は新しくてよいものの、「旧」は古くて悪いものというように捉えられがちである。しかし梁は上述の意味で、この「新」を捉えていないように推測される。梁において、「新史学」とは史を再構築するという意味で捉えているのであって、そこには「旧史学」を否定するという発想はないと推測する。

もともとこの「新」には朱子の『大学章句』三綱領の一つである「新民」の「新」つまり「新しくする」という意味があり、梁を含む科挙を目指していた当時の士人にとって、このような理解は常識的であつたと言えるであらう。

そう考えた場合、梁啓超の『新史学』というのは、旧史学を否定して、新しい史学を創設しようというよりは、如何に旧史学を再生させるかという意味で、考えていたと推測する。（この点は第三節で論じる。）

第一節 史学の目的

一

ここでは『新史学』が基づいたと言われる『中国史叙論』に触れ、その執筆動機を考察することにする。それによつて梁がこの時期に、如何なる目的で中国史の編纂を思い立つたかを考察し、それがどのような形で『新史学』に繋がつていくのか、その糸口を探ることにしたい。

『中国史叙論』は梁啓超が一九〇一年『清議報』第九十、九十一冊に発表したものである。『中国史叙論』はその名の通り、『中国史』の叙論であるが、本篇に相当する『中国

史』は未完のまま、叙論のみが存在する。(2)その構成は「史之界説」、「中国史之範圍」、「中国史之命名」、「地勢」、「人種」、「紀年」、「有史以前之時代」、「時代之区分」の八節からなる。なおその成立にあたつては、梁啓超が『東籍月旦』中で紹介した日本の明治期の歴史書による影響が大きく見られる。(3)また後述するが、『中国史叙論』の内容から考えると、梁啓超は旧来の史書を君主中心として捉えた上で、「国民」を中心とした中国史を編纂しようとしたのではないかと推察される。

ところでこの『中国史叙論』については、旧史学の整理とか、『新史学』の依拠した論文として論じられるが、後述のように本来の目的であつた愛国思想の発揚という点については、論じられてこなかったように思われる。そこで本節では、この『中国史叙論』の目的に焦点を当て、なぜ史学によつて愛国思想発揚が可能であると梁啓超が発想したのか、その点について論じてみることにしたい。

二

梁啓超は『中国史叙論』の目的について、『三十自述』(一九〇二年)(4)の中で

辛丑の(一九〇一)年四月に再び日本に戻ってきた。……一年余り、乏しい才能を尽くして、中国通史を起草し、愛国思想の発揚の助けとしようとした。しかし日月が次第に経過し、今になつても十分の二も出来ていない。そこで今春(一九〇二年の春)に『新民叢報』を作り……(5)

と、『中国史叙論』の目的が愛国思想の發揚にあることを述べている。梁啓超自身その目的を明言していながらも、從來この点については論じられてこなかったように思われる。例えば、吳天任編『民國梁任公先生啓超年譜』の中では、

去年（一九〇一年）以来、先生（梁啓超を指す）は大変史学に志した。去年には『中国史叙論』の一文があり、その上今年は『新史学』の一篇を書いた。これらは先生が中国通史を書く準備の基である。『新史学』での主張は、多くは西学の新説を採用し、そこへ卓越した先生の見識が加えられている。そのため、これらの文は中国の旧史を整理する仕事に対して、極めて大きな貢献と助けになるものである。（9）

とあるように、梁啓超がこの論文を書いた愛国思想發揚の目的には触れていない。

また竹内弘行氏の「梁啓超と史界革命——『新史学』の背景をめぐって——」の中では、

ここ「『新史学』を指す」に述べられている諸論点の一部は、すでに一年前の「中国史叙論」や二年前の「紀年公理」にみえている。また、「新史学」と同時期に發表された「東籍月旦」（日本の書籍に対する批評……）では、倫理学の書二十部と共に歴史書五十部の紹介批評をしていて、梁啓超の歴史に對する關心の篤さをしのばせるだけでなく、「新史学」執筆のために依拠した書物を具体的に知ることができる（10）

と『新史学』の理論がすでに『中国史叙論』の中に見られるという指摘に止まっている。ただし許冠三氏のように『中国史叙論』が愛国思想發揚を目的としたものであることを指摘しているが、単なる指摘で終わっている。（8）

そこで本稿では從來あまり言及されることの無かった『中国史叙論』の執筆動機について考察する。またそれによつて梁啓超がもともと考えていた史学とは何なのかをはつきり

させるための一端としたい。

また本題に入る前に、『中国史叙論』の内容について、簡単に触れておきたい。詳細については第二節で述べるので、そちらを参照されたい。

『中国史叙論』は八節からなるが、梁啓超はまず歴史というものは、過去の事実のみを記すのではなく、社会の進歩を記すものであること。世界の中における中国の位置がどのようなものであるか。中国の地理的範圍と地理環境がどのようなものであるか。中国の構成種族。紀元の設定。有史時代の設定。中国史を三区分したうえで、中国はいずれ立憲政体へと変遷していくという考えを見ることができると述べている。

三

前述した通り、梁啓超が『中国史叙論』を著した目的は、彼の『三十自述』によれば、「中国通史を起草し、愛国思想發揚の助けとしよう」としたところにある。もしそうであるならば、梁啓超が何故この時期に愛国思想の發揚を必要としたのか、ということを考えなくては、なぜ史学によつてそのような思想を發揚できると考えたのかを考察しなければならぬ。

そこで梁啓超が『中国史叙論』を發表した時期に、彼が愛国思想に関する問題を取上げた論文に言及する必要がある。梁啓超には『中國積弱溯源論』という論文がある。そのなか

の第一節「積弱之源於理想者」の中で、中国が日清戦争以来、中国が弱体化の一途たどつた理由を愛国思想に関連させて次のように述べる。

中国人の頭にある社会通念(9)には、もとより素晴らしくて尊ぶべきものも少なくない。しかし間違つていて改めなければならぬものも大変多い。西洋人や日本人は常に中国人には愛国心がないと言う。この言葉を私はもとより受け入れはしない。要するに我が国民の愛国心は西欧諸国、日本に比べて特に薄弱である。これは確かに隠して言わないでおくことは出来ない。国を愛する気持ちが薄弱であるのは、確かに衰退の一途をたどつた最大の根源である。私はあれこれ考えて、薄弱となる理由を研究してみた。そしてそれが社会通念の誤りにもとづくことが分かつた。それには三つある。(中略)

一つには国家と天下の区別を知らないこと。中国人は今まで国が国であることを知らなかつた。我が国は古より統一されている。周りはすべて小さな蛮族であつた。そこには文物もなく、政治体制もない。それが国であるとしなかつた。我が民も同様に対等の観点から見なかつた。それがために我が中国では数千年來常に独立した状態であつた。我が民は禹域(中国)と称した。これを天下と言つて、国とは言わない。国が無い以上、どうして愛することができよう。(中略)

二つには国家と朝廷の境界線を知らない。我が中国には最も奇妙なことがある。それは数百兆の人間がこの世界で国を立てて数千年経つのに、今まで一つとして国名が無いことである。さて、ところで支那と言つたり、震旦と言つたり、釐拿(10)と言つたりするのは、他の民族が我々のこと呼んだ呼び名である。これは我が国民が自ら名

付けた名前ではない。唐・虞・夏・商・周・秦・漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋・唐・宋・元・明・清というのはみな王朝の名であつて、国の名前ではない。考えてみると数千年來、国家があるというのを聞いたことがない。ただ朝廷があるのを聞いただけである。王朝の交代ごとに、国も称号が、これとともに変わるのである。大いに驚き、悲しむべきことではないか。そのため、我が国民の大きな憂いは国家が何であるのかを知らぬ事にある。そのため国家と朝廷を混同してしまふのである。

三つには国家と国民の關係を知らないということである。国というのは民が集まつて成立したものである。国家の主人は誰であらう、国の民である。そのため西洋では常に君主は官吏であり、国民の公僕であると言う。一般に官吏は公務を民に文章で示す。その文章の最後に自ら「あなたの下僕某々」と署名するのである。考えてみるとそれは職分がそうさせるのである。その民が無理に尊大ぶっているのではない。国民全体を尊重して、侮るようなことをしないからである。つまり国家の基礎を強固に守つて、壊させないにするためである。意外にも我々中国人の社会通念とはこの点で大いに異なるのである。(中略)

以上の三点が、実に中国における弊害の端緒であり、病原の源である。(二)

要するに梁啓超は中国が弱体化の一途をたどつた理由の一つとして、国民に愛国思想が薄弱であることをあげる。また愛国思想が薄弱である理由として、国という概念が無いだとしてゐる。つまり「国家と天下の區別を知らない」、「国家と朝廷の境界線を知らない」、「国家と国民の關係を知らない」というこの三つが欠如しているために、国民には国家という概念がなく、また国家を愛するという愛国思想が生まれないので梁啓超は

考えている。

要するに、愛国思想を發揚するにしても、もともと中国には国家という意識が存在しないのであるから、發揚させようがない。そのため国家意識を發揚するためには、まず国家という意識を民に持たせなければならない。そこで梁啓超は中国とは何か、中国とは地理的、歴史的、民族的に、世界的にはいかなる国家であるのかという意識を民に持たせるために、この史学という部門を利用し、それによつて、最終的に愛国思想を發揚させるための手段としたのではないかと考えられる。それは『中国史敘論』の「中国史之範圍」、「中国史之命名」、「地勢」、「人種」の各節を見ても分かることである。(12)

四

さて以上、簡単に見てきたわけであるが、従来『中国史敘論』は『新史学』とならんで、史学理論書という形で論じられてきた面がある。しかし梁啓超自身、その目的は愛国思想の發揚にあると述べていたにも関わらず、その点について触れられることはほとんどなかったといえる。最終的に『中国史敘論』は史学理論書になつてしまったのかもしれないが、それではある意味梁啓超自身の意図を汲まぬ形となつてしまうであらう。

梁啓超がこの『中国史敘論』を發表した真の意味というのはやはり中国という天下という概念の中で括られてきたものを国家という概念で捉え直し、そこから国家意識を持たせ、それによつて愛国思想を養つて行こうとしたのが、彼の本来の目的であつたと考えられる。

またそのような考えは『中国史敘論』の半年後に発表される『新史学』のなかでも同様である。梁啓超は『新史学』の「中国之旧史」のなかで次の様に論じている。

今日西洋で通行している諸学問の中で、中国に固有のものは史学だけである。史学とは学問のなかで最も広く、きわめて大切なものである。国民の明鏡であり、愛国心の源泉である。(13)

このことから考えても、梁啓超がこの時期史学に対して考えていたのは、あくまでも史学によって、中国を国家概念で捉え、それによって国家という意識を形成し、最終的には愛国思想を発揚し、中国の弱体化に歯止めをかけようと考えていたのではないかと推察される。

第二節 日本の明治期の歴史学が梁啓超に与えた影響について

一

梁啓超の『新史学』の成立に当たっては、日本の明治期の歴史学の影響があることは、すでに竹内弘行氏に論考があることは前節でも述べた。(14)

またこの点について、手代木有児氏は『東籍月旦』の書籍と『新史学』に関して

それらの文献に当たってみると、歴史とは国家、国民の進歩発展の諸現象の中に一定の法則性を考究するものとする、ほぼ共通した歴史への定義が見出せる。「新史学」に示された梁啓超の新たな歴史意識が、こうした明治期の教科書に見られる歴史意識を多分に吸収している」(15)

と述べている。

両氏共に『東籍月旦』中の著作と『新史学』の直接的な影響について言及されているが、それでは、『新史学』の前年に書かれた『中国史敍論』には、『東籍月旦』に紹介された著作の影響はないのであろうか。竹内氏は『新史学』に述べられている諸論点の一部は『中国史敍論』にもみえていると指摘された。もし『中国史敍論』に『東籍月旦』に紹介された著作の影響があるとするならば、『新史学』の成立を考える上でも、この『中国史敍論』を深く分析する必要があるであろう。また、『中国史敍論』と『新史学』がともに当時の日本の歴史学の影響をうけているならば、梁啓超がこの時の歴史学をいかに受容していっ

たかの状況を示す資料にもなるであろう。また管見する限り、『中国史敍論』と『東籍月旦』に紹介された著作の影響関係についての論文はないように思われる。そこで本節では、『中国史敍論』と『東籍月旦』に紹介された著作の影響関係について言及し、梁啓超の『新史学』への過程の一考察としたい。

二

梁啓超が一九〇一年四月、日本に再び戻ってきて、愛国思想発揚の為に、中国通史を想起し、五分の一程しか出来なかったことが梁の『三十自述』に書かれていることは前節でも述べた。(16)『中国史敍論』は一九〇一年に発表されているが、これが『三十自述』に言う中国通史の叙論にあたるものなのかは未詳である。しかしもしそうであるならば、『中国史敍論』は愛国思想発揚の意図のもとに書かれたことになるだろう。この『中国史敍論』を史界革命を意図した『新史学』にどのように生かしていったのかは第三節で論じることにする。

まず『中国史敍論』の内容については触れておきたい。その内容については、第一節の二で簡単に述べたが、ここでは詳細には論じておきたい。

『中国史敍論』は八節から構成されている。それを順に挙げれば、

第一節 史之界説

第二節 中国史之範圍

第三節	中国史之命名
第四節	地勢
第五節	人種
第六節	紀年
第七節	有史以前之時代
第八節	時代之区分

の八節である。これは後述するが、この構成及び内容面共に少なからず『東籍月旦』で紹介された日本の歴史書の影響があると思われる。それについては次項で言及する。さて、八節それぞれの内容に関して、順次を述べることにしたい。

梁啓超は第一節の「史之界説」で次のように述べる

史とは世の中の過去の事実を記述するものである。そうではあるが、世界の學術が日々進歩することにより、近年の歴史家の本分とそれ以前の歴史家とは異なるのである。以前の歴史家は事実を記載したに過ぎないが、近年の歴史家はその事実関係とその原因結果を説明するのである。以前の歴史家は世間の一、二の有力者の興亡の事を記述するに過ぎない。名目上は歴史ではあるけれども、実はある一族の家系図に過ぎない。近年の歴史家は必ず世の中全体の動きと進歩を探るのである。中国には以前歴史がなかったの経歴及びその相互の関係について論じるのである。中国には以前歴史がなかったというのほとんど誤りではないであろう。(17)

梁啓超は従来の歴史と近年の歴史の違いとして、従来の歴史は世の中の過去の事実を記載するだけであるが、近年ではその事実関係を説明し、必ず社会全体の動きと進歩つまり、

国民全ての経歴及びその相互の關係を探るのだと述べる。そしてその点から見れば、中国には以前歴史というものがなかったと考える。

また梁啓超はドイツの哲学者埃猛埒濟（原名未詳）の意見を引き、従来の中国の歴史書に欠けている要素を次のように指摘する。

ドイツの哲学者埃猛埒濟は「社会の發達には總じて五つある。一に智力、二に産業、三に美術、四に宗教、五に政治である。」歴史書を作り、読む者はこの五つについて、一つでも疎かにしてはいけない。いま従来の中国の歴史書で、一冊でこの五徳を具えたものとはより殆ど見ることは出来ない。その一つでも専ら詳細にしたものも殆どない。(18)

とあるように梁啓超は従来の中国の歴史書に足りない要素を論じる。なお脇道にそれるが、翌年に書かれた『新史学』の「中国之旧史」のなかで、旧史の欠点を挙げてくる。内容は異なるが、発想としては、『中国史叙論』『史之界説』が基になっているのかも知れない。

第二節の「中国史の範圍」では「中国史與世界史」、「中国史與泰東史」の二項目に分けて論じる。まず「中国史與世界史」では、

今世界史を著そうとする者は、必ず西洋を各国を中心とする。これは日本やロシアの歴史家と雖も（世界史を著したものはすべて日本とロシアを排除して載せない）異論がない。考え。てみると現在過去を通じて文明の力を伸ばして世界を左右したのは実に西洋の民族で、他の民族は彼らと争うことは出来ない。西洋人は「世界の最初の文明發祥地として一に小アジア、二にエジプト、三に中国、四に印度、五に中央アメリカの文明五つがある。二つの文明を持つ地域がぶつかる毎に、その文明力がますます

す表れる。現在世界を左右する西洋文明というのは、小アジアとエジプトの文明を融合させたものである。今より以後、実に西洋文明と東洋文明（＝中国の文明）が落ち合うの時代であり、しかし今日が初めての交点である。だから中国文明の力はまだ必ずしも世界を左右出来なかつたのであるが、中国史は世界史の中で大きな地位を占めるべきなのである。しかしこれは将来必ずその状況になるということであつて、過去において終わつたことではない。それ故今日の中国史の範圍は、世界史の外にあるとせざるをえない。（19）

と述べ、中国史は日本やロシアと同じく世界史の中に入れることは出来ないと述べる。なおこの考え方は天野為之の『萬國歴史』序文の影響を受けているのかもしれない。その点に関しては次項で論じる。また世界史の中に入るか否かという考えは『新史学』の「歴史與人種之關係」の人種を「世界の人種」と「非世界史の人種」の二つに分ける考え方にながつていくのではないだろうか。

二項目の「中国史與泰東史」は日本人が東洋史のことを「泰東史」と呼ぶ。この「泰東史」の名称を使わないのは、「泰東史」の範圍が中国史の範圍を越えるからであると説明する。

第三節の「中国史之命名」で、梁啓超は

我々がもつとも恥ずべき事は我が国に国名がないということにおよぶものではない。一般の通称では諸夏、漢人、唐人と言うが、みな王朝名である。外国人が呼ぶ震旦、支那は我々が自ら名付けたものではない。夏、漢、唐と自分たちの歴史に名付ければ、国民を重んじる宗旨に逆らうことになる。また震旦、支那などと自分たちの歴史にな

づければ、主人に従うという公理を失うことになる。中国、中華と言うのは、さらに尊大ぶっているのを免れず、譏りを残すことになる。とは言え、ある姓の王朝名を使えば、我が国民を侮辱することになって良くない。外国人が仮の名を使っても我が国民を欺くことになりよくない。これら三者どれも適正を欠く。そこで本当にやむおえず、我々が呼び慣れているものを使つて、中国史と言うことにする。(20)

と述べ、中国史と名付けた理由を説明する。

第四節の「地勢」では、中国の地理、そして地理と歴史との関係という二項目に分けて説明する。まず前者は中国史で扱う地域を中国中心部、新疆、青海、西藏、蒙古、満州の五地域にわけ、山川、砂漠を使つて地理を説明する。そして後者の地理と歴史の関係について、

地理と歴史は最も密接な関係にある。これは歴史を読む者に最も留意されなければならない。高原は牧畜業に適し、平原は農業に適し、海浜河川は商業に適す。寒帯の民は戦争に長じ、温帯の民は文明を生み事ができる。そもそのこれはすべての地理歴史の原則である。(21)

との述べ、中国にはこれらの満たす地理的条件が全て整っていることを説明する。そして歴史の問題に触れ、「中国文明はなぜ小亜細亜の文明、インドの文明と合流して繁栄した文明を作らなかつたのか」、「どうして数千年来常に南北が分かれて対峙した状態になつていたのか」、「明以前ははどうして北方より起つたものの勢いが常に長く、南方より起つたものの勢力が短いのか」、「東北地方の胡はどうして二千年余りにわたつてかわるがわる中国を奪い取りに來たのか」、「他民族が中国にひとたび入ると、どうしてその

本姓をすぐに失ってしまうのか」、「各省の地方自治制度は、どうしてこんなにも早く発達したのか」、「どうして数千年にわたって君主專制政治のもとで縮こまっていたのか」、「どうして権力を国外に拡張できなかったのか」、「どうして近年の状況は常に昔と相反するのか」という問題を地理的条件に関連させて説明する。

第五節の「人種」では、

人種の区別は今日万国で論争されている。西洋人は世界の人種を五種、または三種、または七種に分類している。そして通称我々黄色人種は蒙古種だという。しかしこれは西洋人が東方の実状に暗く、間違った話である。さて中国史の中の各人種を考えてみると、数十は下らない。明らかに関係のあるものでも六種いるであろう。(22)

のように人種の分類の諸説を挙げ、東洋の人種の分類に異を唱える。そして苗族、漢族、^{チベット}図伯特種、蒙古種、匈奴種、^{ツングース}通古斯族の六種を挙げて説明する。また人類の起源にも触れ、世界の人種が一男一女から生まれ、それが広がって行つたという説と各種族が各自で発生したという両説を挙げる。

なお、この人種の説明については、桑原隲蔵の『中等東洋史』を参考にしたように思われる。このことは次項で論じる。

第六節の「紀年」では、

紀年とは歴史の符号である。記録考証において、最も欠くことの出来ない道具である。地理によって空間の位置を定め、紀年によって時間の位置を定めるのである。この二つはともに歴史上最重要のものである。(23)

とあるように、時間軸を定めるものとして、地理の機能同様、重要視すべき道具としてと

らえる。また梁啓超はバビロニア、ギリシア、ローマ、イスラム、ユダヤでの紀元、そして西暦の例を挙げ、西洋の記念は煩雑なものから簡便なものへと改良されていったが、中国のものは、皇帝が死ねばそのたびに変わってしまうので不便であると説明する。そこで梁啓超は東洋の教主の中で中国第一の人物であり、中国史で記すべきことは孔子以後にあるとし、孔子の生年を紀元に定める。

この紀年の考えは『紀年公理』(24)を踏まえてものであろうし、『新史学』へと補足を加えながら受け継がれて行く。

第七節の「有史以前之時代」において、梁啓超は有史時代をどこにおくかを述べる。梁啓超は洪水のあった時代を世界共通のものであるから、洪水以前を無史、以後を有史の時代とする説を挙げるが、洪水の起源及びその経過には諸説紛々としているため、洪水が退いた時を有史の時代とするのが良からうとする。中国で洪水のあった時代として禹の時代をあげるが、中国にはそれ以前に三皇五帝の時代があり、その中でも黄帝は中国人の開祖洪水の時代からもさほど離れておらず、司馬遷の『史記』でも黄帝から始まっているので、黄帝以後を有史時代とする。

また考古学の考え持つてきて有史以前の時代を石器、銅器、鉄器の三期に区分して説明する。

また社会学の原則を持つてきて、社会は三種の一定時期を経過して後に大きな結束の堅い団体を構成すると述べる。第一期は独立した個人が有事にあり、酋長を立てる時期。第二期は、豪族が政治をとり、上には君主を置き、下では人民を指揮する時期。第三期は中央集権が固まり、君主一人が独裁をする時期。

またその社会の中で、三種類の人物が表れる。一つは大多数の集団に従う者で、将来の人民となるもの。二つ目は、団体を率いる少数のもので、豪族となるもの。三つ目は最も少なく、事務を執行するもので、将来の君主となるものである。と説明する。

第八節の「時代之区分」で梁啓超は時代区分についてこのように論じる。

数千年の事跡を叙述するのは漠然としていて、一つのこれを貫く眼目もない。これは著者読者にとって苦しいことである。それ故、時代の区分ということが起こるのである。中国の二十四史は王朝ごとに歴史書を作る。「資治」通鑑のようなものは、通史と呼ぶ。しかしその時代区分は「周紀」、「秦紀」、「漢紀」といった名称をもつてする。これは中国の先人たちの智慧であるが、ただ君主の存在を現すだけで、国民の存在を現していない。西洋人の著す世界史は常に上世史、中世史、近世史等の名称で区分する。そうではあるが、時代と時代と連続しているのである。歴史には隙間は無いのである。人間社会の事変には必ず終始因果の關係がある。それ故その間にはつきりと境界線を敷こうとしたら、二カ国が国境協定を決めるようなものである。これは道理として許されないことである。それ故歴史家はただ便宜上、その事変で大きなもの、社会に影響あるものについて各人の見解で、簡単に分け、読者に便宜をはかるのである。独断と言われるかも知れないがやむを得ないのである。(25)

梁啓超はここで王朝毎に分ける従来の中国史の時代区分と事変や社会影響によって便宜上わけの西洋式の時代区分の方式を取り上げる。梁啓超は西洋式の方法で中国史の時代区分を上世史（黄帝から秦の統一）、中世史（秦統一以後清代乾隆帝の末年まで）、近世史（乾隆帝の末年以後現在）の三分に分ける。

以上、『中国史敍論』の内容について考察したが、果たして梁はどのような中国史を書くか、こうとしていたのであるか、当然本編は存在しないので、具体的な中身は分からない。ただ梁がどのような史書を書こうとしたのか、またそれと同時に旧来の史書をどう見ていたのかということが伺える。それをまとめてみれば次のようになるだろう。

① 旧史の対象は君主であつて、国民はその対象ではない。

② 旧史はたんに過去の事実を記載したに過ぎず、その事実が起きた因果関係についての考察がない。

③ 旧史に社会の発達を示す要素が殆どない。

またこの逆を考えれば、梁啓超が『中国史敍論』の中で書こうとした史書が何であつたのかが推測ができるであろう。

三

ここでは、梁啓超が『中国史敍論』を書くに当たつて、影響を受けたと思われる著作を『東籍月旦』に紹介された著作に限定して論じる。なお、ここで言う影響とはあまり厳密な意味で使用しているわけではない。発想のヒントになつたものは言うまでもなく、単に、引用したもの、または要約したと思われるもの、表現の類似するものなども含めて影響と考えていく。なお、『東籍月旦』で紹介された書物は歴史書だけでも五十冊ある。本来であれば、それらを総覧して初めて論じるべきであるが、そう簡単には出来ない。遺漏が当

然あるかと思うが、その点はお許し戴きたい。

a 体裁に見られる影響。

すでに述べたが、『中国史敍論』は八節より構成される。繰り返しになるが、それをも一度順に挙げれば、

第一節 史之説

第二節 中国史之範圍

第三節 中国史之命名

第四節 地勢

第五節 人種

第六節 紀年

第七節 有史以前之時代

第八節 時代之区分

である。この構成に関しては、次に述べるいくつかの著作の序論、総論、緒論等の構成の影響があるのではないだろうか。

①桑原隲蔵編『中等東洋史』(26)は尋常中学の歴史教科書として編纂されたものであるが、その「総論」の構成を見ると次のなっている。

第一章 東洋史の定義及び範圍

第二章 地勢

第三章 人種

第四章 時代の分割

② 今井恒郎編『萬國史』（27）も尋常中学校の教科書として編纂されたもの、その総論の構成は次の通り。

歴史の定義

歴史の範囲

史体の変遷

歴史の補助科学

人間の起源及び種族の区分

歴史以前の時代

上古人民生活の状態

歴史時代の区分。

③ 元良勇次郎、家永豊吉合著『萬國史綱』（28）は尋常中学校五年級程度の教科書として編纂されたもの。その「緒論」の構成は次の通り。

歴史の定義

史体

歴史觀察の要点

文明と地理との関係

人類の起源

人種の區別

史期の區別

②、③で挙げた構成は、出入はあるものの、他の書籍にもだいたい共通して見られる。

これはあくまでも構成上よりみたものではあるが、『中国史敍論』の第三節の「中国史之命名」、第六節の「紀年」、第七節の「有史以前之時代」はないが、梁啓超は『中等東洋史』の体裁を基準にし、他書を参考にして、『中国史敍論』の構成を考えたのではないだろうか。これはあくまでも推測であるが、中国史の教科書を作ろうと考えていたのかも知れない。その敍論を書くに当たって、日本の歴史の教科書を参考にしたのかもしれない。

b 第一節 史之界説に見られる影響

前述したが、梁啓超は従来の歴史というものは過去の事実を記述したものであるが、近年の歴史では事実の原因結果を説明するものであると考えた。

このような考えは例えば、先に挙げた元良勇次郎、家永豊吉合著『萬國史綱』の「史体」の項目に

史体ニ二アリ、曰ク古、其の所謂古体ナルモノハ王侯将相ノ政策偉蹟、交戦ノ勝敗等ノ状況ヲ精細ニ叙記スルヲ以テ要トス、叙事史体即チ是也、其ノ所謂新体ナル者ハ精確ニ事実ノ実蹟ヲ叙述シ、加之評論ヲ下シ得失ヲ辨ジ、以テ原因結果ノ迹ヲ覈力ニスルヲ務メ、而シテ又文物風教ヲ講スルヲ以テ要トス、文明史体即チ是也、支那日本旧来ノ史ハ皆古体也、欧州ノ歴史中ニモ又古体ヲ用イタルモノ鮮ナカラズト雖モ近年に至テハ古体漸ク廃タレ、其世ニ見ルハルモノハ概ネ新体ニ則ルヲ常トス(29)

まったく同じという訳ではないが、新体である文明史体の考えの影響を梁啓超は受けたのではないだろうか。

また辰巳小次郎・小川銀次郎合著の『萬国史要』(30)総論の「歴史定義」で

歴史は精確に人類の行為経歴を記るし、其事変前後の関係因果を明らかにするの記録とす。(31)

また前述した今井恒郎の『萬國史』緒論の「歴史の定義」で

歴史は即其因果の関する所、大勢の趨く所を明らかす。……曰く歴史は人間(社会・国家)の変遷進歩を序する所の記録なりと。(32)

また『萬国史要』、『萬國史』での歴史の定義なども参考になつてゐるのかも知れない。なお参考までに、『萬国史要』、『萬國史』での歴史の定義は遅くとも日本では明治一九(一八八六)年頃にはあつた考えられる。大久保利謙氏は

三宅「米吉」博士の「日本史學提要」(33)(明治十九(一八八六)年刊)……實證主義の史学の生んだ傑作である。卷頭を飾る緒言にはその方法論が展開されてゐる。先づ支那風の歴史叙述を甚だ不完全なりと批評し、歴史は社會全體を取り扱ひ、以て人類開進の大道、社會變遷の法則を稽查發見に努むる學問とする。(34)

と述べておられる。『萬国史要』、『萬國史』などの尋常中学の教科書に掲載される程であるから、すでに梁啓超が述べたような歴史の定義は日本で一般的なものだったかもしれない。なおこれは前章でも「史之界説」でも論じたが、梁啓超は中国史学に智力、産業、芸術、宗教、政治学の五項目が欠けていると指摘した。梁啓超が『日本史學提要』を読んでいるかは別として、当時の日本の歴史学の考え方に触れ、中国史学の欠点を認識したのかも知れない。

c 第二節の中国史之範圍に見られる影響

梁啓超は日本、ロシア同様に中国史は世界史の中には入らないと考えた。これは文明の力によつて世界を左右した西洋と対抗できないような国は対等にならないということなのであろうか。

天野為之は『萬国歴史』の原稿を友人に見せ、萬国歴史といいながら、日本、朝鮮、支那が入っていないのはおかしいのではないかと質問され、その弁明を『萬国歴史』の序文(35)にこう書いている

西洋ノ文明ハ實ニ世界萬國ノ上ニ其影響ヲ及ホシ世界發達ノ傾向ヲ指揮スル勢力アレトモ悲ヒカナ東洋ノ文化東洋ノ人民ハ世界全体ノ大運動ニハ秋毫モ關係ヲ有セスシテ萬國歷上ニ其名ヲ留ムル丈ケノ功績アラサルヲ如何センヤ……若シ萬國史ノ中ニ赫々トシテ世界ニ對シテ大關係アル人民トナラシムルノ外ナシ……

とあるように、梁啓超は『萬国歴史』の序文を読み、敢えてへ世界史の中からはずしたのかも知れない。前述したようにもし『中国史敘論』が愛国心發揚を目的としたなら、非常に効果的ではあつたろう。

d 第四節の地勢に見られる影響

ここで梁啓超は中国の地形について論じたものであるが、前述した桑原隲蔵編『中等東洋史』の総論第二章地勢の影響が強いようである。ここでは便宜上『中国史敘論』の原文と並べ論じる。

①『中国史敍論』の原文

中國史所轄之地域。可分為五大部。一中國本部。二新疆。三青梅西藏。四蒙古。五滿洲。(36)

『中等東洋史』の原文

支那帝国は通例之を支那本部、青海、チベット、チベット、新疆、蒙古及び滿州に分つ。(37)

②『中国史敍論』の原文

東半球之脊。實為帕米爾高原。亦稱葱嶺。蓋諸大山脈之本幹也。(38)

『中等東洋史』の原文

葱嶺山脉は或は其付近一帯を波迷爾の高原と称し、実に亜細亞大陸の脊梁をなし、諸大山脈の本幹となる。(39)

③『中国史敍論』の原文

崑崙山脉復分為二。其一向東。其一向東南。向東南者名巴顏喀喇山。界青梅與西藏。入中國內地。沿四川省之西鄙。蔓延於雲南兩廣之北境。所謂南嶺者也。其向來者名祁連山。互青梅之北境。其脈復分為二。一向正東。經渭水之上流。蔓延於陝西河南。所謂北嶺者也。一向東北沿黃河互長城内外者為賀蘭山。更北為陰山。更北為興安嶺。縱

斷蒙古之東部。而入於西伯利亞。(40)

『中等東洋史』の原文

其脉遂二派に分かれ、一派東南に走るものは者は巴顏喀喇山と名け、青海と図伯特との界をなして、支那内地に入り、四川省の西辺に沿ひ、雲南、両広（広東広西）の北境に蔓延す。所謂南嶺なり。東に走れる崑崙山脉の一派は祁連山と名づけ、青海の北境をなし、其脉更に二派に分れ、一は黄河に沿ふて北に嚮ひ、賀蘭山となり、陰山となり、終に興安嶺となりて、蒙古の東部を縦断し、西伯利亞に入る。一は東に向ひ、渭水の上流地より、陝西河南の間に蔓延して所謂北嶺となる。(41)

① 『中国史敘論』の原文

蒙古及新疆雖為諸大河之發源地但其内部沙漠相連戈壁瀚海準噶爾之諸沙漠殆占全土之大半故河水多吸收於沙漠中或注瀉於鹽湖(42)

『中等東洋史』の原文

蒙古及新疆の地は、爾く諸大河の發源地たいりと雖ども、其内部には沙漠相連り戈壁、流砂、準噶爾の諸沙漠、殆ト土地の大部を占領するを以て、河水は多く沙漠中に吸收せられ、若くは沙漠中に散在する鹽湖に注瀉し、……(43)

このように順番や表記の違いはあるが、單純に翻訳したのではないかと思われる箇所も

ある。

e 第五節の人種に見られる影響

梁啓超は中国にいる人種を六種（苗族、漢族、チベット族、蒙古族、匈奴族、ツングース族）に分け、それぞれ説明を加えている。その説明の中でも前述した『中等東洋史』の人種の説明をそのまま引用したのではないかと思われる箇所がある。

これも原文と並べてみることにする。

①『中国史敍論』の原文

其三 図伯特種 現居西藏及緬甸之地。即殷周時代之氐羌。秦漢之際之月氏。唐時之吐蕃。宋時之西夏。皆屬此族。（44）

『中等東洋史』の原文

（第二）図伯特族 図伯特より迦湿迷爾、泥波爾、及び緬甸一帶の地に蔓延せる人種にして、殷周時代の氐羌、秦漢の際の月氏、唐時の吐蕃、宋時之西夏は皆族に屬す。（45）

②『中国史敍論』の原文

其四蒙古種 初起於貝加爾湖之東隅一帶。次第南下。今日蔓延於內外蒙古及天山北路一帶之地。元朝即自此族起。混一中國。威震全地。印度之謨嘉爾帝國。亦此族所建設也。(46)

『中等東洋史』の原文

(第六) 蒙古族 もと西伯利亞の貝加爾湖の東辺一帶に蕃殖し、其後次第に南下し、今日にては内外蒙古より天山北路一帶の地に蔓延せり。元朝は此族より起りて、殆ど世界を統一し、印度の莫臥兒帝國も亦、此族の建設する所に係る。(47)

③ 『中国史敍論』の原文

其五匈奴種 初蕃殖於内外蒙古之地。次第西移。今自天山南路以至中亞細亞一帶之地。多此族所占據。周以前之獯狁。漢代之匈奴。南北朝之柔然。隋之突厥。唐之回紇。皆屬此族。現今歐洲土耳其國。亦此族所建立也。(48)

『中等東洋史』の原文

(第七) 土耳古族 もと内外蒙古之地に蕃殖せしが、次第に西に移り、今日にては天山南路より、中央亞細亞一帶の地は、多く此族の占領する所たり。周以前の獯鬻獯狁、漢代の匈奴、南北朝時代の柔然、隋代の突厥、唐の回紇等は皆此族に屬す。現今の歐洲の土耳其帝國も亦、此族の建設する所に係る。(49)

④『中国史敍論』の原文

其六通古斯族 自朝鮮之北部。經滿洲而蔓延於黑龍江附近之地者。此種族也。秦漢時代之東胡。漢以後之鮮卑。隋及初唐之靺鞨。晚唐五代之契丹。宋之女真。皆屬此族。今清朝亦自此興者也。(50)

『中等東洋史』の原文

(第五)通古斯族 朝鮮の北部より滿洲を経て黑龍江附近の地蔓延する人種にして、秦漢時代の東胡、漢以後の鮮卑、隋唐時代の靺鞨、晚唐五代の契丹、宋の女真是皆此族に屬し、当今の清朝も亦此の族より興りて、支那を一統せり。(51)

以上のように順番などは異なるものの、その種族の説明に関しては、『中等東洋史』を引用してきたものと思われる。

f 第八節 時代之区分に見られる影響

梁啓超は中国史の時代区分を上世史、中世史、近世史の三つに区分した。このような時代区分の方法は、例えば『萬國史要』緒言の「史期區別」でも古代、中世、近世と三つに分け、『萬國史』緒論の「歴史時代の区分」でも上世史、中世史、近世史、『新編萬國歴史』緒言の「歴史時代の區別」でも上世史、中世史、近世史と区分している。この三つの名称

も上述したよう、幾つかあるが、梁啓超がなぜ、上世史、中世史、近世史の名称を用いたかは分からない。単純に形だけをまねたのか、または他に理由があるのかもしれない。なお、『中等東洋史』では四区分している。『中等東洋史』をよく引用しながらもこの点に従わなかったのは内容上同意できなかったのかもしれない。

四

さて『中国史敍論』に見られる『東籍月旦』に紹介された日本明治期の歴史書の影響を論じてきた。以上のことを踏まえて見ると、梁啓超が『中国史敍論』を書くに当たってかなり桑原隲蔵の『中等東洋史』を参考にしたことが分かる。それは『中国史敍論』第四節の「地勢」第五節の「人種」の内容を見ても分かるであろう。特に第四節の「地勢」の前半部分は『中等東洋史』「地勢」の内容を再構築したのではないかとも感じられる。また他にも影響らしきものを受けたような形跡もある。梁啓超にとって、すべてを日本書に依拠しなければならぬとは、いったんどのように考えればよいのであろうか。梁啓超はこの『中国史敍論』で、「国民」を対象とした記述、単なる過去の出来事を記すのではなく、その因果関係の考察、社会の発展を記述するという発想はあっても、結局は意気込みだけで、実際にそれを実行出来るほどの水準に梁が達していなかったことを示すと言ってもよいであろう。

『中国史敍論』に本編が無かったのも、結局梁自身、どのよう
に書いたのか、想像に生きたのは間違いないであろう。ただこの
時の発想が約半年後に発表される『新史学』

第三節 「旧史」と「新史学」の「新」の解釈

—

ここでは、一九〇二年に梁啓超が『新民叢報』に発表した論文『新史学』（52）の「新」の考察を通して、梁がどのような史学を構築しようとしたのか、その発想または態度を明らかにしようとするところにある。

一般に「新」と言えば、その対義語として「旧」が想定され、さらに「新」は「新しくても良いもの」、「旧」は「古くて否定されるべきもの」というふうに捉えられ勝ちである。もしそういう前提に立つのであれば、梁の『新史学』は「新しい史学」と理解し、旧来の史学を否定するものと考えればよいであろう。

しかし本稿においては、『新史学』の「新」を前述の意味では考えない。結論を先に述べれば、梁啓超はこの「新」を「再構築する」という意味、つまり「史を再構築する学」という意味で使っているのではないかと考えられる。

『新史学』については、竹内弘行氏による「梁啓超と史界革命——『新史学』の背景をめぐって——」（53）という先駆的な研究がある。竹内氏はその中で、『新史学』について次のように指摘された。

「新史学」は新たに進化論という近代的世界観を絶対化し、その歴史学への適用と

いう理想、すなわち「歴史哲学」の下に、しかもその教条主義的性格を変えることなく「史界革命」、すなわち歴史学の革命を叫んで伝統史学を否定したものであった：「（一九四頁十五行～一九五頁一行）

竹内氏は「伝統史学を否定した」と指摘されるが、論者はこの点では見解を異にする。詳細は後述するが、梁は旧来の史の欠点は認めながらも、なおかつ、その再構築を考えていたと考えられる。

また手代木有児氏は「梁啓超——『史界革命』と明治の歴史学」（54）の中で『新史学』について次のように指摘された。

「新史学」には、伝統中国にない新たな歴史意識が見出せる。すなわち第一に、歴史を「一治一乱」ではなく社会全体の「進化」を叙述するものと捉え、第二に、その進化に法則性を見出すことによって「天下」ではなく「国家」「国民」の未来を導こうとする意識である。従って、歴史は「国民の明鏡」「愛国心の源泉」であり、これによって国民は団結し、群治はさらに進化するとされた。梁啓超は歴史を国民的アイデンティティの源泉として再発見したのだった。（八三頁一六行～八四頁四行）また

梁啓超は、「新史学」において、国民の進化に見出せる法則性によって国民の未来を導く歴史学を確立すべく、「史界革命」を提唱するにいたる。（八五頁九行～一〇行）

手代木氏のこの指摘について、基本的には異論はない。梁啓超が愛国心発揚のために中国通史を編纂しようとしたことは梁自身『三十自述』の中(55)で触れている。また旧来の史書の視点から離れて、進化論によって国民を中心とした歴史を編纂しようとしていたことは『新史学』にある通りである。ただここで一つ問題にしておきたいのは、進化論という視点から、国民を中心とした史書を作るというその新しい方法が、梁にとってどのような意味を持っていたかということである。これも後述するが、梁は旧来の史学とは違った別の視点から、史学を再構築しようとしたのではないかと考えられる。

二

ここでは梁啓超が『新史学』の「新」というものをどのように考えていたのかを考察することにした。ただ『新史学』の中で梁自身この「新」について定義はしていない。そこでこの「新」の字が前述したように、「再構築する」という意味を持つのかを梁の同時期の論文等によつて考察するしかない。

ちなみに梁の『新史学』が掲載された『新民叢報』以前に『知新報』(56)という雑誌が発行されていた。その誌名の英文タイトルは「THE REFORMER CHINA」である。このタイトルから分かるように、「新」を単なる「新しい」という意味ではなく、「再構築」の意味でも使っていたことが明らかであろう。

また梁啓超自身に即して言えばどうであらうか。この『新史学』が掲載された『新民叢報』第一号には『新民説』という梁の別論文が掲載されており、その第三節「釋新民之義」の中で、梁は「新」について次のように定義している。

新民というのは、我が民がことごとく古いものを捨てて、他のものに従うということではない。新の意味には二つある。一つは「もともと持っていたものを鍛え磨いて新しくする」ということである。もう一つは「もともと無かったものを他から取ってきて新しくする」ということである。この二つの中、一つでも欠けた時には効果はない。先哲が教育を行うというのは、その持ち前を延ばすことと氣質を変化させる二つの方法に外ならないのである。これがつまり我々がもともと持っているものを鍛え磨き、もともと無かったものを他から取って補うという説である。人がこのようなように、民も皆同様にそうなのである。(57)

また

古いものであっても、これを新しくすると言わないわけにはいかない。日々新しくすることは、正に古いものを完全に發揮することなのである。これを洗い拭って輝くようにし、鍛錬して本体を作り上げ、根本からしっかりと培養して、そのもとをしつかりさせるのである。そしてそれを更に成長させて、絶えず進むことを求める。国民の精神は、そこで保たれ、発達するのである。世の中には、「守古」の二文字を極めて憎むべき言葉とする者もあるが、本当にそうなのだろうか。私が心配するのは、「守古」ということにあるのではなく、本当に古いものを守ることができるものがないこと

を心配するのである。本当に古いものを守ることができるとはどういうことであろうか。つまり私が言うもともと持っているものを鍛え磨くということである。(58)

右のことから梁啓超は「新」を「もともと持っていたものを磨いて新しくすること、そして足りない要素があれば他から取ってきて新しくし、本来の能力を発揮させよう」という意味で考えていたと言えよう。

なおこの「新」の意味は、「新民」ということから分かるように、朱子の『大学章句』の三綱領の解釈に拠るものであって、けっして梁独自のものではない。梁を含む当時科挙を目指していた士人にとって、「新」を前述のように理解することは常識的なことであつたと言えよう。

またこの「新」の解釈は「新民」と言う意味のものではあるが、『新史学』が掲載された誌名はこの「新民」を冠した『新民叢報』である。このことを踏まえて見れば、『新史学』の「新」に前述のような意味が含まれていると考えることも十分可能であろう。

もしそうだとするならば、梁は旧来の史書に磨きをかけ、足らない要素があれば、それを他から足し、それによって旧来の史書を再構築して史書の本来の能力を発揮させようという意味をこの『新史学』の「新」に込めたと考えられないであろうか。そのことを『新史学』に即して、次項で論じることにはしたい。

前項では梁啓超が「新」をどのような意味で捉えていたのかを考察した。ここではその意味が、果たして『新史学』にも当てはまるのかを考察する。そのためには、まず梁が旧来の史学をどのような考えていたのかが問題になる。言い換えれば、梁が旧来の史学を否定していたのか否かということである。梁の旧来の史学に対する考えは、『新史学』の第一篇にあたる「中国之旧史」（『新民叢報』第一号）に見ることができ（59）る。その中で梁は旧来の史学について次のように述べている。

今日西洋で通行している諸学問の中で、中国に固有のものは、史学だけである。史学とは学問のなかで最も範圍が広く、きわめて現実性のあるものである。国民の明鏡であり、愛国心の源泉である。今日ヨーロッパの民族主義が発達し、列国が日々文明を發展させたのには、史学の功績がその半ばを占める。そうであるならば、その国はこの学問が無いことを心配すればすむことである。もしこの学問があるのなら、国民はどうして團結しないことがあるのか、「群治」がどうして進化するだろうか。しかしながら、我が国でもこの学問が西洋のように盛んであるのに、現状のようであるのは何故であろうか。（60）

梁は中国には西洋に匹敵するだけの史学がありながら、西洋とは違って、その効能が全く機能していないことを問題としている。このことから梁は旧来の史学を否定したとも取れる。しかしここでは、前節で述べた「新」の意に即すならば、本来中国には西洋に匹敵するだけの史学がありながら、その効能が発揮されないのは、史学そのものを磨いてこな

かったから、今のようないふ現状があるのだと解釈出来ないであらうか。

また梁はその原因として旧来の史学に見られる六つの欠点(61)を挙げる。その六つの項目とは a 「知有朝廷而不知有國家」、b 「知有個人而不知有群體」、c 「知有陳述而不知有今務」、d 「知有事實而不知有理想」、e 「能鋪叙而不能別裁」、f 「能因襲而不能創作」である。上述の a と d は従来の歴史家の学識によってもたらされる欠点であり、e、f は a と d の欠点によつて生じるものである。今これら六つの欠点それぞれについて具体的に言及し、梁啓超が捉えた従来の史学について考察する。

a 「知有朝廷而不知有國家」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

朝廷のあることは分かっているが、國家があることを分かていない。我々は常に言っている、二十四史は史ではないと。二十四姓の家系図でしかない。その言葉はやや妥当ではないかもしれない。しかし歴史を作るもの精神に照らせば、實際それよりもより嘘ではない。我が國の歴史家は、天下は君主一人のものである。そのため、歴史書を作る時には、ある王朝がどうして成立したのか、どのようにして治めたのか、どうして滅びたのかを述べるだけである。これを棄てたら、他に聞くことはない。……考えてみると、従来の歴史家は、皆朝廷の君主と臣下のために「歴史書」を書き、一冊として國民のために書いたことはなかった。その大きな弊害は朝廷と國家の區別を知らないことにある。……我が中國の國家思想が今になつても起こらないことに、

数千年來の歴史家が、その責任をどうして逃れることが出来ようか。(62)
つまり従来の史学は君臣の爲の歴史書であり、国民のための歴史書ではなかった。その
原因は歴史家が国家に対する認識がないことにあるとする。

b 「知有個人而不知有群體」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

個人の存在は知っていても、社会の存在を知らない。歴史とは英雄の舞台である。
英雄がいなければ、歴史は殆どない。西洋の素晴らしい歴史書であつても、どうして
人物に重きを置かないことがあるうか。よい歴史家は人物を歴史の材料とするが、歴
史を人物の肖像画とするのを聞いたことがない。人物を時代の象徴としても、時代を
人物の付属物とするのは聞いたことがない。中国の歴史書は本紀、列傳であり、どれ
も海岸の石の如く、ごたごたと積んである。ありのままに言えば、無數の墓誌銘が合
わさっているのだ。そもそも歴史を尊ぶのは、集団が交渉、競争、團結する道を述べ、
集団の休養して鋭気を養い、ともに進化していく様子を述べることが出来るのを尊び
後生の読者にその集団を愛し、その集団に親しむ心が自然とわき上がらせるようにす
るためだ。今の歴史家はいくらでもいるが、一人としてこの点に見るに及んだものは
聞いたことがない。これこそ我が国民の群力、群智、群徳が永久に起こらず、社会が
ついに成立しない理由なのだ。(63)

つまり従来の歴史家は個人というものを重視する余り、社会そのもののものに目を向けていない。そのため国民の群力、群智、群徳が育たず、社会そのものが成立しないのだとする。

c 「知有陳述而不知有今務」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

陳述することは知っているが、現在務めるべきことを知らない。一般に著書は目的を大切にする。歴史家はわずかな歴史上の人のために記念碑を作るのであろうか。わずかな過去の事のために歌舞劇をつくるのであろうか。それはほとんど間違いである。現在の人に歴史を手本とし、判断させて、社会の用とするからである。そのため西洋の歴史書は、最近になればなるほど、その記載は詳細になるのである。ところが中国はそうではない。革命がなければ、ある王朝の歴史書は出現しない。さらに正史だけでなく、他のものもそうでないものはない。……昔を知って今を知らない。これを陸沈と言う。そもそも陸沈は国民の罪であり、実は歴史家の責任である。(64)

つまり従来の歴史は西洋の史学と違い、現在を記載する事がない。そのため現在の人間に歴史を基準として判断させ、現在に生かすことが出来ないとする。

d 「知有事實而不知有理想」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

過去の事実があることを知っていても、未来に対する予測があることを知らない。……史学の精神とは何か。曰く未来に対する予測であると。大群の中に小群がある。大時代の中に小時代がある。群と群の間、時代と時代のつながり、その間には情報があり、原理がある。歴史家がもしもこれをしっかりと見抜き、そういった原因で、こういった結果がうまれたのだと知り、過去の大きな例に照らして、将来の風潮を示せてこそ、その歴史書は世界に有益となるのである。今中国の歴史はただ呆然と某日に甲の事が起きた、某日に乙の事が起きたと言う。しかしこの事が何故起きたのか、その間接的原因は何処にあるのか、直接的原因は何処にあるのかというについては言うことが出来ない。その事が他の事あるいは他日に影響を与えることについてどうか、よい結果が得られるのか、悪い結果が得られるのか、言うことが出来ない。……これ「溢れんばかりの史書」を読んだら頭が疲れてしまう。(65)

つまり従来の史学は過去の事実を記すだけで、その事の因果関係について考えていない。そのためそこから将来的に何が起こるかということを用意することはしないと考える。

e 「能鋪叙而不能別裁」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

叙述することは出来るが、取捨選択が出来ない。イギリスの学者スペンサーは「あるとき告げる者いた。隣家の猫が昨日一子を生んだ。事実を言うという点では事実で

ある。しかし役に立たない事実であることを誰が分からないであろうか。何故か。その事と他の事とは全く関係なく、我々が生活する上での行為において、全く影響がない。しかし歴史上の事柄というのは、そのような類が多く、……」これはスペンサー氏が人に歴史を書き、勉強する方法を教えたものである。西洋の古い歴史家もとよりこれをまぬがられないが、中国の歴史家はさらに甚だしい。某日に日食があった。某日に地震があった。某日皇子を立てた、某日某大臣が死んだ、某日ある詔が発令されたなどが紙を埋め尽くし、これらは隣家の猫が子供を生んだ事実である。いつも一卷を読み尽くしても、一語として頭に入れる価値が無い。……我々の中国史学の知識が普及しないのは、みな一冊でもよく取捨選択された史がないことによるのである。

(66)

つまり、従来の史学において事実は叙述されている。しかしその事が他の事に関連性がなく、記事そのものの取捨選択が行われていないとする。

f 「能因襲而不能創作」について

この点について梁啓超は次のように説明する。

踏襲することは出来るが、創作することが出来ない。中国ではすべての事がみな「述べて作らず」という主義をとる。それが史学の一端なのである。(67)

つまり従来の史学の一端は「述べて作らず」という考えであり、そこに創作が無いことを指摘する。

今、その内容を要約して挙げれば次の通りである。（以下に挙げる①から④までは「四蔽」、⑤と⑥は「二病」にあたる。）

①旧史は朝廷の君主と臣下の為に書かれたもので、国家に対する観念が無く、国民の為に書いたものではない。

②個人の存在に重きを置きすぎて、社会そのものへの視点がない。

③過去の事実の記載はあるが、現在の記載がない。

④事実の記載に重きを置いて、その事実が起こった因果関係について考えていないため、将来を見据える観点がない。

⑤事実の記述はあるものの、それは役に立たない事実で、その内容に取捨選択を加えていない。

⑥「述べて作らず」という考え方に固執して体裁を踏襲するだけで、そこに殆ど創造がない。

以上の六点をまとめると、梁啓超は従来の史学を以下のように分析していたと考えられる。(89)

つまり旧来の史学には、君臣関係という意識だけで、国家、国民という意識、社会そのものへの視点、現在の記述の欠如、歴史の因果関係、内容の選択、新たな創作という要素が欠如していることを指摘する。

これも一見すると梁啓超は旧来の史学を否定しているかにも見えるが、前節で述べた「新」の意味にあてはめるならば、本来中国では西洋に匹敵するだけの史学がありながら、それ磨かなかっただけでなく、旧来の史学に足りない要素を補って史学に磨きをかけなか

ったから駄目であつたのだという理解が可能ではないだろうか。

また逆の言い方をすれば、旧来の史学に磨きをかけ、また足りない要素は、それを他から補えば、旧来の史学はその本来の力を發揮させることが出来たと解釈出来ないであろうか。

また梁は先に挙げた六つの欠点の内、⑥の観点から次のように述べている。

詳細に二千年來の歴史家を調べてみると、やや創作の才能があつたものは六人だけである。一人目は太史公「司馬遷」であり、誠に史学界の創造主である。その書にも常に国民の思想がある。項羽のようなものが「本紀」に入つていたり、孔子や陳渉が「世家」に入つてゐる。……伝を立てたものは、おおむね時代と極めて関係のある人である。……二人目は杜君卿「杜佑」である。『通典』という作は、出来事を記さず、制度を記した。制度は国民全体の関係において、出来事よりも重んじられることがある。此より以前に無いものを杜は創つたのである。三人目は鄭漁仲「鄭樵」である。……その『通史二十略』は論断を中心とし、記述を補佐としてゐる。まことに中国史学界のために光明を放つてゐる。四人目は司馬溫公「司馬光」である。……その『資治通鑑』を指す一構成は壮大であり、その資料の豊富な事は、後生に通史を書くとうとするものがいれば、手本にしないわけには行かず、今に至るまで、これを超えるものはない。五人目は袁樞である。今日の西洋の史学は、おおむね「紀事本末」の体裁である。この体裁が中国にあるのは、実に袁樞が創つたのである。……しかし彼の著作『通鑑紀事本末』は事と事との相関関係を示したばかりか、その因果関係を求めようとした。……六人目は黄梨洲「黄宗羲」である。黄梨洲が書いた『明儒學案』は、歴

史家未曾有の大事業である。中国は数千年来、ただ政治史があるだけで、他は一つも聞いたことがない。梨洲が史学の標準を創り、もし後生の人間がその考えを手本にしたならば、中国文学史、中国種族史、中国財富史、中国宗教史を作ること出来たであらう。……」(69)

右のことから、旧来の史学には欠如している点を補う力があることを梁は示唆している。考えられる。例えば司馬遷の『史記』には国民の思想がある点、杜佑の『通典』には社会制度を記すという点、袁樞の『通鑑紀事本末』には歴史の因果関係が記されているという点は、梁が挙げた旧来の史学の欠点に対応する。梁は国民や社会、歴史の因果関係を述べるといふ意識はないと言いながらも、旧来の史学にもそういった意識を持っていた前例があることを指摘する。また黄梨洲の学案を手本にすれば、新たな史書を創作する可能性を示唆している。

梁は現在において、旧来の史学はその働きを発揮させてはいないが、その欠点を埋めるものを持つているのだから、必ずや再構築することによって旧来の史学はその本来の働きを取り戻すことが出来ると考えたのではないだろうか。

四

梁啓超は『新史学』の中で、「史界革命」ということを提唱した。しかしそれは竹内氏の言う「伝統史学の否定」ではなく、「史の定義の変更」という意味であらう。当時の梁

啓超は「国民」というものを想定し、その愛国心発揚のために、国民を中心とする史書編纂を考えていた。しかし、旧来の史学は「君臣関係」という枠組みからであるのではなく、それでは国民を中心とする史書を作成することは不可能と考えたのである。そこでどうしても「君臣関係」の視点という発想から離れる必要に迫られ、「史界革命」ということを提唱せざるを得なかったであろう。

しかしそれは旧来の史学を否定するということではない。中国にはもともと西洋に匹敵するほどの史学があり、また国民を中心とする視点から史書を書くものをもっている。であり、それらを磨くことによって旧来の史学に欠如した部分を補って、史学を再構築すること、旧来の史学が本来の力を再發揮出来ると発想したのではないだろうか。そういう意味において、『新史学』の「新」は、単に「新しい」という意味ではなく、「再構築する」という意味ではないかと考えられる。

まとめ

以上、『新史学』の成立について論じてきた訳であるが、梁啓超はこの『新史学』という論文によって、現代我々が言う史学や史学理論を構築することに目的があったのではない。梁の目的はあくまでも愛国思想発揚にある。国を愛するようにするために、まず「国」という概念を形成するために、史学を利用しようとしたのであった。

またその理論構築にあたっては、日本亡命時に見た日本書による影響が大きく寄与していることは言うまでもない。ただ梁自身がどれほど理解できたかということはかなり大きな疑問である。梁は確かに旧来の史学の視点から離れて、民の記述を中心に、社会の発展進化の過程を叙述しようとした訳であるが、実際には意気込みので、梁自身どのような史料整理して新しい基準で中国史を構築すればよいのか全く判断がつかなかったのでは無いだろうか。それは『中国史叙論』の内容が殆ど日本書からの引用のみで構成されていることから分かるであろう。

また梁啓超は日本經由で得た西洋の歴史理論を使って旧来の史学を否定したのではなく、それとは逆に、どうやって旧来の史学を再構築するかというのが梁啓超本来の考えであったといえるであろう。そのことから梁が「史界革命」を提唱したのは、中国史を再構築するのに、旧来の方法では不可能であったため、「史の定義」の変更を余儀なくされたのであって、それは決して旧史の否定ということにはならない。

第二章 「新史学」の周辺

前章においては、梁啓超の『新史学』成立について論じた。梁啓超が君子の記述を中心とし、一治一乱が繰り返される循環思想を持つ旧来の史書の視点から離れ、国というものを想定し、民の記述を中心に、社会の進化発展を記述する視点から、中国史を再構築しようというのが梁の言う『新史学』であり、またそのために「史界革命」（史の定義の変更）を提唱したのであった。このようなことがあって、梁啓超は中国における新史学の先駆者として位置づけられるわけである。確かに梁啓超の考えていけば、それは間違いではないが、実際に梁啓超の『新史学』が同時代に於いては、どのような意味を持っていたのであろうか。果たして梁の発想は当時において、かなり特異なものであったのであろうか。確かに梁啓超が『新史学』を発表後、その影響を受けて、「史」または「史学」に関する論文が発表されたことは確かである。しかし影響を受けるとするのは一方的なことではない。影響を受ける側にとっても、それなりの知識がなければ、その影響に対して反応すらできないであろう。また梁啓超の『新史学』を読んで、自身でもそれに対して論文を発表したということであれば、梁啓超ほどの知識や発想はないにしても、それに対応するだけの知識、関心があったといことになるであろう。もしそういうことであるならば、梁啓超が『新史学』で考えたことというのは、必ずしも特異なものではなく、同時代人においては、ある程度知られた常識的なことであったのではないだろうか。またよしんば梁啓超の『新史学』が影響を与えて、その後に、梁啓超のような発想をするものが出たとしても、それは単にそのきっかけを与えたに過ぎずない。

さて、そのことを考察するために、本章では章太炎、鄧實、馬叙倫を例に取ることにしたい。

第一節 章太炎について

一

ここではまず梁啓超を明らかに意識した章太炎の資料を取り上げ、考察することにした。章が梁を明らかに意識した資料としては「章太炎來簡 壬寅六月」が挙げられる。

章はこの書簡の中で、自身中国通史編纂の強い意志があることを表明している。章太炎がどうして梁啓超にそのような意志を伝えたのか、残念ながら未詳である。章太炎自身の手になる『自訂年譜』一九〇二年の項目を見ても、彼自身中国通史を編纂、または計画したという記事は一言もない。章太炎自身、梁啓超に対抗して作ったのかも知れないが、それはあくまでも推論でしかない。

また梁は「新史学」の前年発表した「中国史叙論」では通史を書くようとしていた。章も通史のこと言っている点から、章は「中国史叙論」を意識したものとも考えられる。

しかし、この書簡が発表されたのは「新史学」が発表された『新民叢報』第十三号（一九〇二年八月四日発行）である。この時期から考えて、章は第一号（一九〇二年二月八日発行）及第三号（同年三月十日）に掲載された「新史学」の「中国之旧史」及び「史学之界説」二篇を見ていた可能性がある。

章が「中国史叙論」のみを見たのか、それとも「新史学」のみを見たのか、それとも上述二論文を踏まえて、この書簡を梁に宛てたのかは未詳である。

しかし梁啓超と比較するという点においては、格好の材料と言えるであろう。

二 基本資料について

ここでは「章太炎來簡 壬寅六月」を初め、それに関連した章の史、特に通史に関する資料について言及する。

現在残されている資料としては大まかに言えば若干の書簡資料だけである。章太炎の著作には一九〇二年前後に出版された『嘯書』（一九〇〇年）及び重訂本『嘯書』（一九〇五年）（70）などがある。またここで用いる書簡資料の中には、重訂本『嘯書』に引用されているものもあるが、ここでは一九〇二年当時の章太炎の考えを考察するものであるから、敢えてこれらの資料には言及しない。

さて前述した書簡資料の中で、章太炎の通史に関する考えを考察する資料としては、大きく分けて二つある。一つは前述した梁啓超に宛てた書簡であり、一つは呉君遂（21）に宛てた書簡である。まずは梁に宛てた書簡について説明することにした。

a 梁啓超に宛てた書簡について

この書簡は「章太炎來簡 壬寅六月」と題して（72）『新民叢報』第十三号（光緒二十八

年七月一日・陽曆一九〇二年八月四日發行）の「名家談叢・飲冰史室師友論學牘」の欄に掲載されたものである。書簡冒頭に「（前略）」とあることから、全文は掲載していないと思われる。内容としては章太炎自身中国通史編纂の強い志があることを梁啓超に明言したものである。また章太炎が計画していたであろう中国通史の史目を知ることが出来る資料でもある。ただ残念ながら、章太炎が中国通史を編纂しようとした理由は書かれていない。

なお梁啓超は一九〇一年、中国通史を編纂する目的で『中国史敘論』という論文を『清議報』第九〇冊（一九〇一年九月三日）、第九一冊（一九〇一年九月十三日）に分載し、さらに『新民叢報』第一号より『新史学』という論文も分載している。もしかしたら章太炎はそのことに啓発されて中国通史を編纂しようとして試みたのかも知れない。だからこそ梁啓超にあえて手紙を送ったのではないかと推測される。また「章太炎來簡 壬寅六月」は章太炎自身の改訂を経て重訂本『廬書』哀清史第五十九の「附中国通史略例」の中に採録されている。

b 吳君遂に宛てた書簡について

一九〇二年当時、章太炎が通史に関する考えを示した資料としては吳君遂に宛てた二通の書簡が挙げられる。湯志鈞編『年譜長編』一九〇二年の項の「著作繫年」によれば、章太炎はこの年に八通の書簡を吳君遂に送っている。そのうち光緒二十八年六月二十五日（七

月二十九日)の「致吳君遂書八」と光緒二十八年七月五日(八月七日)の「致吳君遂書九」がそれに当たる。(73)この二通の書簡については湯志鈞編『章太炎政治論選集』に所収されている。(74)なおこれら書簡の原本は湯志鈞氏の調査に依れば、上海図書館に現存されているようである。論者も実際に上海図書館を尋ねて見たが、現在整理中ということで残念ながら現物を確認することは出来なかった。

ここでは、以上挙げた資料に基づいて、一九〇二年時の章太炎の通史に関する考えを考察することにした。

三

ここでは前述の資料に基づき、一九〇二年当時、章太炎が史または通史について如何に考えていたのかを考察してみたい。まず彼の考えを簡単に述べれば、三つの点に纏められるであろう。一つは通史によつて、社会と政治の進化と衰微の原理を書き表すこと。二つ目は国民の志気を高めること。三つ目は史書には進化論の原理が踏まえられていなければならないということである。詳細は後述するとして、まず初めに、章太炎の構想していた通史について論じることにした。そして次に梁啓超に宛てた書簡の分析と吳君遂に宛てた書簡の分析を順次述べることにしたい。

a 章太炎が構想した通史の体裁について。

『自訂年譜』一九〇二年の項目を見る限り、通史という言葉は出てこない。後年の彼にとつて、その当時通史を編纂しようとしていたことはすでにどうでもよくなっていたのかも知れない。ただし当時の章太炎はこの通史編纂を本気で考えていたと考えられる。章太炎は梁啓超に宛てた「章太炎來簡 壬寅六月」の中でこのように言っている。

酷暑の中、何事もなく、毎日各種の社会学の本を読んでいます。平素より中国通史を作る志がありました。現在、新旧の（史学）資料がまとめて使えるようになり、興味が盛んに沸いております。教育会が私に教育雑誌を作らせたり、新たに訳書局を作つて私に下訳の潤色をさせたりしますが、一切断っております。ただこの志を成就させようとするだけです。（75）

また

本書百卷は、字数六七十万、もしくはそれに及ばないかもしれませんが、全力でそれにあたり、一年で必ずや完成させられるでしょう。（76）

また「致吳君遂書八」の中でもこのように言っている。

「史」のことについては以前あらましを申し上げました。近々「學術志」（77）を起稿します。（78）

以上の点から、章太炎が本気で通史編纂を考えていたと言えるであろう。さらに具体的な史目を「章太炎來簡 壬寅六月」の中で章太炎は梁啓超に示している。それは左記の通りである。

五表

帝王表(79) 方輿表 職官表 師相表 文儒表

十二志(80)

種族志 民宅志(81) 食貨志 工藝志 文言志 宗教志 學術志 禮俗志(82)

章服志 法令志 溝洫志 兵志

この十二志は各志ごとに約四、五卷に分ける。

十記

革命記 周服記 秦帝記 南胄記 唐藩記 黨銅記 陸交記 海交記 胡寇記 光復記

八考紀

秦始皇考紀 漢武帝考紀 王莽考紀 宋武帝考紀 唐太宗考紀 元大祖考紀 明太祖考紀 清三帝考紀

二十七別錄

管商蕭諸葛別錄 李斯別錄 董仲舒公孫弘張湯別錄 劉歆別錄 崔浩蘇綽王安石別錄
孔老墨韓別錄 朱熹王守仁別錄(83) 許衡魏象樞湯斌李光地別錄 顧黃王顏別錄 蓋寬饒傅幹曾靜別錄 辛棄疾張世傑金聲桓別錄 鄭成功張煌言別錄 多爾袞別錄 張廷玉鄂爾

泰別錄 曾李別錄 楊雄庾信錢謙益別錄 孔融李紱別錄 洪秀全別錄(84) 康有為別錄
遊俠別錄 貨殖別錄 刺客別錄 會黨別錄逸民別錄 方技別錄 疇人別錄 序

なお章太炎は「章太炎來簡 壬寅六月」の中でこのように言っている。

本書は全部で百巻の予定です。そのうち「志」が半分を占め、残り半分を「表」、「記」、「紀」、「傳」が占めます。(85)

このこと及び史目から章太炎の考えていた通史の体裁は、通史と言いながらも、紀伝体の形式を取りながら、「志」に重きをおくものであったと推測される。(86)また章太炎は「紀」や「伝」に「民氣」を鼓舞して民を将来に導き、今日の社会と利害関係の絡むような内容を盛り込むつもりであったようである。(87)次に梁啓超に宛てた書簡から、章太炎の通史に対する考えを考察することにした。

b 「章太炎來簡 壬寅六月」の分析。

章太炎はこの書簡の中で、断代史よりも通史を重んじることを述べる。詳細は後述するとして、まずは書簡の中から彼の史学に関する考えを述べた部分を引用する。

現在歴史書を作るのに、もしもつばらに断代史を作ったなら、新しい原理を見つけ

るのが難しいばかりか、事実さえも詳細に調査する方法がないとひそかに考えております。通史は大昔より、必ずしも人物を褒貶するものではなく、事柄を述べるのを貴いこととしました。重んじられるのはもっぱら典志にあるので、心理学、社会学、宗教学などの学問は、すべてこの中にまとめて入れることができます。典志には新しい原理や新説があり、おのずから通考、会要などの書が（永嘉）八面・や策論であるのとは違うのです。また漁仲（鄭樵の字）の『通志』がただ自分の勝手な考えに陥る弊害を起こすようにもならないのです。しかし通史を貴ぶのはもともと二つあります。一つは社会と政治の進化と衰微の原理を明らかにすることを中心とするものです。これについては典志に表します。もう一方は「民氣」を鼓舞し、未来に導くことを中心とするものです。これについても「紀」や「伝」に表します。四千年の中で、帝王が数百、大臣数千。もし（その中で）人の記憶にはつきりと残っているものを取り上げたら数え切れません。通史そのものに体裁があるので、どうして人々のために履歴を明らかにすることが出来ましょう。君主、宰相、学者の類については、すべて「表」を作ります。「紀」や「伝」については、利害関係が今日の社会に関係するものを選んで、数篇を編纂します。なお歴代の社会における各種の用件はまとめて論じることが難しいので、機仲（88）（袁枢の字）の『（通鑑）紀事本末』の例（89）によって、「記」を作ります。本書は全部で百巻の予定です。そのうち「志」が半分を占め、残り半分を「表」、「記」、「紀」、「傳」が占めます。そもそも同類の事物を分け、それぞれ原理を詳細にしようとしたら、ほとんど時代に区分したり、大まかにまとめ論じることが出来ません。そのため「志」が必要となるのです。また国民の教育水

準を高め、士氣を奮起させようとすれば、漁仲（鄭樵の字）が事の顛末を簡略に論じるようには行きません。そのため「紀」や「伝」が必要なのです。（90）

まず章太炎が通史に注目した理由としては、断代史では歴史事実を明らかに出来ず、新しい歴史原理を見つけられないからと考えていたようである。さらに章太炎はこの通史において、「志」では社会と政治の進化と衰微の原理を明らかにし、「紀」、「伝」では利害関係が今日の社会に関係すること、国民の教育水準を高め、士氣を奮起させようとする点に一つの基準が置かれていたと考えられる。また百巻のうち、その半分を「志」が占めるわけであるから、如何に章太炎が社会と政治の変遷に重きを置いていたかが推測される。なお章太炎が断代史ではなく、通史を選択したのは、社会と政治の進化と衰微の変遷過程を明らかにするためには通時的に見る必要があったからであろう。そのために断代史よりは通史の方を選んだのであろう。

c 吳君遂に宛てた書簡の分析

章太炎は「致吳君遂書八」の中で、旧来の史書に対する意見と、優れた史書に求められる条件について論じる。詳細は後述するとして、まずこの書簡の中から彼の史学に関する考えを述べた部分を引用する。

史書を書こうするなばら、しばらくは先に旧来の書籍にその原理を求めなければな

りません、仰ぎ見て考えていると、思いつくことがだんだんと多くなります。太史（司馬遷）は社会における文明については分かっていたが、朝廷については疎かった。孟堅（班固）、沖遠（孔穎達）は朝廷の制度について分かっていますが、社会とは隔絶しています。全く備わっていない者は承祚（陳壽）である。彼は事を記すことしか知りません。ことごとく備わっているのが漁仲（鄭樵）ですが意外にも独断が多いのです。漁仲以前に通史を編纂したものではありません。梁代に呉均がいます。そのデタラメな『西京雜記』を見ると、通史は雑駁であることが分かります。古史について言及した者には、近い時代に馬驢（91）がおります。しかしその考証は乾嘉時代の学者には及びません。その見識もいかげんで、蘇轍にまさるだけです。以前の史書で意になうものは余りありませんが、劉子駿（劉歆）の言葉を讀むと、もし史書を求めるならば、もとより道家に求めるべきである（92）ことがついに分かりました。管（子）、莊（子）、韓（非子）のお三方は、皆進化の原理を深く知っておりました。これが所謂優れた史書であります。これによって求めるならば、廓氏（93）、斯氏（94）、葛氏（95）の説のレベルに到達するのも、そう遠くはありません。（96）

まず章太炎は旧来の史書に対して、司馬遷は社会の文明に関する記述に優れるものの、朝廷の記述には優れなかったこと、班固、沖遠は「社会」のことを記述する観点が無かったこと。また鄭樵は両方の観点を備えるものの、独断が多いとする。これは「社会」に対する記述と朝廷の制度の記述二つの観点注目したものと考えられる。なお章太炎は通史を重んじる理由の一つとして、「社会」と政治の進化と衰微の原理を明らかにすることを梁

啓超に宛てた書簡の中で明言していた。つまり旧来の史書に「社会」に対する記述と朝廷の制度の記述を求めたのは、言い換えれば政治の進化と衰微の原理を旧来の史書に求めたと考えられる。

また章太炎は進化論の立場で書かれていることが優れた史書の基準と考えていたようである。彼が進化論をどの程度理解していたのかは未詳であるが(97)、『Comte、Spencer、Giddings』と言った社会学者の説を一つの基準と捉えていたようである。

以上を纏めると、一九〇二年当時、章太炎が史書を編纂するに当たっては、優れた史書として進化論を踏まえることを前提としていたと言えるであろう。そのうえで、通史の体裁を借りて、中国歴代の「社会」と政治の進化と衰微の原理を明らかにし、民の志気を高めようと模索していたのではないかと考えられる。彼が当時、「社会」や「社会学」といったものをどのように認識していたかは未詳ではあるが。

四

以上わずかながらの資料を基に、章太炎の一九〇二年当時における彼の史学や通史に対する考えを見てきた。前述したように、彼が史書を編纂するに当たっては、進化論の立場で書くことが前提となっており、そこから中国の「社会」と政治の変遷をあらわそうとす

るものであった。そうして一方に民の志気を高めていこうという考えが見られる。章太炎がこういった考えをどこから仕入れたのかは詳細にはしえないが、梁啓超と似たような発想をしていたことは間違いないであろう。仮に章太炎が『新史学』を見て、それをきっかけとしても、当然章太炎側にもそれなりの準備があつたと言えるだろう。そのことから考えても、必ずしも梁の「史」または「史学」に対する考えは、決して特異なものではなく、ある程度同時代人にとっては共通認識であつたかも知れない。

第二節 鄧實の『史學通論』について

一

梁啓超と同時代人の「史」に対する考え方の一例として、ここでは鄧實(88)の『史學通論』を挙げ、鄧の「史」に対する考えを考察することにした。特に鄧の『史學通論』では、梁の『新史学』が引用されており、明らかにそれを踏まえた上で、鄧の「史」に対する意見が論じられている。また『史學通論』が発表されたのは、『政藝通報』(89)壬寅第十二期(一九〇二年八月十八日)、同第十三期(同年九月二日)(100)誌上においてである。時間的には梁の『新史学』発表からわずか半年後の発表である。(101)

このことは、梁の『新史学』の影響の大きさを物語るものではあるが、それと同時に、梁の『新史学』の内容を受け入れられるだけの準備が鄧實の側にすでに出来ていたことを物語ると言えるであろう。また詳細は後述するが、『史學通論』に、歴史を進化論で捉えること、民を中心と記述を重んじることなど、梁の考えと一致する部分も見いだせる。これが梁の『新史学』による影響なのか、それとも日本書または翻訳書などを経由しての知識なのか定かではない。しかしそれがどちらであるにせよ、この時代において、「史」に言及する場合、梁と同じような考えをすることはすでに一般的ことであつたとも推測される。それだけに鄧のこの論文は、梁を含む同時代人の「史」に対する考えを考察する材料の一つとして格好のサンプルとなるであろう。詳細は次項以降で論じることにした。

二

『中国近代期刊篇目匯録』によれば、『史学通論』は五篇からなり、壬寅第十二期には「史学通論一」から「史学通論四」の途中までが、同第十三期には「史学通論四」の残り」と「史学通論五」（篇名のみで本文なし）が所収されているという。第十三期は未見の為、『中国近代期刊篇目匯録』の記述が正しいのかは判断出来ないが、ここでは「史学通論一」から「史学通論四」までの内容を対象として考察を進めることにしたい。（102）

中身の検討は後述するとして、ここでは『史学通論』について概略する事にしたい。「史学通論一」では、旧史」と「新史」との違いが論じられる。中でも「新史」の説明では、

梁の『新史学』が要約した形で説明される。前述したように、鄧實がこの論文を発表したのは『新史学』から半年後であることを考慮すると、鄧がこの『新史学』をいち早く取り入れるだけの準備が出来ていたと言えよう。「史学通論二」では、『春秋』の三世説に對比させて、中国の社会が「神権時代史」、「君権時代史」、「民権時代史」という三段階を経て発展してきたことを指摘し、まず「神権時代史」について説明する。「史学通論三」では「君権時代史」について、この時代の史書の記述は帝王が中心であったことを指摘し、「史学通論四」では「民権時代史」というものが意義のあるものであることを指摘する。

三

前述したように、「史学通論一」の中で鄧實は旧史と新史の違いを論る。旧史としては章学誠の「六経皆史也」の考えを踏まえ、「経」も「子」もすべて「史」の範囲に入ると指摘しながらも、それは「史」ではないとする。そして「中国に果たして『史』は無いのだろうか」という自問のあとに、次のように述べる。

またこれ（「史」を指す）について新史氏より聞いた。「史」とは一羣（社会）、一族が進化する現象を述べるものであつて、古人の為に偶像を作るためのものではない。また一姓のためにその家系図を作るものでもない。考えて見るに、「史」には「史」の「精神」がなければならぬ。驚くべきことだなあ。中国には三千年、一つとして精神史はなかった。あるのは王朝史だけである。そして国史でなく君史であり、民史

でなく貴族史であり、社会史でなく、まとめて言ってしまうと、歴代皇帝の専制政治史である。……「史」とはこのようなものである。中国に果たして「史」があるのだろうか。ああ、中国に「史」はない。しかし「史」がないのではなく、史家がないのである。しかし史家がないのではない、「史」に対する見識がないのである。(103)

右記の引用文に、「『史』とは一羣、一族が進化する現象を述べるもの」、「一姓のためにその家系図を作るものでもない」、「『史』には『史』の『精神』(104)がなければならぬ」というところから、明らかに梁啓超の『新史学』の内容を踏まえていることが分かる。また中国には「史」がないのではなく、「史」に対する見識がないというのは、これも梁が『新史学』の「中国之旧史」であげた「四蔽」(中国の史家に欠如した学識四点)を踏まえたものである。

鄧實が果たして梁のこの考えをどこまで理解できたかは定かではない。ただ『新史学』の発表から僅か半年という短期間で、梁の考えに対応したということは、単に梁の影響を受けたというよりは、それを受け止めるだけの知識を鄧自身持ち、似たような発想をしていたということになる。

また「史学通論」の文末に

中国に「史界革命」の風潮が起きなければ、中国には永遠に「史」はない。「史」が無ければ「国」はない。(105)

と述べるのは、明らかに梁の『新史学』を意識したものだが、ここで注目しておきたいのは、「史」がなければ「国」はないという表現である。この表現は後述する馬叙倫も使う

のであるが、これはいったいどういう意味であろうか。前述したように、梁啓超が中国史を書く目的は、愛国思想発揚のためであつた。しかしもと「国」という概念を持つていないのに、国を愛するという概念を持ちようがない。そのため史学によつて「国」という概念を作ろうという考えであつた。(106)ここで言う「史」が無ければ「国」はないというのは、そのようなことを指しているのと同時に、殆ど符丁の様に使われるのは、鄧に限らず、誰もが「史」というもので「国」という概念を形成するというのが、ごく一般的になつていたとも考えられる。

かりにこれらの考えが梁啓超によつてもたらされたとしても、受け取る側にその考えを理解できるだけのものがなくてはならない。そのことから推察すると、同時代人が梁啓超と同じような考えを持つていたとも言えなくはないし、梁の考えが、同時代において、必ずしも特異なものであつたとは限らないと言えよう。

四

鄧實は「史学通論二」において、「史」には三つの発展進化の段階があることを指摘する。

私が思うに「史」にも三等ある。(107)上世の段階は神權時代史で、神史と言う。中世の段階は君權時代史で、君史と言う。近世の段階は民權時代史で、民史と言う。言わせて欲しい、神史は「人羣」(社会)が進化する初期の状態である。(108)

右の文から、鄧が時代区分を踏まえて、時と共に社会が進化していくという考えを踏まえていることである。このことから考えた場合、「史」を書くさいに、進化論を踏まえるというのは、梁啓超に限らず、ごく普通のことであつたかもしれない。

またこの鄧實の考えで注意しておかなければならないのは、その発展の仕方である。歴史が「神史」、「君史」へと発展し、最後には「民史」が来るということである。これは考えようによつては、「史」は必ず民を対象とした「史」へ行くはずであるということである。この点については、更に「君史」と「民史」について説明を加えることにした。

まず「君史」については鄧實は「史学通論三」の中で、次のように言う。

鄧子に「君史」について説明させて欲しい。一代の君は一代の「史」である。王が天下を治める時には、曆を改め、衣服や馬車の色を変え、制度を發布し、御殿で祝いの言葉を受け、万民に臨むのである。そこで、一言一語が詔令、制誥、寶訓と言ふものになる。一つ一つの行動が起居注、實録というものになる。天を祭れば、郊祀志、明堂、大禮というものがある。巡遊すれば、封禪の文や石刻というものがある。征伐をすれば、中興記、平定、方畧というものになる。帝位につけば、建元、始元某年某月紀元の年表というものがある。崩御すれば仁聖、神武某祖某皇という美称の諡がある。このようなことを司るのを太史というのである。太史は出来事を記録し、それを文字に載せるのである、それを「史」と言うのである。……ああ、その「史」、脳中にあるのはただ帝王のことだけだ。(109)

と述べているように、「史」というのは太史が記す物で、その内容はすべて君主の記述に終始し、結局「史」というのは、君主を中心として記述されるものであることを指摘する。

これは梁啓超が考える旧来の史に対する考えと同じであるが、このような旧来の史書は過去のものであり、更に次の段階へ行かなければならないことを示唆するのである。そして「民史」へ発展していくべきことを言うのであろう。

では鄧實は「民史」をどのように考えていたのであろうか。それは「史学通論四」の中で、次のように言っている。

鄧子に「民史」について更に説明させて欲しい。「民史」というものは中國になかった。そうではあるが、その意義については言うべきである。そもそも世界が日々文明を進めているのである。一、二人が進化して、その「一羣」(社会)が進化するのではない。小さな羣(社会)が進化して大きな羣が進化するのではない。(時間が進んでは過去の事柄が残り、現在のことは、未来への影響がある。歴史というのは大きな羣(社会)の現象と影響なのである。過去の文明の現象については、それを歴史こそが留めることが出来、未来への文明の影響については、歴史こそがそれを孕んでいるのである。そもそも民とはどのような集合体であろうか。羣によって生じ、羣によつて強くなり、羣によつて治まり、羣によつて栄えるのである。羣の中に必ずその中で羣の営みがある。その営みの結果が、歴史の材料となるのである。羣の外には必ずその外羣(敵対集団?)との競争がある。その競争の活劇が、歴史の舞台となるのである。このため、人羣を捨てては、歴史を作ることとは出来ない。また歴史を捨てて人羣を作ることとは出来ない。政治家、哲學家、美術家、教育家、生計家、探險家は人羣の英雄であり、歴史上の人物である。學術上、宗教上、種族上、風俗上、經濟上、社會上、人羣の功績は歴史上の榮譽である。ああ、そもそもこれを「史」というので

ある。そもそもこれを「民史」と言うのである。(110)

ここで鄧實は、歴史とは社会の現象そのものであり、その中には文明が描かれ、さらに文明が未来へと発展していく要素を持っていることを示唆するのである。それがために「社会」がなければ、歴史というものも存在せず、歴史がなければ「社会」も存在しないということなのであろう。

また「史」というのは本来君子のためだけにあるのではなく、政治家、哲學家、美術家、教育家、生計家、探險家と言った人物をはじめ、そこから學術、宗教、種族、風俗、經濟、社会という分野での功績を扱うのが本来の「史」であり、それが「君史」から発展して「民史」になるといいたいのであらう。

五

以上鄧實の『史学通論』について考察した。まず梁啓超との比較ということから考えれば、旧来の「史」というのは君主を中心としたもので、そこから民を対象として、社会の発展を描いて行く「民史」へと発展しなければならぬという点では、表現こそ違いますが、梁と同じような発想を持っていたと言えるであらう。

ただ一つ問題なのは、鄧實自身が「社会」や「歴史」という用語などをかなり曖昧に使用しているということである。例えば「歴史」Ⅱ「社会」という図式を立てながら、そあとで「社会上」という言葉を使ってみたり、「君史」までは「史」を使いながら、「民史」

になると「歴史」という言葉を断りもなく使っているのは、鄧自身、これらの言葉を理解した上で使っているとは考えがたい。

ただそうであったとしても、当時において、「史」というのは、旧来のものから離れ、梁啓超が『新史学』で発想したように「史」を捉える状況になっていたのであろう。

第三節 馬叙倫の『史界大同説』について

一

梁啓超と同時代人の「史」に対する考え方の一例として、ここでは馬叙倫(二三)の『史界大同説』を取り上げることにした。『史界大同説』は『政藝通報』第二年癸卯第十五号(一九〇三年九月六日)と第二年癸卯第十六号(同年九月二十一日)に連載された。時期としては梁が『新史学』を発表してから、約一年半後のことである。馬がこの論文を発表したのは十九歳の時である。馬が何故この論文を発表したのか、その目的は定かではない。馬の自伝である『我在六十歳以前』には

私は家庭生活の負担から、杭州と上海を往来し、教師や文筆業をした。その時広東人の鄧實先生は、一人で定期刊行物の発行を行っていた。(それは)『政藝通報』と

言い、私に文章を書くよう誘ってくれた。(112)
とあるのみで、その意図は未詳である。

ただ二十歳にも満たぬ馬が『史界大同説』という論文によって、「史」の定義を論じようとした点から、仮に梁の『新史学』による影響があつたにせよ、梁とは一回り若い世代にも、「史」や「史学」について議論することは意義のある問題であつたのかも知れない。(113)

また詳細は後述するが、馬の考える「史」とは、旧史における「史」の扱う範囲が狭いことを指摘し、本来の「史」というものは、日常生活を初めとする全てが「史」の扱う範疇に入ると指摘する。そして章學誠の「六經皆史」という「史」の定義も不完全な政治学、學術史を扱うにすぎないと指摘する。

前述のような発想から考えても、当時において、「史」の定義は旧來の君主とそれに付随する臣下の記述を中心とするという考えからすでに離れていることが分かるであろう。次の項では、馬の『史界大同説』について詳細に検討することにした。

二

ここでは馬叙倫が「史」というものをどのように考えていたのか、考察することにした。馬は『史界大同説』の中で次のように定義する。

昔、唐の時代の劉子元（幾知）氏は『史通』を作った。（その中で）古史における

長所と短所を挙げ、一家言を示した。その論ははっきりとしており、その考えは抜きん出ており、その言葉はあざやかで、際だっている。それは一代の著作の中に入ると言っても良い。しかし私はその（対象とする範囲が）狭いのを欠点とする。「史」とはどのような意味であろうか。（それは）時間と空間を網羅し、変化を推測するものである。その義はきわめて博く、その考えはきわめて広い。その範囲は大きくて深く、その網羅しているものは夥しくてどこまでも及んでいる。（114）

と述べ、劉幾知の『史通』を例にとつて、その素晴らしさを言いながらも、「史」が対象とする範囲が狭いことが欠点だとする。ところが実際の「史」の対象とする範囲は時間（115）と空間であり、その中でものごとの変化を扱うのが「史」だと指摘する。

また

そもそも「史」とはあらゆる書籍の総称である。一般に天下の書籍は、それが政治であろうと、宗教であろうと、教育であろうと、「史」の中に入らないものはない。（116）と述べ、「史」はあらゆる学術をも包括するものと馬は指摘する。

また

そ（「史」を指す）の実像について説明させて欲しい。時間と空間が存在すれば、「史」というものが存在する。「史」というのは時間と空間と共に生まれたものである。「史」という名前は文明が開化した世の中において立てられた名前である。「史」の実像というものは時間と空間が進み広がって行く際に基軸となるものである。「史」の体例を広げて行けば、大きくは時間と空間を網羅し、小さくは、人、物、事、技能にまで及び、「史」の持つ作用を働かせれば、開化を促し、文明を進めることが出来

る。(117)

と述べ、「史」には開化を促し、文明を發展させる作用があることを指摘する。
また

「史」は人の存在と共に生じたものである。人の起居、飲食それぞれが「史」の範疇でないものはない。……考えて見るに、「史」という名が存在してより以後、「史」を学問としたのである。そうして学史となったのである。そして「史」を学問とし、学史となつて、「史」はついに飲食、起居という（範疇から）離れて、別の働きを持つようになつたのである。そのため「史」が学問となつてより、飲食、起居は「史」の範疇に入らなくなつたのである。そして「史」ついに「政治史」、「宗教史」、「教育史」、「學術史」に分かれたのである。(118)

と述べ、本来「史」は起居飲食という人間の生活一般と結びついていたものであつたが、「史」はそこから離れて、學術へと變化していつたことを指摘する。

つまり、「史」というのは、通時的な時間と空間の中にあるものは日常生活、學術全てを対象とし、その働きを利用すれば文明の促進にも繋がるものである。そして「史」はそこから離れ、学問として「政治史」、「宗教史」、「教育史」、「學術史」へと分類されていったというのが馬の「史」に対する考えであらう。

なおここで一つ考えておきたいのは、「史」が日常のものまでを対象にするというのはどういうことであらうか。梁啓超は「史」は「社会」全般を叙述するものであると述べているが、馬の言う「起居飲食」とは何を指すのであらうか。言葉こそ使っていないが、ある意味、これは梁の言う「社会」というものと関係があるのであらうか。

また馬が「史」に対して、どうしてこのような発想をしたのかは詳細にしない。西学または日本の学術書の翻訳などによってヒントを得たのか、または師である陳黻宸から授かったものなのかも知れない。(119)

三

ここでは馬の「旧史」に対する考えを踏まえ、本来の「史」とはどうあるべきと馬が考えていたのかを考察することにした。馬は「旧史」について次のように述べている。

我が中国に「史」があるだろうか。中国は「国」ではないのであるだろうか。どうして「史」がないのであるうか。(120)しかし中国に「史」はあるが、それはすでに飲食、起居を離れてしまつて、四分類となつてしまつた。そうではあるが、中国に政治史、宗教史、教育史、學術史があるだろうか。(121)

また 中国の古代には、不完全な政治史と學術史(122)しかなかった。宗教史と教育史はなかった。そうではあるが、この二つ「史」ではなくはない。そこで政治史に附屬させたのである。(123)

前項でも触れたが、馬は劉幾知の『史通』は、その対象とする物が狭いことを欠点した。そしてそれは中国の「史」全般に対しても全てを網羅し得ていないことを指摘する。

また馬は不完全な政治史と學術史しかないと指摘するが、梁の『中国史叙論』(一九〇

一年）では、中国にはせいぜい政治史しかないという指摘があり、こういった考えは同時代人にとって、共通の認識であつたのかも知れない。

では、馬は「史」は本来どうあるべきと考えたのであろうか。そのことについて、馬は次のように述べる。

「史」は「大同」（差異の無いこと）の観点から言うべきである。どういう意味であらうか。「大同」という観点から「史」を言うのであれば、群書の名前を取り外して、「史」と総称すべきである。そうであれば「史」という総称から分かれて、様々な名称が出るのである。政治、宗教、教育、学術だけに固執するのではなく、すべて説が立ち、原理が成立するものはこれを「史」と言わないものはない。このようなものを「史」言うのである。そうして「史」は初めてもとの意味に帰るのである。考えて見るに、一つの物事の道理が人の脳内に入つたならば、そのことによつて「思想」（考え）を生みだし、「事実」（物事）を行わせれば、「思想」と「事実」は、どんなに広大であれ、どんなに狭小であれ、どんなに精細であれ、どんなに浅薄であれ、どんなに高尚であれ、どんなに低俗であれ、すべて人が「観念」を生じたものに外ならない。人が「観念」を生じたのに他ならないとはつまり人がすべて「観念」を生じたものであるということである。つまりどれもが「史」とすることが出来るのだ。このように、「史」（の概念）を押し広げれば、二十四史を必ずしも「史」とする必要あるうか、三通、六通、九通を必ずしも「史」とする必要あるうか、さらに六経を必ずしも「史」とする必要あるうか。四庫に収録されているもの、四庫に収録されていないもの、博識の士著述、田舎親父の感想、上は『老（子）』、『莊（子）』、『墨翟』の

書から、下は『水滸傳』などの諸伝まで、どれも名付けて「史」と言うことが出来る。その中で、名称を多岐に分けたなら、飲むことに關しては飲史、食べることに關しては食史、文に關して文史、學問に關しては學史となる。説が立ち、原理が成立するものに、「史」でないものはないのである。このように「史」を見ると、中国の「史」であつても、（その分類が）夥しい。そして「史」で扱う対象は、はじめてどれも同じように差異なく扱えるようになるのである。（124）

また

歐米よ。歐美よ。かの国は本当にその文明に恥じることはないなあ。かの国は「史」について殆ど「大同」の觀念を發揮させているな。だから政治史があればそこからまた法律史、理財史に分かれ、學術史があれば、そこからまた哲學史、科學史に分かれる。美しい言葉にも「史」があり、文章を書くにも「史」がある。考えて見るとどんどん「史」（の総称）からさまざまな名称へ分類出来るのである。これが欧米の欧米たる所以なのである。中国に至つては、「史」という名称の尊さに驚き恐れてしまつてゐる。全く「史」のようなものには及ぶことの出来ない高い地位があつて、よく物事に通じたものでなければ、「（「史」を）作ることはできない。ああ、これが中国の「史」が衰退する理由なのだ。（125）

と述べる。

つまり中国の「史」が衰退したのは、その対象とする範圍が狭かつた為によるのだとし、「史」の対象をあらゆる物に拡大していけば、經史子集すべてをその「史」の対象として扱つて行けば、欧米の「史」のように、發展させることが可能であることを示唆してい

るのではないだろうか。

四

馬叙倫がどうしてこのような「史」を發想するに至ったのかは、先にも触れたように、未詳である。ただ馬が旧來の「史」の定義を離れて、通時的な時間、空間を通してあらゆるものが全て「史」の対象となるという發想は、梁が『新史学』で言った「歴史とは『社会』の進化する過程を叙述するものであるという」發想と類似していると言えないだろうか。この馬の發想が梁啓超を経由してのものなのか、または別のものを經由して得られたものなのかは詳細にしない。ただどのような形であれ、「社会」またはそれに近い概念があつて、そういったものの變化發展を「史」の中で述べて行こうという狀況が當時にあつたのではないかと推測される。もしそうであつたとするならば、梁の『新史学』での發想は、當時において必ずしも独自のものではなく、常識的なことであつたとも言えるであらう。

まとめ

以上『新史学』の周辺を見てきたわけであるが、どれにも共通して言えることは、すでに旧来の君主の記述を中心とする史書の視点から離れて、民を中心として社会全体の進化発展を叙述するのが「史」という方向にあると言つてよいであろう。このことから考えた場合、梁の『新史学』は必ずしも同時代において特異なものではなく、同時代人にとつては、ごく常識的なことであつたと言えるであろう。

また仮に梁の影響があつたとしても、影響を受ける側にも、それに反応するだけの知識、関心があつたからであり、たまたま梁啓超の『新史学』がきっかけとなつたに過ぎないとも言えるであろう。

結語

以上、中国における新史学の形成を考察する上で、梁啓超の『新史学』を中心に、その周辺を含めて論じてきた。しかし残された課題はまだ山積みである。

例えば、梁啓超の『新史学』の場合、その発想を結局はどこから持ってきたかという点である。確かに『東籍月旦』と『中国史叙論』との影響関係については、ある程度証明は出来るが、では『中国史叙論』から僅か半年の期間で、どうやって『新史学』へと考えを変えて行ったのか、まだまだ未詳の部分が多い。

また『新史学』の周辺を探るにしても、まだまだ見られなかった史料がたくさんある。特に『新世界学報』が見られなかったのは残念であった。あの雑誌にはわざわざ「史学」という篇目が立てられており、一九〇二年時における「史学」というものがどのように理解されていたのかを知る手がかりにもなったであろう。また第二章でも触れたが、この雑誌には馬叙倫の論文が多数掲載されており、彼がどのようなようにして『史界大同説』を考えに至るのか、また馬が「史」や「史学」についてのどのようなように考えていたのかをもっと厳密に理解出来たであろうし、馬以外にも、例として取り出せる論文が幾つもあった。言い訳ではないが、今回 SARS 騒動があったのは誠に残念であった。

また章太炎についても、章の考えをより明確にするためにも、『煇書』の分析が必要である。

また今回引用した資料の中でも、未だによく分からない部分もある。これは梁啓超を含めてそうであるが、例えば「社会」、「歴史」等と言った言葉に対して、彼らがどうい

ことを想定して使用しているのかまだまだ握めない。これらについては、同時代人の著作を丹念に当たって推測していくしかないのであるが、更なる資料整理が要求されることであろう。

ところで、今回中国における新史学の形成というテーマで考察を進めた訳だが、今回の論考は、まだその入り口に過ぎない。時代的にも一九〇二年前後という、梁啓超をはじめとする同時代人にとっては、「新史学」を構築するには、まだまだ過渡期の段階と言えるであろう。たぶん彼ら自身、新しい知識を未整理、未消化のままに進んでいる状態であろう。例えば梁啓超にしてもそうであるが、『中国史叙論』や『新史学』と言った、ある意味気込みは感じるのであるが、実際には旧来の視点とは違った角度で中国史を書き換えると言うことは、現時点においては出来なかった。ただ梁啓超はその後、帰納法を利用して史書の整理を試み、そこから歴史の因果関係を探るという方向に向かうのであるが、それが現実化するのには、およそ二十年後に発表される『中国史研究法』を待たなくてはならない。またちょうど一九二〇年代には、史学に関する著作がたくさん出てくる時期であり、たぶん一九〇二年前後に蒔いた種がようやく芽を出したという時期になったのである。う。まだまだ読まなければならぬ資料はいくらでもある。今後は一九〇二年を境に、縦軸と縦軸を追いながら、中国人がどういう「史学」概念を打ち立てていたのかを見ることにしたい。

(1) ここでは図式的な説明をただけで、実際にはもつと複雑な過程を経て『新史学』が成立していることは言うまでもない。

(2) 『中国史叙論』にはもともと本編を作る構想があつたと考えられる。梁啓超は『中国史叙論』第八節「時代之区分」の中で、中国史を「上世史」、「中世史」、「近世史」の三つに分け、「中世史」の説明の中で次のように言う。

この時代「中世史を指す」の期間はたいへん長く、そのため読者には不便である。そのためさらに三つの小区分をする。詳細は本編に譲り、ここでは言及しない。

原文Ⅱ 惟因此時代太長之故令讀者不便。故於其中復分為三小時代焉。俟本篇乃詳析之。今不先及。(『飲冰室合集』第一冊・文集之六・十二頁三行～五行)とあり、本編があることをほのめかしている。

(3) 日本の明治期の歴史学が『中国史叙論』に与えた影響については本章第二節「日本の明治期の歴史学が梁啓超に与えた影響について」を参照

(4) 『三十自述』Ⅱ『飲冰室合集』第二冊 文集之十一、十五～十九頁に所収。

(5) 原文Ⅱ 辛丑四月復至日本……一年以来頗竭棉薄、欲草一中國通史以助愛國思想之發達、然荏苒日月至今猶未能成十之二、惟於今春為新民叢報……(『飲冰室合集』第二冊・文集之十一、十九頁四行～七行)

(6) 原文Ⅱ 去歲以來、先生頗有志於史學、去年有中國史叙論一文、今年又為新史學一篇、此皆先生著中國通史之準備根據。新史學主張、多採西學新說、加以先生識見超卓、故

此文對整理中國舊史工作，有極大貢獻與幫助。（『民國梁任公先生啓超年譜』第二冊・五五四頁・三行、六行）

(7) 日本中國學會報第二八集 二一六頁下段二五行、二一七頁上段七行）

(8) 「新史學九十年 一九〇〇— 上冊」九頁を参照。ちなみに許氏は梁啓超の『三十自述』に依っている。

(9) 社会通念Ⅱ原文は「理想」。『中國積弱溯源論』第一節「積弱之源於理想者」では「理想」を「理想者何物也。人人胸中所想像。而認為通常至當之理者也（理想とは何か。人々の胸中に思つて、至極当たり前の道理と考えられるものである）」（『飲冰室合集』第一冊・文集之五・十四頁八行）と定義する。この定義にもとづいて社会通念と訳した。

(10) 釐拿＝CHINAの音訳か。

(11) 原文Ⅱ中國人腦中之理想。其善而可寶者固不少。其誤而當改者亦頗多。歐西日本有恆言曰中國人無愛國心。斯言也。吾固不任受焉。而要之吾國民愛國之心。比諸歐西日本殊覺薄弱焉。此實不能為諱者也。而愛國之心薄弱。實為積弱之最大根源。吾嘗窮思極想。推究其所以薄弱之由。而知其發源於理想之誤者。有三事焉。（中略）

一曰。不知國家與天下之差別也。中國人向來不自知其國之為國也。我國自古一統。環列皆小蠻夷。無有文物。無有政體。不成其為國。吾民亦不以平等之國視之。故吾中國數千年來常處於獨立之勢。吾民之稱禹域也。謂之為天下。而不謂之為國。既無國矣。何愛之可云。（中略）

二曰。不知國家與朝廷之界限也。吾中國有最可怪者一事。則以數百兆人立國於世界者數千年。而至今無一國名也。夫曰支那也。曰震旦也。曰釵拿也。是他族之人所以稱我者。而非吾國民自命之名也。曰唐虞夏商周也。曰秦漢魏晉也。曰宋齊梁陳隋唐也。曰宋元明清也。皆朝名也。而非國名也。蓋數千年來。不聞有國家。但聞有朝廷。每一朝之廢興。而一國之稱號即與之為存亡。豈不大可駭而大可悲耶。是故吾國民之大患。在於不知國家為何物。因以國家與朝廷混為一談。(中略)

三曰不知國家與國民之關係也。國也者。積民而成。國家之主人為誰即一國之民是也。故西國恆言謂君也官也。國民之公奴僕也。凡官吏以公事致書於部民。其簡末自署。必曰。汝之僕某某。蓋職分所當然也。非其民之妄自尊大也。所以尊重國民之全體而不敢褻。即所以鞏護國家之基礎而勿使壞也。乃吾中國人之理想有大異於是者。中略

以上三者。實為中國弊端之端。病源之源。(『飲冰室合集』第一冊・文集之五・十四頁十二行、十七頁十四行)

(12) 各節の詳細は、本章第二節を参照。

(13) 原文は於今日泰西通行諸學科中、為中國所固有者、惟史學。史學者、學問之最博大而最切要者也。國民之明鏡也。愛國心之源泉也。(『飲冰室合集』文集之九、一頁四行)

(14) 第一章、第一節、二を参照

(15) 『『史界革命』と明治の歴史』(『近代中国の思索者たち』八四頁八行、一一行)

(16) 第一章、第一節、二を参照。

(17) 原文＝史也者記述人間過去之事實者也。雖然自世界學術日進、故近世史家之本分與前者史家有異。前者史家不過記載事實。近世史家必說明其事實之關係與其原因結果。前者史家不過記述人間一二有權力者興亡隆替之事。雖名為史、真不過一人一家之譜牒。近世史家必探索人間全體之運動進步即國民全部之經歷及其相互之關係。以此論之、雖謂中國前者未嘗有史、殆非為過（『飲冰室合集』文集之六、一頁四行、七行）

(18) 原文＝德國哲學家埃猛埒濟氏曰、人間之發達凡有五種相。一曰智力、二曰產業、三曰美術、四曰宗教、五曰政治。凡作史讀史者於此五端、忽一不可焉。今中國前史以一書而備具此五德者固渺不可見。即專詳一端者亦幾無之。（『飲冰室合集』文集之六、一頁十三行、二頁一行）

(19) 原文＝今世之著世界史者必以泰西各國為中心點。雖日本俄羅斯之史家（凡著世界史者日本俄羅斯皆擯不錄）亦無異議焉。蓋以過去現在之間能推衍文明之力以左右世界者實惟泰西民族而他族莫能與爭也。雖然西人論世界文明最初發生之地有五。一曰小亞細亞之文明、二曰埃及之文明、三曰中國之文明、四曰印度之文明、五曰中亞美利加之文明而每兩文明地之相遇則其文明之力愈發現。今者左右世界之泰西文明即融洽小亞細亞與埃及之文明而成者也。而自今以往、實為泰西文明與泰東文明（即中國之文明）相會合之時代。而今日乃其初交點也。故中國文明力未必不可以左右世界、即中國史在世界史中當占一強有力之地位也。雖然此乃將來所必至而非過去所已經。故今日中國史之範圍不得不在世界史以外。（『飲冰室合集』文集之六、二頁五行、二頁一一行）

(20) 原文＝吾人所最慚愧者莫如我國無國名之一事。尋常通稱或曰諸夏、或曰漢人、或曰唐

人、皆朝名也。外人所稱或曰震旦、或曰支那、皆非我所自命之名也。以夏、漢、唐等名吾史則戾尊重國民之之宗旨、以震旦支那等名吾史則失名從主人之公理。曰中國、曰中華又未免自尊自大。貽譏旁觀、雖然以一姓之朝代而汚我國民不可也。以外人之假定而誣我國民猶之不可也。於三者俱失之中。萬無得已、仍用吾人口頭所習慣者、稱之曰中國史。（『飲冰室合集』文集之六、三頁二行、五行）

(21) 原文＝地理與歷史最有緊切之關係。是讀史者所最當留意也。高原適於牧業、平原適於農業、海濱河渠適於商業、寒帶之民擅長戰爭、溫帶之民能生文明。凡此皆地理歷史之公例也。（『飲冰室合集』文集之六、四頁八行、九行）

(22) 原文＝種界者今日萬國所斷斷然以爭之者也。西人分世界人種、或為五種、或為三種、或為七種。而通稱我黃色種人謂為蒙古種。此西人關於東方情實、誤謬之談也。今考中國史範圍中之各人種、不下數十。而最著明有關係者蓋六種焉。（『飲冰室文集』文集之六、五頁一〇行、一二行）

(23) 紀年者歷史之符號。而於記錄考證所最不可缺之具也。以地理定空間之位置、以紀年定時間之位置。二者皆為歷史上最重要之事物。（『飲冰室文集』文集之六、七頁八行、九行）

(24) 『紀念公理』は『飲冰室合集』第一冊文集之三、三五、三七頁に所収。初出は一八九九年五月三〇日『清議報』第十六に發表。李国俊氏によれば書かれたのは前年の一八九八年。（『梁啓超著述系年』第五〇頁、復旦大学出版社、一九八六年）

(25) 原文＝叙述数千年之陳跡、汗漫邈散而無一綱領以貫之。此著者讀者之所苦也。故時代

之區分起焉。中國二十四史以一朝為一史。即如通鑑號稱通史。然其區分時代以周紀秦紀漢紀等名。是由中國前輩之腦識只見有君主、不見有國民也。西人之著世界史常分為上世史中世史近世史等名。雖然時代與時代相續者也。歷史者無間斷者也。人間社會之事變必有終始因果之關係。故於其間若欲劃然分一界線如兩國之定界約焉。此實理勢之所不許也。故史家惟以權宜之法就其事變之著大而有影響於社會者。各以己意約舉而分之以便讀者。雖曰武斷亦不得已也（『飲冰室合集』文集之六、一一頁三行、八行）

(26)『東籍月旦』第二節東洋史（『飲冰室合集』文集之四、九八頁四行）で紹介。『中等東洋史』は明治三十一年三月三十一日、大日本圖書株式會社發行。論者が見たのは明治三十一年十二月一日再販。

(27)『東籍月旦』第一節世界史で紹介。（『飲冰室文集』文集之四、九三頁四行）『萬國史』は明治二七年三月、吉川半七により發行。論者が見たのは明治二八年一〇月訂正二版である。

(28)『東籍月旦』第一節世界史で紹介。（『飲冰室文集』文集之四、九二頁二行）『萬國史綱』は明治二五年九月、三省堂書店より發行。

(29)『萬國史綱』緒論二頁八行、三頁二行

(30)『東籍月旦』第一節世界史で紹介。（『飲冰室文集』文集之四、九三頁二行）『萬國史要』は明治二六年一二月、金港堂書籍株式會社發行。論者が見たのは明治二九年一月訂正五版

(31)『萬國史要』総論一頁一行、二行

- (32) 『萬國史』緒論一頁二行ゝ三行
- (33) 未見である。
- (34) 「明治史學成立の過程」七頁十六行ゝ八頁二行
- (35) 『萬國歴史』序文五頁五行ゝ六頁九行
- (36) 『飲冰室合集』文集之六、三頁八行
- (37) 『中等東洋史』総論八頁九行
- (38) 『飲冰室合集』文集之六、三頁八行ゝ九行
- (39) 『中等東洋史』総論三頁八行ゝ十行
- (40) 『飲冰室合集』文集之六、三頁九行ゝ一三行
- (41) 『中等東洋史』総論四頁四行ゝ一二行
- (42) 『飲冰室合集』文集之六、四頁六行ゝ七行
- (43) 『中等東洋史』総論七頁二行ゝ五行
- (44) 『飲冰室合集』文集之六、六頁四行ゝ五行
- (45) 『中等東洋史』総論十五頁三行ゝ五行
- (46) 『飲冰室合集』文集之六、六頁六行ゝ七行
- (47) 『中等東洋史』総論十六頁一二行ゝ十七頁二行
- (48) 『飲冰室合集』文集之六、六頁八行ゝ九行
- (49) 『中等東洋史』総論十七頁六行ゝ七行
- (50) 『飲冰室合集』文集之六、六頁十行ゝ十一行

(51)『中等東洋史』総論十六頁六行～十行

(52)『新史学』は『新民叢報』に六回にわたり掲載された。その発行年、掲載号及び各篇名は次の通りである。(後に『飲冰室合集』第一冊文集之九一～三二頁に所収。)

第一号(一九〇二年二月八日)「中国之旧史」

第三号(同年三月十日)「史学之界説」

第十一号(同年七月五日)「論正統」

第十四号(同年八月十八日)「歴史与人種之關係」

第十六号(同年九月十六日)「論書法」

第二十号(同年十一月十四日)「論紀年」

(53)『日本中國學會報』第二八集(一九七六年)所収。後に『中国の儒教的近代化論』第五章「梁啓超の歴史観と進化思想」(研文出版社・一九九五年)に名を変えて所収。本稿では『中国の儒教的近代化論』所収のものに拠った。

(54)佐藤慎一編『近代中国の思索者たち』(大修館書店・一九九八年)に所収。

(55)『飲冰室合集』文集之十、一九頁四行～七行を参照。なお『飲冰室合集』は上海中華書局一九二六年影印版・中華書局・一九八九年出版に拠る。

(56)一八九七年二月～一九〇一年一月(第一冊～第一三三冊)停刊時期は未詳。澳門にて創刊。維新派の重要な宣伝刊行物。なお第一冊には梁啓超「知新報敍例」が掲載されている。

(57)原文は「新民云者非欲吾民盡棄其舊以從人也。新之義有二。一曰淬厲其所本有而新之。

二曰採補其所本無而新之。二者缺一、時乃無功。先哲之立教也不外因材而篤與變化氣質之兩途。斯即吾淬厲所固有採補所本無之說也。一人如是。衆民亦然。」

(58) 原文は「舊也而不得不謂之新。惟其日新、正所以全其舊也。濯之拭之、發其光晶、鍛之鍊之、成其體段、培之濬之、厚其本原、繼長增高、日征月邁。國民之精神、於是乎保存、於是乎發達。世或以守舊二字爲一極可厭之名詞。其然豈其然哉。吾所患不在守舊。而患無眞能守舊者。眞能守舊者何即吾所謂淬厲其固有而已。」

(59) 前節でも述べたが、梁の旧来の史学に対する考えは、『中国史叙論』の中にすでに見えている。そしてその考えを踏まえ、發展させて出来たのが、「中国之旧史」と言えるであろう。

(60) 原文Ⅱ於今日泰西通行諸學科中、爲中國所固有者、惟史學。史學者、學問之最博大而最切要者也。國民之明鏡也。愛國心之源泉也。今日歐洲民族主義所以發達、列國所以日進文明、史學之功居其半焉。然則、但患其國之無茲學耳、苟其有之、則國民安有不團結、群治安有不進化者。雖然、我國茲學之盛如彼、而其現象如此、則又何也。(『飲冰室合集』文集之九、一頁四行〜五行)

(61) いいで言う欠点とは、旧来の史学に足りなかつた要素という意味で使う。

(62) 原文Ⅱ知有朝廷而不知有國家。吾黨常言、二十四史非史也。二十四姓之家譜而已。其言似稍過當、然按之作史者之精神、其實際固不誣也。吾國史家、以爲天下者君主一人之天下、故其爲史也、不過叙某朝以何而得之、以何而治之、以何而失之而已。舍此則非所聞也。……蓋從來作史者、皆爲朝廷上之君若臣而作、曾無有一書爲國民而作者也。

其大蔽在不知朝廷與國家之分別，以為舍朝廷外無國家。……吾中國國家思想，至今不能興起者，數千年之史家，豈能辭其咎耶。（『飲冰室合集』文集之九、三頁一行、八行）

（63）原文＝知有個人而不知有群體。歷史者，英雄之舞臺也。舍英雄幾無歷史，雖秦西良史，亦豈能不置重於人物哉。雖然，善為史者，以人物為歷史之材料，不聞以歷史為人物之畫像；以人物為時代之代表，不聞以時代為人物之附屬。中國之史，則本紀、列傳，一篇一篇，如海岸之石，亂堆錯落。質而言之，則合無數之墓誌銘而成者耳。夫所貴乎史者，貴其能叙一群人相交涉相競爭相團結之道，能述一群人所以休養生息同體進化之狀，使後之讀者愛其群、善其群之心，油然而生焉。今史家多於鯽魚，而未聞有一人之眼光，能見及此者。此我國民之群力、群智、群德所以永不發生，而群體終不成立也。（『飲冰室合集』文集之九、三頁九行、一四行）

（64）原文＝知有陳述而不知有今務。凡著書貴宗旨，作史者將為若干之陳死人作紀念碑耶。為若干之過去事作歌舞劇耶。殆非也。將使今世之人，鑑之裁之，以為經世之用也。故泰西之史，愈近世則記載愈詳。中國不然，非鼎革之後，則一朝之史，不能出現。又不惟正史而已，即各體莫不皆然。……知古而不知今，謂之陸沉。夫陸沉我國民之罪，史家實尸矣（『飲冰室合集』文集之九、三頁十行、十一頁行）

（65）原文＝知有事實而不知有理想。……史之精神維何曰，理想是已。大群之中有小群。大時代之中有小時代。而群與群之相際，時代與時代之相續，其間有消息焉，有原理焉，作史者苟能勘破之，知其以若彼之因，故生若此之果，鑑既往之大例，示將來之風潮，

然後其書乃有益於世界。今中國之史，但呆然曰、某日有甲事，某日有乙事。至此事之何以生、其遠因何在、近因何在、莫能言也。其事之影響於他事或他日者若何、當得善果、當得惡果、莫能言也。（『飲冰室合集』文集之九、四頁九行～十一六行）

（66）原文＝能鋪叙而不能別裁。英儒斯賓塞曰、「或有告者曰、鄰家之貓、昨日產一子。以云事實，誠事實也。然誰不知為無用之事實乎。何也。以其與他事毫無關涉，於吾人生活上之行為，毫無影響也。然歷史上之事跡，其類是者正多，此斯氏教人以作史讀史之方也。泰西舊史家，固不免之，而中國殆更甚焉。某日日食也，某日地震也，某日冊封皇子也，某日某大臣死也，某日有某詔書也，滿紙填塞，皆此等鄰貓生子之事實，往往有讀盡一卷，而無一語有入腦之價值者。……吾中國史學知識之不能普及，皆由無一善別裁之良史故也。（『飲冰室合集』文集之九、五頁二行～十二行）

（67）原文＝能因襲而不能創作。中國萬事，皆取「述而不作」主義，而史學其一端也。（『飲冰室合集』文集之九、五頁一三行）

（68）いいでの分析は、梁啓超が『中国史叙論』で行った旧史の分析（君主の存在しかない・過去の事実の記載のみで、そこにある因果関係について論じていない・社会の発展が示されていない）を踏まえて、より詳細に分析したものと云えるであろう。

（69）細數二千年來史家，其稍有創作之才者，惟六人。一曰太史公，誠史界之造物主也。其書亦常有國民思想。如項羽而列諸本紀。孔子、陳涉而列諸世家。……其為立傳者，大率皆於時代極有關係之人也。……二曰杜君卿。通典之作，不紀事而紀制度。制度於國民全體之關係，有重於事焉者也，前此所無而杜創之，……三日鄭漁仲。……其通志、

二十略，以論斷為主，以記述為輔，實為中國史界放一光明也。……四日司馬溫公。……其結構之宏偉，其取材之豐贍，使後世有欲著通史者，勢不能不據為藍本，而至今卒未有能逾之者焉。……五日袁樞。今日西史，大率皆紀事本末之體也。而此體在中國，實惟袁樞創之。……但其著通鑑監紀事本末也，非有見於事與事之相聯屬，而欲求其原因結果也。……六日黃梨洲。黃梨洲著明儒學案，史家未曾有之盛業也。中國數千年，惟有政治史，而其他一無所聞。梨洲乃創為學史之格，使後人能師其意，則中國文學史可作也，中國種族史可作也，中國財富史可作也，中國宗教史可作也。……」（『飲冰室合集』文集之九、五頁一三行～六頁九行）

(70) 一九〇〇年に出版された『愼書』を旧『愼書』、及び一九〇五年に發行された重訂本『愼書』を新『愼書』と呼ぶこともある。

(71) 吳君遂＝吳保初（一八六九—一九一三）のこと。安徽廬江の人。君遂は字著書に『北山樓詩文集』がある。章太炎や宋平子と友好があつたとされる。（『中國近現代人物名號大辭典』・三六二頁右を参照）因みに章太炎には『清故刑部主事吳君墓表』がある。（『太炎文錄續編』卷五之上・『章太炎全集』第五冊・二一一頁所収）吳君遂に関する他の伝記資料に関しては『辛亥以来人物伝記資料索引』九一三～九一四頁・吳保初の欄を参照されたい。

(72) 「章太炎來簡 壬寅六月」は「致梁啓超書」の題名で、『章太炎政治論選集』上冊・一六七～一六九頁に全文が掲載されている。また『年譜長編』上冊・一三九～一四〇

頁に「致梁啓超書」の題名でほぼ全文が掲載されている。本稿においては、『新民叢報』掲載時の題名を使う。

(73) 「致吳君遂書」には通し番号が付いているが、これは『年譜長編』のみのものである。「致吳君遂書八」、「致吳君遂書九」の全文が掲載されている後述の『章太炎政治論選集』に通し番号はなく、日付によつて区別をしている。本稿では便宜上、通し番号のある方を使用する。

(74) 「致吳君遂書八」は一六五〜一六六頁に、「致吳君遂書九」は一七二〜一七三頁に所収。また『年譜長編』にも書簡の一部が引用されている

(75) 原文Ⅱ酷暑無事。日讀各種社會學書。平日有修中國通史之志。至此新舊材料。融合無間。興會勃發。教育會令作教育襍志。作新譯書局令潤色藁。一切謝絕。惟欲成就此志。

(76) 原文Ⅱ百卷之書。字數不過六七十萬。或尚不及。盡力為之。一年必可告竣。

(77) 後述する『章太炎來簡 壬寅六月』にある史目の「十二志」の中に「學術志」がある。

(78) 原文Ⅱ史事前已略陳，近方草創學術志

(79) 原注Ⅱ文明未開の時代、文明開化の時代、文明發達の時代、文明衰微の時代によつて概括する。(原文Ⅱ以朴略時代、人文時代、發達時代、衰微時代概括)

(80) 原注Ⅱ志というのは名称が古いのが良くないから、『逸周書』の編目の名を取つて解と改名するのを考えるかも知れない。御意見を戴きたい。(原文Ⅱ志名或病其舊、擬取逸周書篇題名號改名曰解俟商。)

(81) 原注Ⅱこれと方輿表とは同じものではない。あちら(方輿表)は沿革を簡略に記した

ものである。こちらは地理的な要害によつて社會、風俗の違いを明らかにするものである。そのため二つに分けざるをえないのである。(原文Ⅱ此與方輿表不同者。彼略記沿革。此因山川防塞以明社會風俗之殊異。故不得不分為二。)

(82) 原注Ⅱ祭礼を除いては、宗教志に入れる。(原文Ⅱ除祭禮入宗教)

(83) 原注Ⅱその他の学者はすべて學術志で詳細にする。この数人の事跡はやや多いので、この二伝を並べたのである。(原文Ⅱ其餘學者皆詳學術志。此數人事蹟較多。故列此兩傳。)

(84) 原注Ⅱこれは紀に入れるかもしれない。御意見を戴きたい。(原文Ⅱ此或入紀俟商)

(85) 原文Ⅱ全書擬為百卷。志居其半。表記紀傳亦居其半。

(86) 章太炎は通史の編纂を本気で考えていたようであるが、実際には史目のみで、通史そのものは現存しないようである。本文中に挙げた史目がいつたい如何なる基準で選択されたのかについては、個々更に細かい検証と分析が要求される。この史目そのものに関する分析は今後の研究課題としておきたい。

(87) 注90を参照。

(88) 機仲Ⅱ原文は「械仲」と表記。これは誤字であろう。

(89) 一事件ごとに、その顛末を記し、年代に関わらぬ記述方法。編年体の短所を補うために、資治通鑑に対して試みたもの。

(90) 原文Ⅱ竊以今日作史。若專為一代。非獨難發新理。而事實亦無由詳細調查。惟通史上下千古。不必以褒貶人物。臚叙事狀為貴。所重專在典志。則心理社會宗教諸學。一切

可以鎔鑄入之。典志有新理新說。自與通考會要等書。徒為八面鋒策論者異趣。亦不至如漁仲通志蹈專己武斷之弊。然所貴乎通史者固有二方面。一方以發明社會政治進化衰微之原理為主。則於典志見之。一方以鼓舞民氣啓導方來為主。則亦必於紀傳見之。四千年中帝王數百。師相數千。即取其彰彰在人耳目者。已不可更僕數。通史自有體裁。豈容為人人開明履歷。故於君相文儒之屬。悉為作表。其紀傳則但取利害關係有影響於今日社會者為撰數篇。猶有歷代社會各項要件。苦難貫串。則取械仲紀事本末例為之作記。全書擬為百卷。志居其半。表記紀傳亦居其半。蓋欲分析事類。各詳原理。則不能僅分時代。函胡綜叙。而志為必要矣。欲開濬民智。激揚士氣。則亦不能如漁仲之略於事狀。而紀傳亦為必要矣。

(91) 馬驢 ≡ 清、鄒平の人。伝は『清史稿』四八一・四三冊・一二一七〇頁にあり。

(92) 章太炎が史書は道家に求めるといふ考えは『漢書藝文志』の道家は史官より出たといふ記述にもとづくのであろう。

(93) 廓氏 ≡ Comte, Auguste (一七九八〜一八五七年) のこと。フランスの社会学者。

(94) 斯氏 ≡ Spencer, Herbert (一八二〇〜一九〇三) のこと。イギリスの社会学者。

(95) 葛氏 ≡ Giddings, Franklin Henry (一八五五〜一九三一年) のこと。アメリカの社会学者。

(96) 原文 ≡ 史事將舉、姑先尋理舊籍、仰梁以思、所得漸多。太史知社會之文明、而於廟堂則疏；孟堅、冲遠知廟堂之制度、而於社會則隔；全不具者為承祚、徒知記事；悉具者為漁仲、又多武斷。此五家者、史之弁旃也、猶有此失。吾濟高掌遠脱、寧知無所隕越、然意所儲積、則自以為高過五家矣。修通史者、漁仲以前、梁有吳均、觀其誣造《西京

雜記》，則通史之蕪穢可知也。言古史者，近有馬驢，其考證不及乾、嘉諸公，而識斷亦僞陋，惟愈於蘇轍耳。前史既難當意，讀劉子駿語，乃知今世求史，固當於道家求之。管、莊、韓三子，皆深識進化之理，是乃所謂良史者也。因是求之，則達於廓氏、斯氏、葛氏之說，庶幾不遠矣。

(97) 章太炎には『社会学』（岸本能武太著）の翻訳がある。

(98) 鄧實一八七七年生、一九五一年卒。廣東省順德の人。なお生まれは上海の高昌郷。

字は稟生または秋枚，別號は枚子、野殘、枚君、雞鳴など。室名は雞鳴風雨樓。簡朝亮の弟子，黄節と同門。一九〇五年、黄節等と國學保存會を組織し、『國粹學報』を創刊し、國粹主義を宣伝する。『國粹叢書・叢編』『國學教科書』『國學講義』等も編集する。後に神州國光社を創設し，黄賓虹と『美術叢書』を編纂。（『中國近現代人物名號大辭典』八五頁右・陳玉堂編著・浙江古籍出版社・一九九三年に拠る。）

(99) 政藝通報一八七七年二月二十四日（光緒二十八年正月十五日）創刊、上海で出版。月二回発行。政藝通報館發行。一九〇八年より月刊となり、一九〇八年三月停刊。上記の説明は『中國近代期刊篇目匯録』第二卷（上）、四七七頁、上海圖書館編、上海人民出版社に拠る。また『政藝通報』の篇目などに関する詳細は同書四七七頁、五七四頁を参照。）

(100) 共に『政藝通報』の中篇「史学文編」に所収。

(101) 前述したように、梁啓超の『新史学』は『新民叢報』誌上に、約九ヶ月に亘って不定期掲載しており、鄧實が確実に読むことが出来たのは、「中国之旧史」と「史学之界

説」の二篇であろう。なお、「論正統」（一九〇二年七月五日）も読んでいた可能性はあつたかも知れないが、『史学通論』の内容から判断する限り、鄧實は「史」の定義を特に重視していたと推測される。

(102)『政藝通報』は近代中国史料叢刊續編（一九七六年三月影印版、文海出版社）に『政藝叢書』として、壬寅（光緒二十八年）、癸卯（光緒二十九年）及び丁未（光緒三十三年）の三年分が収録されている。なお本稿において、壬寅第十二期に所収の部分は、『政藝通報』の初版（上海圖書館所蔵、請求記号三二二三）を用いたが、壬寅第十三期は上海圖書館でその所在がつかめず、やむを得ず上述の文海出版社の影印本に拠つて補つた。また文海出版社の影印本に、「史学通論五」は収録されていない。そこでここでは「史学通論一」から「史学通論四」までを対象とする。

なお、余談であるが、論者が上海圖書館を訪れた時（二〇〇二年十二月）、『政藝通報』は図書備え付けの目録カードになく、前掲の『中国近代期刊篇目匯録』によつて『政藝通報』が上海圖書館に所蔵されていることを圖書館員に確認してもらつた上で、ようやく閲覧させてもつた。請求記号はその時に圖書館員から聞き出したものである。

(103)原文「又聞之新史氏矣。史者敘述一羣一族進化之現象者也。非為陳人塑偶像也。非為一姓作家譜也。蓋史必有史之精神焉。異哉。中國三千年而無一精神史也。其所有則朝史耳。而非國史君史耳。而非民史、貴族史耳。而非社會史。統而言之。則一歷朝之專制政治史耳。……史豈若是邪。中國果有史邪。嗚乎中國無史矣。非無史無史家也。非無史家無史識也。」（鄧實撰、史學通論一、『政藝通報』壬寅第十二期、史学文編卷一、

一九〇二年八月十八日)

(104) 梁啓超はこの「精神」を「理想」と定義する。なおこの「理想」は日本語の理想とは違い、「未来への予測」と言う意味であろう。『新史学』の「中国之旧史」の中で挙げた「四蔽」の内の一つ「知有事実而不知有理想」にもとづく。

(105) 原文Ⅱ 中國史界革命之風潮不起則中國永無史矣。無史則無國矣。(前掲書に同じ。)

(106) この点については、第一章・第一節・三、四を参照。

(107) ここで言う三等とは、『春秋』の三世説(世の中が乱世、昇平世、太平世というふう)に發展する考え方)を踏まえている。

(108) 原文Ⅱ 鄧子曰深於春秋之言曰世有三等。余謂史亦有三等。上世一等為神權時代史曰神史。中世一等為君權時代史曰君史。近世一等為民權時代史曰民史。請言神史人羣進化之初期也。(史學通論二、『政藝通報』壬寅第十二期)

(109) 原文Ⅱ 鄧子請言君史。一代之君即一代之史也。王者有天下更正朔改服色頒制度御殿受賀以臨萬民。於是其一言一語則有曰詔令制誥寶訓焉。其一舉一動則有曰起居注實錄焉。其祭天也則有曰郊祀志明堂大禮焉。其巡遊也則有曰封禪文刻石焉。其征討也則有曰中興記平定方畧焉。其龍飛則有曰建元始元某年某月紀元之年表焉。其升遐則有曰仁聖神武某祖某皇徽號之謚書焉。若是者掌其事則謂之太史。太史記其事而載之文字則謂之史。……嗚呼此其史其腦坯中所有僅一帝王耳。(史學通論三、『政藝通報』壬寅第十二期)

(110) 原文Ⅱ 鄧子請更言民史。民史之為物中國未嘗有也。雖然，其意義可得而言焉。夫世

界之口進文明也。非一二人之進而一羣之進也。非一小羣之進而一大羣之進也。當其既進有已往之現象，當其未進有未來之影響。歷史者即其一大羣之現象影響也。既往之文明現象惟歷史能留之，未來之文明影響惟歷史能胎之。夫民者何羣物也。以羣生以羣強以羣治以羣昌。羣之中必有其內羣之經營焉。其經營之成蹟則歷史之材料也。羣之外必有其外羣之競爭焉。其競爭之活劇則歷史之舞臺也。是故舍人羣不能成歷史。舍歷史亦不能造人羣。政治家歟、哲學家歟、美術家歟、教育家歟、生計家歟、探險家歟、人羣之英雄而歷史之人物也。學術上歟、宗教上歟、種族上、歟風俗上、歟經濟上歟、社會上歟、人羣之事功而歷史之光榮也。嗚呼，夫是之謂史，夫是之謂民史。（史學通論四、『政藝通報』壬寅第十二期）

(111) 馬叙倫 一八八四年生、一九七〇年没。浙江杭州の人。字は彝初（後に夷初）、号は石翁、寒香、晩年は石屋老人とも。自伝『我在六十歳以前』によれば、馬は十五歳の時から師でもある歴史学者（原文では歴史学家と表記）の陳黻宸から歴史を学んでいる。著書に『馬叙倫學術論文集』、『說文解字六書疏証』、などがある。

(112) 『我在六十歳以前』二十三頁七行、九行（生活書店一九四七年版影印、『民国叢書』第二編、第八十六冊、上海書店所収）

(113) 『中国近代期刊篇目匯録』第二卷（上）、六八一、六八四頁（上海図書館編、上海人民出版社）によれば、馬叙倫には一九〇二年に「史学」に関する何編もの論文を、彼の師である陳黻宸主筆の雑誌『新世界学報』に掲載している。もしこれらの論文が見られれば、馬の「史」または「史学」に関する考え、またそこから如何にして『史界

大同説』を發表するに至ったのかが明確になるかも知れない。参考までにその論文名を列挙すれば左の如しである。

○史學総論（未完） 第一号（一九〇二年九月二日）に掲載

○問答（続第一号史學総論） 第三号（一九〇二年十月二日）に掲載

○中国無史辨（未完） 第五号（一九〇二年十月三十一日）に掲載

○原俠 第六号（一九〇二年十一月十四日）に掲載

○古羅馬兩大豪傑傳 第八号（一九〇二年十二月十四日）に掲載

○中国無史辨（続第五号） 第九号（一九〇二年十月三十日）に掲載

○明季俠士毛公列傳 第十一号（一九〇三年二月二十七日）に掲載

○宋愛國士岳文二公傳 第十五号（一九〇三年四月二十七日）に掲載

(114) 原文 聿昔唐世劉子元氏為史通。所以短長古史、垂一家言。其論便便焉、其意卓卓焉、其詞燦燦焉、郁郁哉。庶幾一代著作之林矣。然我病其隘也。夫史者何謂也。所以經緯宇宙推測淪化。其義彌博、其意彌廣、其範圍大而遠、其包羅夥而遐。（馬敘倫著『史界大同説』、『政藝通報』第二年癸卯第十五号、政史文編卷四、一九〇三年九月六日）

(115) 原文 時間とは、古今に亘る通時的なものを指す。

(116) 原文 今夫史者羣籍之總稱。凡天下之籍、不問其為政治、為宗教、為教育、莫不可隸於史。（前掲書に同じ）

(117) 原文 請言其（史を指す）實。有宇宙即有史。是史者與宇宙並生者也。史之名立於

文明開化之世。史之實建鼓於宇宙發育之朕。推史之體、大以經緯宇宙、小以綱紀一人一物一事一藝、達史之用可以促開化、可以進文明（前掲書に同じ）

(118) 原文Ⅱ史與人生具生。人一起一居一飲一食無非史也。……蓋自有史之名而後以史為學矣。而後學史矣。然以史為學而學史、史乃離乎飲食起居而別具其用矣。故自史為學、而後飲食起居不以為史。而史乃分產為四大部分、曰政治史、曰宗教史、曰教育史、曰學術史。（前掲書に同じ）

(119) 陳黻宸には『經術大同説』（初出は『新世界學報』第一号。『陳黻宸集』にも所収）という論文がある。しかし直接この論文が馬にヒントを与えたとは考えにくい。

(120) 「史」が無ければ、「国」もない、という発想は、鄧實の『史學通論』にも見られる。つまり「史」というものによつて「国」という概念を作り上げていこうという発想が、当時にはあつたのであろうか。

(121) 原文Ⅱ我中國其有史乎。中國非國乎。而何以無史。然中國之有史則已離乎飲食起居而為四部分矣。雖然中國其有政治史乎、宗教史乎、教育史乎、學術史乎。（前掲書に同じ）

(122) いいで言う學術史とは黄宗羲の『宋元学案』、『明儒学案』などを指すと思われる。『史界大同説』の中で、黄宗羲の学案に敬意を払つて学史と呼ぶという一文がある。附史於政治史耳。（前掲書に同じ）

(124) 原文Ⅱ史宜以大同觀言。曷謂乎。宜以大同觀言史則去羣籍之名而總稱之曰史。是則

析史而萬其名。不僅守政治、宗教、教育、學術而凡立一說成一理者莫不謂之史。是若是言史。而史始返其本。蓋一事理之能入於人腦筋、使之發思想、使之行事實則此思想此事實、毋論其如何廣大、如何狹小、如何精細、如何粗淺、如何高尚、如何卑陋、總之不能外人生觀念者也。不外人生觀念即皆為人生觀念。即皆可史者也。若是推史則何必二十四史何為而為史、何必三通六通九通而為史、更何必六經而為史。綜凡四庫之所有、四庫之未藏、通人著述、野叟感言、上如老莊墨翟之書迄於水滸諸傳奇而皆得名之為史。於其間而萬其名則飲者飲史、食者食史、文者文史、學者學史。立一說成一理者莫非史。若是觀史、雖中國之史亦夥矣。而史界始大同（前揭書、前揭誌第二年癸卯第十六号、政史文編卷四、同年九月二十一日）

（125）原文 〓 歐美哉。歐美哉。彼誠毋愧其文明哉。彼其於史殆亦能發大同之觀念矣。故有政治史而復析為法律史、理財史、有學術史而復析為哲學史、科學史。美詞有史、修文有史。蓋駸駸乎能析史而萬其名矣。此歐美之所以為歐美歟。若夫中國殆尚震懼於史名之尊。一若史者有不可及之階級、非大通者不能作。於乎、此中國史之所以衰也。（前揭書）

各章の初出について

各章における初出論文及び掲載誌は次の通りである。

第一章

第一節 「史学の目的」 Ⅱ 『中國史敍論』をめぐって、その執筆動機について、

東洋大学中国学会会報第八号、二〇〇一年十月

第二節 日本の明治期の歴史学が梁啓超に与えた影響について

Ⅱ 梁啓超の『新史学』への過程 浅探

東洋大学大学院紀要第三十四集、一九九九年度

第三節 「旧史」と「新史学」の「新」の解釈。

Ⅱ 梁啓超の『新史学』について―その「新」の考察を通して―

東洋文化復刊第九十一号、二〇〇三年九月

及び

『新史学』について―梁啓超の旧史に対する考え―浅探

東洋大学中国学会会報第七号、二〇〇〇年十月

第二章

第一節 章太炎について Ⅱ 清末における章太炎の歴史観について、その一考察、

東洋大学大学院紀要第三十六集、二〇〇一年度

なお、第二章の第二、三節は、日本中国学会第五十五回大会で発表した「『新史学』の周辺について」での口頭発表の一部が基になっている。(二〇〇三年 筑波大学)

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

- ① 本目録は、『東籍月旦』に紹介された日本書の所蔵先などを調査したものである。
- ② 書名については、『東籍月旦』掲載のものを取る。
- ③ 原著が西洋人の場合、可能な限り原表記を載せるようにした。
- ④ 「所蔵先①」というのは、国会図書館に所蔵のものを載せている。また括弧内は請求記号である。
- ⑤ 「所蔵先②」には国会図書館以外の所蔵先を載せている。括弧内は同じく請求記号。
- ⑥ 所蔵先名については文字を省略した。省略例は左記の通りである。
国会図書館Ⅱ国会 東洋大学Ⅱ東洋
早稲田大学・中央Ⅱ明治期図書コーナーⅡ早大・明
東京学芸大 社教Ⅱ東芸大 社教
- ⑦ 「定価」というのは『東籍月旦』による。これは中国での定価か。

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

	書名	著者	訳者	出版社	出版年	冊数	定価	所蔵先①	所蔵先②
1	中等教育倫理講	元良勇次郎		右文館	1900.2	2	1元5角	国会 (YDM11663)	東洋大学(150.4:MY:2)
2	倫理通論	井上円了		普及舎	1887.2-4	2	1元2角	国会 (YDM11676)	東洋大学(E150.1:IE)
3	中等教育倫理学教科書	法国查彌	岡田良平	内田老鶴圃	1893.10 ~1894.9	4	1元4角	国会 (YDM11615)	早大・明(ロ09 00405 1-ロ09 004054)
4	新編倫理教科書	井上哲次郎・高山林次郎		金港堂書籍	1898.12	5	1元2角5	国会 (YDM11659)	早大・明(ロ09 00233 1-ロ09 00233 3)総説、巻上、巻下を存する。
5	修身原論	法国福靈(フランク: Franck, Adolphe)	河津祐之	文部省編輯局	1884.6	1	6角2	国会 (YDM9976)	①東芸大・社教(T1B1/35/F43 38006974)②日大文理(150.1 F44 10781632)③筑波大(ホ520-92 100761141834)
6	倍因氏倫理学	英国倍因 (アレキサンダー・ベイン: Bain, Alexander)	添田壽一	松田周平	1888.6	5	1元5角	国会 (YDM11607)2冊 (第1-6合本)	早大・明(ロ09 00149)第一冊を存する。
7	珂氏倫理学	英国珂的活(ケルダール: Wutt)	中村清彦	開新堂	1888.9	1	1元		早大・明(ロ09 04057)
8	斯氏倫理原論	英国斯賓塞爾(スペンサー: Spencer, Herbert)	田中登作	通信講学会	1892.11	1	7角	国会 (YDM10667)	早大・明(ロ09 00538)
9	倫理学新書	德国羅哲埃(ヘルマン・ロットエ: Lotze, Rudolf Hermann)	立花銑三郎	富山房	1891.12(第2版は1892.2)	1		国会 (YDM11638)・第2版は	
10	倫理学	本良勇次郎	小野英之助	富山房	1893.6・訂2版1894.7	1	1元1角	国会 (YDM11600)・訂2版 (YDM11601)	①東洋大学(150.1:MY)②早大・明(ロ09 00183)
11	越氏倫理新篇	美国越布列(シー・シー・エップエレット: Everett, Charles Carroll)	渡辺又二郎	金港堂書籍	1894.4	1	5角		東洋大学(150.1:EC)
12	倫理学書解説	育成会編		育成会	1900.8-1901.6	12	4元6角		①早大・明(ロ09 00026)②東洋大に1905.10の増補改訂版(150.31:r:1ロ)有り。※早稲田所蔵は第4-8、10、12の7冊の

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

	書名	著者	訳者	出版社	出版年	冊数	定価	所蔵先①	所蔵先②
13	主楽派之倫理説	網島栄一郎		東京専門学校	19--				早大・明(ロ09 00008)
14	賽斯氏倫理学綱要	田中達・渡辺龍聖		(早稲田大学出版部)	1903.7			国会(YDM10817)	早大・明(ロ09 00687)
15	倫理学精義	英国麦懇治(ジェー・エス・マッケンヂー)	野口援太郎	富山房	1901.7	1	1元4角		①東洋大学(150.1:MJ)②早大・明(ロ09 00242)
16	倫理学説批判	英国士焦域(ヘンリー・シヂウキック:Sidgwick, Henry)	山辺知春・大田秀穂	大日本図書	1898.12			国会(YDM11643)	①東洋大学(150.1:SH:4ロ)②早大・明(ロ09 00242)
17	格里安倫理学	英国格里安	西晋一郎			1	2元		
18	倫理学説十回講義	中島力造		富山房	1898	1	9角		①東洋大学(150.4:NR)②早大・明(ロ09 00432)
19	倫理学史	山本良吉		富山房	1897.11	1	1元	国会(YDM11630)	①早大・明(ロ09 00426)②東洋大学(150.31:R:1)のは1902年の訂正3版
20	東洋西洋倫理学史	木村鷹太郎		博文館	1898.4	1	35銭	国会(YDM11631)	早大・明(ロ09 00910及びイ04 00151 003)
21	新体西洋歴史教科書	本多浅治郎							
22	附参照図画	本多浅治郎							
23	附参考書	本多浅治郎							東洋大に本多浅治郎の『西洋歴史参考書』(230.1:HA-2)有り。同一か?
24	万国史綱	元良勇次郎、家永豊吉		三省堂書店	1892.9--1893.4	2	1元2角	国会(YDM151)	早大・明(ロ09 00065 1-ロ09 00065 2)
25	西洋史綱	箕作元八、峯岸米造		六盟館	1899.1	2	1元7角5	国会(YDM3634)	早大・明(ロ09 00216 1とロ09 00284 2)
26	世界通史	德国布列	和田万吉	富山房	1898	1	1元7角		①東洋大学(209:PK:3)②早大・明(ロ09 00613)
27	世界歴史	磯田良		小野英之助	1892.9	1	1元		早大・明(リ03 00064)

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

	書名	著者	訳者	出版社	出版年	冊数	定価	所蔵先①	所蔵先②
28	新編万国歴史	長沢市蔵		内田老鶴圃	1892.1- 1893.6	3	1元6角 5		早大・明(リ09 00524 1上編、 リ09 00524 2中編、リ09 00524 3下編)
29	万国歴史	天野為之		富山房書店	1887.9	1	1元3角		早大・明(リ09 00026)
30	万国政治歴史	下山寛一郎		内田老鶴圃	1890.9				早大・明(リ09 00020 1)
31	万国史要	辰巳小次郎、小川銀次		金港堂書籍	1896.11	1	8角		早大・明(リ09 00570)
32	万国史	今井恒郎		吉川半七	1895.5	1	1元		早大・明(リ09 00500 1)
33	世界史上巻	坂本健一		博文館	1901.7	1	1元6角		早大・明(リ03 00298 1)
34	万国史綱目	重野安繹		勸学会	1902.7	上編 4	1元	国会 (YDM152)	東大総合図書館([1-3]G60:14 0002784908;[4-6]G60:14 0002784916;[7-8]G60:14 0002784924;)
35	西洋上古史	浮田和民		東京専門学校 と早稲田 大学出版部	18-				①早大・明(リ09 01166-9)②東 洋大学 (230.3:UK) のは1905年 の版
36	上古史	坪内雄蔵 (逍遙)		東京専門学校	19-				早大・明(リ09 00055)
37	中古史	坪内雄蔵		東京専門学校	18-				早大・明(リ09 01157)
38	世界近世史	松平康国		東京専門学校	1901.9	1	1元2角		早大・明(リ03 00299)
39	近世泰西通鑑	美国棟亜	島田三郎、波 多野伝三郎、 肥塚龍、鈴木 良輔、青木 匡、沼間守一 など訳	輿論社出版 部	1883.5- 1885?	27	各1元		早大・明(リ09 00423 1-リ09 00423 4)
40	欧洲新政史	法国米天黎	東邦協会	八尾書店	1894.10	2	1元		早大・明(リ09 04791 1-2)
41	最近世界史上巻	坪井九馬三		文学社	1903.2-4	1	1元3角		早大・明(リ09 01197 1-2)

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

	書名	著者	訳者	出版社	出版年	冊数	定価	所蔵先①	所蔵先②
42	十九世紀史	英国馬懇西	幸田成友	博文館	1896. 2	1	5毫		早大・明(リ09 00523)
43	十九世紀列国史	美邦札遜	福井安岡	福井準造	1897. 7	1	3毫		早大・明(リ09 00583)
44	欧洲十九世紀史	美邦札遜	大内暢三	東京専門学校出版部	1901. 6	1	1元2角5		早大・明(リ09 00630)
45	最近世史	松平康国		早稲田大学出版部	19-				早大・明(リ09 01428)
46	近時外交史	有賀長雄		東京専門学校出版部	1898. 2	1	1元5角		早大・明(カ05 01337)
47	今世欧洲外交史	法国比縉兒	酒井雄三郎	東京専門学校出版部	189912-1900. 1	2	3元5角		早大・明(カ05 00142 1-2)
48	十九世紀								
49	文明史	家永豊吉							
50	欧羅巴文明史	法国基梭	永峯秀樹	奎章閣	1874. 9-1877. 6	16			①早大・明(リ09 05277)②早大・明(リ09 05303)
51	世界文明史	高山林次郎		博文館	1898. 1	1	3角5		①早大・明(リ03 04617)②早大・明(リ03 04617)
52	中等東洋史	桑原鷺蔵		大日本図書	1898. 3-5	2	1元		早大・明(リ07 00235 1-2)
53	東洋史綱	児島献吉郎		八尾書店	1895. 2	2	各3角		早大・明(リ07 00501)
54	東洋史要	市村瓊次郎			①明治30年			①国会(YDM3367)②国会(YDM3371)「東洋史要 刪正」市村桂次郎編 訂正2版	①早大・明(リ07 05225)②早大・明(リ07 05154)
55	中等教育東洋歴	木寺柳次郎					8角		
56	中等教育東洋史	藤田豊八		文学社	1897. 10	2	各3角5		早大・明(リ07 00239 1上-2下)
57	東洋史	高桑駒吉							

付録1 梁啓超『東籍月旦』に引用された日本書の調査

	書名	著者	訳者	出版社	出版年	冊数	定価	所蔵先①	所蔵先②
58	東邦近世史 上巻	田中萃一郎		東邦協会	1900.6-1902.12	上1	1元		①早大・明(リ07 00290 1-2)②早大・明(リ07 01123 2)
59	支那史	市村瓚次郎・瀧川龜太郎		吉川半七	1892.5	1	1元3角		①早大・明(リ08 00472)
60	支那通史	那珂通世							
61	清史攬要	増田貢		光風社	1877.6	6			中央B1研究書庫(文庫11 A1670 1-6)
62	支那開化小史	田口卯吉		経済雑誌社	1890.8	1	6角5		①早大・明(リ08 00415)
63	支那文明史	白河次郎・国府種徳		博文館	1900.6	1	3角5		早大・明(リ08 01730)
64	支那文明史論	中西牛郎		博文館	1896.11	1	3角5		早大・明(リ08 00540)
65	帝国史略	有賀長雄		①牧野善兵衛②博文館	①1892.6-1893.12	1	1元5角		①早大・明(リ05 00077 1-4)②早大・明(リ05 04458)
66	二千五百年史	竹越与三郎		①警醒社書店②開拓社	①1896.5②1896.5	1	1元5角		①早大・明(リ05 00875)、②早大・明(リ05 04702)
67	日本開化小史	田口卯吉		田口卯吉	1877.9-1883.3	6	7角半		①中央B1研究書庫(イ13 00610 1-6)
68	開国始末	島田三郎		東京大学出版界	1978.4-9	1	1元5角		①高田記念図書館(210 0038 066=1(高田))
69	開国起原	勝安房		吉川半七	1893.1	3	3元		①早大・明(リ05 00477 1-3)②早大・明(リ05 05416 1-3)
70	懷往事談	福地源一郎(号は「桜痴」)		民友社	1894 (初版は明治27/04刊)	1	2角	①国会(YDM7274)②国会(YDM1778)※①は明治30/08刊4版②は1897刊4版	①早大・明(リ05 04760)②早大・明(リ05 05848)
71	明治歴史	坪谷善四郎		博文館	1893.1-6	2	6角	国会(YDM2186)	早大・明(リ05 00084 1上巻、リ05 00084 2下巻)
72	明治三十年史	高山林次郎		博文館	1898.5	2	6角		中央B1研究書庫(文庫11 A1656)

付録 2 近代中国の雑誌に所収される歴史関係論文目録

- ① 目録に収められている論文は全て『中国近代期刊篇目匯録』による。
- ② ここに収めた基準は、その掲載雑誌に、「史」、「史学」、「史」、「歴史」など、歴史に関する篇目名が付いているものとする。
- ③ 収録年数は、一九〇二年を起点にし、一年以内のものを収録してある。ただし、例外もある。
- ④ 本目録はまだ未定稿であるので、遺漏などは御寛恕下されたい。

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1901/10	論中國地勢, 普通學報, 第01期, 史學科, 仁和葉浩吾		
1901/	苗族紀, 普通學報, 第02期, 史學科		
1901/	西郷従道傳(未完), 普通學報, 第03期, 史學科, (日)鳥谷部銑太郎原著・本書室内編輯所譯		
1901/12/01(光緒辛丑10月21)	山東省城大學堂暫行試辦章程(未完), 選報, 第03號, 文學小史		
1901/12/11(光緒辛丑11月01)	山東省城大學堂暫行試辦章程(續), 選報, 第04號, 文學小史		
1901/12(光緒辛丑11月上)	内外教育小史(未完), 教育世界, 第15號, 小史, (日)原亮三郎編・桐郷沈紘譯		
1901/12/31(光緒辛丑11月21日)	賢王興學, 選報, 第06號, 文學小史	巨紳興學, 選報, 第06號, 文學小史	記山西大學堂, 選報, 第06號, 文學小史
1901/12/31(光緒辛丑11月21日)(2)	編譯新書, 選報, 第06號, 文學小史	識字新法, 選報, 第06號, 文學小史	學生卒業, 選報, 第06號, 文學小史
1902/01(光緒辛丑11月下)	内外教育小史(續), 教育世界, 第16號, 小史, (日)原亮三郎編・沈紘譯		
1902/01(光緒辛丑12月上)	内外教育小史(續), 教育世界, 第17號, 小史, (日)原亮三郎編・沈紘譯		
1902/02(光緒辛丑12月下)	内外教育小史(續完), 教育世界, 第18號, 小史, (日)原亮三郎編・沈紘譯	十九世紀教育史, 教育世界, 第18號, 教史, (日)熊谷五郎	
1902/02/28(壬寅01月21日)	會議學堂出身折・派遣學生學習師範稟・豐子學堂, 選報, 第08號, 文學小史		
1902/03/10(壬寅02月01日)	奏辦京師大學堂情形折(未完), 選報, 第09號, 文學小史, 張百熙		
1902/03/20(壬寅02月11日)	奏辦京師大學堂情形折(續完), 選報, 第09號, 文學小史, 張百熙	日本留學生調查錄, 選報, 第09號, 文學小史, 張百熙	

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1902/03(壬寅02月)	西郷従道傳(未完), 普通學報, 第04期, 史學科, (日)烏谷部銑太郎原著・本書室内編輯所譯		
1902/04/08(壬寅03月01日)	新史學(録新民叢報), 選報, 第12號, 論說, 中国之新民	攷察學校・京師學堂, 選報, 第12號, 文學小史	
1902/04/18(壬寅03月11日)	閩中女學, 選報, 第13號, 文學小史		
1902/05(壬寅04月)	支那史論, 普通學報, 第05期, 史學科, 湯濟滄譯		
1902/05(光緒壬寅年04月上)	教授法沿革史(未完), 教育世界, 第25號, 教授史, (日)大瀬甚太郎・中川延治		
1902/05(光緒壬寅年04月下)	教授法沿革史(續), 教育世界, 第26號, 教授史, (日)大瀬甚太郎・中川延治		
1902/05/28(壬寅04月21日)	學生會館・修身講義, 選報, 第17號, 文學小史		
1902/06/06(壬寅05月01日)	南昌學約・政治學講義錄簡明章程・富商興學, 選報, 第18號, 文學小史		
1902/06(光緒壬寅年05月上)	教授法沿革史(續), 教育世界, 第27號, 教授史, (日)大瀬甚太郎・中川延治		
1902/06/16(壬寅05月11日)	上海出洋遊學生招待會簡明章程・女報出版, 選報, 第18號, 文學小史		
1902/06/26(壬寅05月21日)	上海女學會演說, 選報, 第20號, 文學小史		
1902/06(光緒壬寅年05月下)	教授法沿革史(續完), 教育世界, 第28號, 教授史, (日)大瀬甚太郎・中川延治		
1902/07/05(壬寅06月01日)	中國教育會章程・女學萌芽・學堂彙志, 選報, 第21號, 文學小史		
1902/07/15(壬寅06月11日)(1)	晉撫岑奏歸併學堂折, 選報, 第22號, 文學小史, 岑春煊	山西洋務局司道遵議派員至日本遊歷并閱看時務書報章程十四條, 選報, 第22號, 文學小史	膠州請設學堂, 選報, 第22號, 文學小史

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1902/07/15(壬寅06月11日)(2)	未嘗無人, 選報, 第22號, 文學小史		
1902/08/18(光緒28/07/15)	史學通論(1)~(4), 政藝通報, 壬寅第12期, 史學文編, 順德鄧實		
1902/09/02(光緒28/08/01)	史學總論(未完), 新世界學報, 第01号(壬寅第01期), 史學, 仁和馬叙倫	史學通論(續完), 政藝通報, 壬寅第13期, 史學文編, 鄧實	序泰西通史, 政藝通報, 壬寅第13期, 史學文編, (日)藤田豐八
1902/09/16(光緒28/08/15)	獨史, 新世界學報, 第02号(壬寅第02期), 史學, 陳黻宸	十九世紀外交史之概略(未完), 政藝通報, 壬寅第14期, 史學文編, 邵陽李震鐸	
1902/10/02(光緒28/09/01)	問答(續第01號史學總論), 新世界學報, 第03号(壬寅第03期), 史學, 馬叙倫夷初	十九世紀外交史之概略(續完), 政藝通報, 壬寅第15期, 史學文編, 邵陽李震鐸	
1902/10/16(光緒28/09/15)	班史正謬, 新世界學報, 第04号(壬寅第04期), 史學, 杜士珍	川中兩愚童傳, 新世界學報, 第04号(壬寅第04期), 史學, 湯調鼎	中西人物比較項羽拿破崙, 新世界學報, 第04号(壬寅第04期), 史學, 樂清黃志蘇仲
1902/10/16(光緒28/09/15)	論中國亟宜編輯民史以開民智, 政藝通報, 壬寅第17期, 史學文編, 樵隱擬稿	新古巴(未完), 政藝通報, 壬寅第17期, 史學文編, 廣德李震鐸	
1902/10/31(光緒28/10/01)	論周季人才激擊競進之大勢, 新世界學報, 第05号(壬寅第05期), 史學, 湯調鼎	中國無辨(未完), 新世界學報, 第05号(壬寅第05期), 史學, 馬叙倫	新古巴(續完), 政藝通報, 壬寅第18期, 史學文編, 廣德李震鐸
1902/10/31(光緒28/10/01)	哥薩克東方侵略史序文(未完), 政藝通報, 壬寅第18期, 史學文編, 日本元譯者		
1902/11/14(光緒28/10/15)(1)	杜國大統領古魯家列傳(未完), 新世界學報, 第06号(壬寅第06期), 史學, 杜士珍	原俠, 新世界學報, 第06号(壬寅第06期), 史學, 馬叙倫	中西人物比較堯舜華盛頓, 新世界學報, 第06号(壬寅第06期), 史學, 黃式蘇
1902/11/14(光緒28/10/15)(2)	支那問題(未完), 新世界學報, 第06号(壬寅第06期), 史學, (日)持地法三郎著・湯調鼎譯	哥薩克東方侵略史序文(續), 政藝通報, 壬寅第19期, 史學文編, 日本元譯者	
1902/11/30(光緒28/11/01)	方志, 新世界學報, 第07号(壬寅第07期), 史學, 陳懷	支那問題(續完), 新世界學報, 第07号(壬寅第07期), 史學, (日)持地法三郎著・湯調鼎譯	杜國大統領古魯家列傳(續), 新世界學報, 第07号(壬寅第07期), 史學, 杜士珍
1902/11/30(光緒28/11/01)(2)	哥薩克東方侵略史序文(續完), 政藝通報, 壬寅第20期, 史學文編, 日本元譯者	譯日本維新活動歷史序(未完), 政藝通報, 壬寅第20期, 史學文編, 雲間陸規亮	
1902/12/10	史學概論, 譯書彙編, 第02年第09期, 歷史・衮父		

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1902/12/14(光緒28/11/15)	杜國大統領古魯家列傳(續完), 新世界學報, 第08号(壬寅第08期), 史學, 杜士珍	古羅馬兩大豪傑傳, 新世界學報, 第08号(壬寅第08期), 史學, 馬叙倫	譯日本維新活動歷史序(續完), 政藝通報, 壬寅第21期, 史學文編, 陸規亮
1902/12/14(光緒28/11/15) (2)	比律賓志士獨立傳序(未完), 政藝通報, 壬寅第21期, 史學文編, (日)宮本平		
1902/12/27	史學概論(續完), 譯書彙編, 第02年第10期, 歷史・衮父		
1902/12/30(光緒28/12/01)	學術思想史之評論, 新世界學報, 第09号(壬寅第09期), 史學, 陳懷	中國無辨(續第05號), 新世界學報, 第09号(壬寅第09期), 史學, 馬叙倫	
1903/02/12(光緒29/01/15)	論周末諸大家學派與中國歷史之關係(未完), 新世界學報, 第10号(癸卯第01期), 史學, 樂清高步雲	菲律賓豪傑傳(未完), 新世界學報, 第10号(癸卯第01期), 史學, 湯調鼎	
1903/02/16	歐洲歷史之新人種, 譯書彙編, 第02年第11期, 歷史・汪榮寶		
1903/02/27(光緒29/02/01)	明季俠士毛公列傳, 新世界學報, 第11号(癸卯第02期), 史學, 馬叙倫	論周末諸大家學派與中國歷史之關係(續), 新世界學報, 第11号(癸卯第02期), 史學, 高步雲	
1903/03/13(光緒29/02/15)	拔都別傳(未完), 譯書彙編, 第02年第12期, 歷史・汪榮寶	讀埃及近世史跋尾, 新世界學報, 第12号(癸卯第03期), 史學, 陳懷	論周末諸大家學派與中國歷史之關係(續), 新世界學報, 第12号(癸卯第03期), 史學, 高步雲
1903/04/12(光緒29/03/15)	菲律賓戰史獨斷, 新世界學報, 第14号(癸卯第05期), 史學, 湯調鼎譯著		
1903/04/27	拔都別傳(續譯書彙編第02年第12期完), 政法學報, 癸卯第01期, 學術・歷史, 汪榮	宋愛國士岳文二公傳, 新世界學報, 第15号(癸卯第06期), 史學, 馬叙倫	
1903/08/13	維也納會議之顛末(未完), 政法學報, 癸卯第02期, 學術・歷史, 攻法子		
1903/09/13	日本國民第一快意之歷史(未完), 政法學報, 癸卯第03期, 學術・歷史, 守肅		
1903/10/15	民權自由之敵太利宰相梅特捏傳(未完), 政法學報, 癸卯第04期, 學術・歷史, 君武		

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1903/12/15	梅特捏傳 (續癸卯第04期完), 政法學報, 癸卯第04期, 學術・歴史, 君武		
1904/01/15	中俄交渉略史, 政法學報, 癸卯第07・08期合本, 學術・歴史, 守肅		
1904/02(光緒30年01月上旬)	美國弗蘭克林自傳 (未完)・美國教育家瑪利麗蓉女史傳, 教育世界, 第69號, 傳記		
1904/03(光緒30年01月下旬)	美國弗蘭克林自傳 (續)・德國文豪格代希爾列爾合傳, 教育世界, 第70號, 傳記		
1904/03(光緒30年02月上旬)	美國弗蘭克林自傳 (續), 教育世界, 第71號, 傳記		
1904/04(光緒30年02月下旬)	美國弗蘭克林自傳 (續), 教育世界, 第72號, 傳記		
1904/04(光緒30年03月上旬)	幼稚園創始者弗烈培傳・美國弗蘭克林自傳 (續), 教育世界, 第73號, 傳記		
1904/05(光緒30年03月下旬)	美國弗蘭克林自傳 (續), 教育世界, 第74號, 傳記		
1904/06(光緒30年04月下旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著) (未完), 教育世界, 第76號, 史傳	德國教育學大家裴奈楷傳・德國文化大改革家尼采傳, 教育世界, 第76號, 史傳	德國文化大改革家尼采傳, 教育世界, 第76號, 史傳
1904/06(光緒30年05月上旬)	歐洲教育史要 (續), 教育世界, 第77號, 史傳, 譯日本谷富所著	希臘大哲學家雅里大德勒傳, 教育世界, 第77號, 史傳	
1904/07(光緒30年05月下旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著) (續), 教育世界, 第78號, 史傳		
1904/07(光緒30年06月上旬)	近代英國哲學大家斯賓塞傳, 教育世界, 第79號, 史傳		
1904/08(光緒30年06月下旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著) (續第78號), 教育世界, 第80號, 史傳	德國教育學大家海爾巴脫傳(附司脫伊秩耳列耳), 教育世界, 第80號, 史傳	
1904/08(光緒30年07月上旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著) (續), 教育世界, 第81號, 史傳		
1904/09(光緒30年07月下旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著) (續)・弗蘭楷傳・巴瑟德傳, 教育世界, 第82號,		

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1904/09(光緒30年8月上旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著)(續), 教育世界, 第83號, 史傳		
1904/10(光緒30年8月下旬)	德國哲學大家叔本華傳, 教育世界, 第84號, 史傳		
1904/10(光緒30年9月上旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著)(續), 教育世界, 第85號, 史傳		
1904/11(光緒30年9月下旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著)(續), 教育世界, 第86號, 史傳		
1904/11(光緒30年10月上旬)	歐洲教育史要(譯日本谷富所著)(續完), 教育世界, 第87號, 史傳		
1904/12(光緒30年10月下旬)	希臘聖人蘇格拉底傳, 教育世界, 第88號, 史傳		
1904/12(光緒30年11月上旬)(1)	希臘大哲學家柏拉圖傳, 教育世界, 第89號, 史傳	德國教育大家郭美紐司傳, 教育世界, 第89號, 史傳	英國教育大家洛克傳, 教育世界, 第89號, 史傳
1904/12(光緒30年11月上旬)(2)	法國教育大家盧騷傳, 教育世界, 第89號, 史傳		
1905/03(光緒31年2月上旬)	德國教育屈有功者袁森傳, 教育世界, 第95號, 史傳		
1905/04(光緒31年2月下旬)	美國教育家巴嘉傳, 教育世界, 第97號, 史傳		
1905/08(光緒31年6月下旬)	德國神學大家休來哀摩楷傳, 教育世界, 第105號, 史傳		
1905/09(光緒31年8月上旬)	中國教育史資料(未完), 教育世界, 第107號, 教育史, 將齣		
1905/09(光緒31年8月下旬)	中國教育史資料(續), 教育世界, 第108號, 教育史, 將齣		
1905/10(光緒31年9月上旬)	中國教育史資料(續), 教育世界, 第109號, 教育史, 將齣		
1905/11(光緒31年10月上旬)	中國教育史資料(續第109號), 教育世界, 第111號, 教育史, 將齣		

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1905/11(光緒31年10月下旬)	中國教育史資料(續), 教育世界, 第112號, 教育史, 將齣		
1905/12(光緒31年11月上旬)	中國教育史資料(續), 教育世界, 第113號, 教育史, 將齣		
1905/12(光緒31年11月下旬)	中國教育史資料(續完), 教育世界, 第114號, 教育史, 將齣		
1906/01(光緒丙午01月上旬)	教育家猛德尼傳, 教育世界, 第117號, 傳記		
1906/02(光緒丙午01月下旬)	英國哲學大家休蒙傳・教育家之希爾列爾, 教育世界, 第118號, 傳記		
1906/02(光緒丙午02月上旬)	英國哲學大家霍布士傳, 教育世界, 第119號, 傳記		
1906/03(光緒丙午02月下旬)	德國哲學大家汗德傳・貝斯達祿奇事跡(未完), 教育世界, 第120號, 傳記		
1906/04(光緒丙午03月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續第120號), 教育世界, 第122號, 傳記	荷蘭哲學大家斯披洛若傳, 教育世界, 第122號, 傳記	
1906/04(光緒丙午04月上旬)	英儒斯邁爾斯傳, 教育世界, 第123號, 傳記		
1906/05(光緒丙午閏月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續), 教育世界, 第125號, 傳記		
1906/06(光緒丙午閏月下旬)	汗德詳傳, 教育世界, 第126號, 傳記		
1906/07(光緒丙午05月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續第126號), 教育世界, 第128號, 傳記		
1906/07(光緒丙午06月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續), 教育世界, 第129號, 傳記		
1906/08(光緒丙午04月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續), 教育世界, 第130號, 傳記		
1906/08(光緒丙午07月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續), 教育世界, 第131號, 傳記		

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1906/09(光緒丙午07月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續),教育世界,第132號,傳記		
1906/09(光緒丙午08月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續),教育世界,第133號,傳記		
1906/10(光緒丙午08月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續),教育世界,第134號,傳記		
1906/10(光緒丙午09月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續),教育世界,第135號,傳記		
1906/11(光緒丙午09月下旬)	貝斯達祿奇事跡(續),教育世界,第136號,傳記		
1906/11(光緒丙午10月上旬)	貝斯達祿奇事跡(續完),教育世界,第137號,傳記		
1907/02(光緒丁未01月上旬)	脫爾斯泰傳(未完),教育世界,第143號,傳記		
1907/03(光緒丁未01月下旬)	脫爾斯泰傳(續完),教育世界,第144號,傳記		
1907/03(光緒丁未02月上旬)	戲曲大家海別爾(未完),教育世界,第145號,傳記		
1907/04(光緒丁未02月下旬)	雍格(附學說),教育世界,第146號,傳記		
1907/04(光緒丁未03月上旬)	戲曲大家海別爾(續第145號),教育世界,第147號,傳記		
1907/05(光緒丁未03月下旬)	戲曲大家海別爾(續完),教育世界,第148號,傳記		
1907/06(光緒丁未04月下旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第150號,學術史,(日)井上哲治郎	英國小說家斯提逢孫傳,教育世界,第150號,傳記	
1907/06(光緒丁未05月上旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第151號,學術史,(日)井上哲治郎	名士修學談(譯日本國士雜誌),教育世界,第151號,傳記	
1907/07(光緒丁未05月下旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第152號,學術史,(日)井上哲治郎	名士修學談(譯日本國士雜誌)(續),教育世界,第152號,傳記	

発行年	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(1)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(2)	論文名・所収雑誌・号数・篇目・著者(3)
1907/07(光緒丁未06月上旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第153號,學術史,(日)井上哲治郎		
1907/08(光緒丁未06月下旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第154號,學術史,(日)井上哲治郎	名士修學談(續第152號),教育世界,第154號,傳記	
1907/08(光緒丁未07月上旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第155號,學術史,(日)井上哲治郎	近世教育之母科邁紐斯傳,教育世界,第155號,傳記,(日)眞田幸憲	
1907/09(光緒丁未07月下旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第156號,學術史,(日)井上哲治郎	近世教育之母科邁紐斯傳(續),教育世界,第156號,傳記,(日)眞田幸憲	
1907/09(光緒丁未08月上旬)	歐洲教育史(未完),教育世界,第157號,教育史	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第157號,學術史,(日)井上哲治郎	近世教育之母科邁紐斯傳(續),教育世界,第157號,傳記,(日)眞田幸憲
1907/10(光緒丁未08月下旬)	歐洲教育史(續),教育世界,第158號,教育史	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第158號,學術史,(日)井上哲治郎	近世教育之母科邁紐斯傳(續),教育世界,第158號,傳記,(日)眞田幸憲
1907/10(光緒丁未09月上旬)	歐洲教育史(續),教育世界,第159號,教育史	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第159號,學術史,(日)井上哲治郎	沙士比傳,教育世界,第159號,傳記
1907/10(光緒丁未09月下旬)	歐洲教育史(續),教育世界,第160號,教育史	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第160號,學術史,(日)井上哲治郎	倍根傳,教育世界,第160號,傳記
1907/11(光緒丁未10月上旬)	日本陽明派之哲學史(續),教育世界,第161號,學術史,(日)井上哲治郎		
1907/11(光緒丁未10月下旬)	日本陽明派之哲學史(續完),教育世界,第162號,學術史,(日)井上哲治郎	英國大詩人白衣龍小傳,教育世界,第162號,傳記	
1907/12(光緒丁未11月上旬)	歐洲教育史(續第160號),教育世界,第163號,教育史		
1908/01(光緒丁未12月上旬)	歐洲教育史(續第163號),教育世界,第165號,教育史	日本教育學術家傳略(未完),教育世界,第165號,傳記	
1908/01(光緒丁未12月下旬)	日本教育學術家傳略(續完),教育世界,第166號,傳記		

付録 3 梁啓超著述繫年索引

- ① 本索引は李国俊編『梁啓超著述繫年』（復旦大学出版社、一九八六年）に対応している。
- ② 本索引の配列は拼音表記の順による。
- ③ 書名の右側にある数字は『梁啓超著述繫年』の頁数を指す。
- ④ 原則として見出し語は、各書名の第一字を見出し語とし、それをまず拼音で表記し、それに当たる漢字を括弧内に示した。例：「B（阿）」
- ⑤ 同じ見出し語でも、その後に来る語の関係上、さらに細かく分類できるもの（人名・地名など）に関しては、出来るだけ分類し、書名の第二字目、三字目を示して別に項目を設けた。
- ⑥ 原則として見出し語には各書名の第一字目を第二字目、三字目を示した方がわかりやすい場合は、見出し語が二字、三字の場合もある。
- ⑦ 本索引はもともと『新生新語』創刊号（一九九七年）に発表したものである。なおここに収録するさいに、二段組みから、三段組みに変えた。

al (阿)		bal (巴)		bao4 (暴)	
阿毗達磨俱舍論今讀	215	巴黎和會預備提案序	217	暴動與外國干涉	94
ail (哀)		ba2 (跋)		beil (碑)	
哀告議員	210	跋程正伯書舟詞	262	碑帖跋	180
哀啓	166	跋稼軒詞外詞	261	碑帖跋	235
哀西藏	86	跋劉子植好大王碑考釋	261	碑帖跋	237
ai4 (愛)		跋四卷本稼軒詞	261	bei3 (北)	
愛國歌四章	75	跋宋仲溫急就章真跡	261	北周華岳廟碑	233
愛國論	51	跋湯濟武悼亡詩	249	bi3 (比)	
an4 (暗)		跋周印昆藏左文襄公書牘	147	比國留學界報告	87
暗殺之罪惡	138	跋周印昆藏左文襄書牘	148	bi4 (幣)	
ao4 (澳)		ban1 (班)		幣制條例理由書	146
澳亞歸舟雜興	62	班定遠平西域 (粵劇)	56	幣制條議	115
澳亞歸舟贈小畔四郎	63	ban4 (辦)		bian4 (變)	
澳洲新內閣與二十世紀前途之 關係	86	辯論術之實習與學理序	198	變法通議 (一)	31
ba1 (八)		bao3 (保)		變法通議 (二)	36
八聲甘州 (送蛻庵歸國)	104	保教非所以尊孔論	67	變法通議 (三)	49
		保國會演說詞	46		

變法通議（四）	51
bian4（辨）	
辨妄廣告	82
bo2（駁）	
駁某報之土地國有論	96
bu3（卜）	
卜算子	30
cai2（財）	
財務原論目錄及敘例	107
財務支絀呈總統總揆請示辦法	
文	178
財政計劃意見書	132
cai3（采）	
采桑子羅敷艷歌春寒	28
cai4（蔡）	
蔡鈞蔑辱國權問題	73
蔡俊墓碑	183

蔡松坡軍中遺墨跋語	248
蔡松坡遺事	250
蔡松坡與袁世凱	251
can2（蚕）	
蚕務條陳序	38
chang2（長）	
長亭怨慢	100
chang2（償）	
償還國債意見書	120
chang4（倡）	
倡設女學堂啓	42
chao2（巢）	
巢經巢詩抄	181
chao2（朝）	
朝鮮哀詞五律二十四首	117
朝鮮滅亡之原因	118
朝鮮亡國史略	86

朝旨深意	72
che4（徹）	
徹底翻騰的清華革命序	205
chen2（晨）	
《晨報》增刊經濟界序	218
chen2（陳）	
陳白沙草書詩卷	229
陳白沙詩稿軸	198
陳白沙先生畫	230
陳白沙行書詩卷	181
陳伯謙誄詞	226
陳蘭甫校本夢溪筆談	203
陳蘭甫切韻考	217
陳蘭甫聲律通考	218
陳子礪勝朝粵東遺民錄	222
cheng2（成）	
成容若淶水亭雜識	184
cheng2（城）	

城鎮鄉自治章程質疑	114
cheng2 (呈)	
呈大總統補訂各省法官回避辦法二條文	145
呈大總統陳明本部已未派往各國修習員另籌辦法文	140
呈大總統將司法籌備處裁撤文	140
呈大總統謹將應行回避之河南等省高等廳長官互相調用人員開單請鑑核實施文	146
呈大總統擬將新疆司法籌備處暫緩裁撤文	140
呈大總統擬將已故監檢察官馬柱比較陸軍上校陣亡例給恤文	145
呈大總統擬將直隸豐縣監犯改處無期徒刑之池維坦白雲升二犯再減為一等期徒刑十年文	146
呈大總統擬就各級審判廳試辦章程條文分別修正補訂文	140
呈大總統擬具司法官回避辦法四條文并附單	145

呈大總統擬懇准照約將楊松林等一案宣告減刑文	140
呈大總統特派部員赴日本大藏省視察財務行政文	178
呈擬將司法部大理院合併文	147
呈歐洲戰役史論文	149
呈請辭財政總長職文	179
呈請代奏查辦德人毀壞聖像以伸公憤稿	47
呈請改良司法文	146
呈請確立教育經費事	199
呈總統文(司法問題)	145
chi3 (尺)	
尺素五千紙	72
chong2 (重)	
重印鄭所南心史序	91
chong2 (崇)	
崇拜外國者流看者	69
chou2 (籌)	

籌擬京師大學堂章程	47
chul (初)	
初歸國演說詞	133
chu3 (楚)	
楚卿至自上海小集旋別賦贈	77
chuang4 (創)	
創辦時務報源委	48
chun1 (春)	
春朝漫句	104
春秋載記	186
春秋中國夷狄辨序	39
春陽	127
ci2 (辭)	
辭司法總長職呈文	146
ci4 (次)	
次韻酬星洲寓共見懷二首并示遯	61

cong2 (從)	
從發音上研究中國文學之源	203
從軍日記	159
cui4 (萃)	
萃報敘	39
da2 (答)	
答北京大學教職員	242
答飛生	81
答和事人	81
答謀報第四號對於《新民叢報》	
之駁論(附錄原文)	93
答某君問辦理南洋公學善後事	
宜	78
答某君問德國日本裁抑民權事	75
答某君問法國禁止民權自由之	
說	78
答某君問日本禁止教科書事	79
答清華周刊記者	215
da4 (大)	

大寶積經迦葉品梵藏漢文六種	
合刻序	224
大乘起信論考証	210
大乘起信論考証序	210
大同同學錄題詞四十韻	82
大同譯書局敘例	41
大同志學會序	52
大清刑事民事訴訟法	94
大中華發刊詞	150
大總統對德奧宣戰書	178
dai4 (代)	
代段祺瑞討張勳復辟通電	178
代黎元洪等致吳子玉書	201
代黎元洪等致趙炎午書	201
代黎元洪致肖耀南書	200
代梁仲策(次蓀)擬請留學津	
貼呈文	108
代熊秉三範靜生致趙炎午書	201
代五大臣考察憲政報告	92
代趙恒惕發起聯省會議宣言	200
dai4 (戴)	

戴東原生日二百年紀念會緣起	220
戴東原圖書館緣起	222
戴東原先生傳	222
戴東原哲學	222
戴東原著述纂校書目考	222
戴南子遺錄	223
戴文進山水卷	229
dan4 (淡)	
淡歸和尚草書詩冊	223
dao4 (悼)	
悼湯濟武文	187
悼啓	226
de2 (得)	
得擎一書報銳庵嘔血其夕大風	
雨感喟不寐披衣走筆記詩以訊	126
de2 (德)	
德國膠洲灣增兵問題	117
德研香楷書軸	229
德育鑑	91

di3 (抵)	
抵制禁約與中美國交之關係	90
di4 (地)	
地理及年代	205
地理與文明之關係	67
地方財政先決問題	112
地名韻語跋	25
地名韻語序	25
di4 (第)	
第十度的“五七”	225
die2 (蝶)	
蝶戀花	53
蝶戀花二闕	29
蝶戀花三闕春盡感事達歸者	46
dong1 (東)	
東歸感懷	61
東籍月旦	71
東南大學課畢告別辭	214

東三省自治制度之公布	87
東陽本蘭亭序	234
dong4 (動)	
動物談	53
dong4 (洞)	
洞仙歌中秋寄內	29
dul (都)	
都勻熊公略傳	179
du2 (讀)	
讀幣制則例及度支部籌辦諸折	
書後	116
讀春秋界說	50
讀讀通鑑論	78
讀度支部奏報各省財政折書後	116
讀度支部奏定試辦豫算大概情形折及冊式書後	116
讀廣東國民購路股票章程書後	89
讀今後之滿洲書後	90
讀陸放翁集	71

讀孟子記 (修養之部)	188
讀孟子界說	50
讀農工商部籌借勸業富強公債	
折後	112
讀日本大隈伯爵開國五十年史	
書後	110
讀日本書名志書後	42
讀十月初三日上諭感言	119
讀史學正八卷	183
讀書法	219
讀書示例——荀子	246
讀書分月課程	27
讀西學書法	33
讀異部宗輪論述記	202
讀中華人國大總統選舉法	141
dui4 (對)	
對報界之演說	177
對酒圖五章章八句爲蹇季常題	
以濁醪有妙理爲韻	152
對歐美友邦之宣言	241
對外與對內	128

對於北京國民裁兵運動大會的感想	210
對於羅文干案國民所應持的正義	211
對於日本提案第三條之批評	202
duo1 (多)	
多數政治之實驗	139
duo2 (奪)	
奮斗之湖南人	209
e2 (俄)	
俄國芬蘭總督之遇害	84
俄國立憲政治之動機	87
俄國新內閣	86
俄國虛無堂之大活動	85
俄皇宮中人鬼	76
俄京聚眾事件與上海聚眾事件	89
俄羅斯革命之影響	89
俄蒙交涉始末附識	134
俄土戰紀敘	45

e4 (鄂)	
鄂督與粵漢鐵路	88
er4 (二)	
二十世紀太平洋歌	56
二十世紀之巨靈托辣斯	81
fa1 (發)	
發行公債整理官鈔推行國幣說帖	120
fa3 (法)	
法理學大家孟德斯鳩之學說	69
fan1 (番)	
番禺湯公略傳	174
番禺湯公墓誌銘	213
fan1 (翻)	
翻譯文字與佛典	200
fan2 (樊)	
樊增祥密書疏證	78

fan3 (反)	
反對復辟電	177
fan4 (範)	
範母謝太夫人七十壽言	243
feil (非)	
非革命論之理由	97
非唯	226
feil (菲)	
菲斯的人生天職論述評	151
feng4 (奉)	
奉酬星洲寓公見懷一首次原韻	60
奉懷南海先生星加坡兼敦請東渡	126
fo2 (佛)	
佛典之翻譯	193
佛家經錄在中國目錄學之位置	245
佛教東來之史地研究	195

佛教教理在中國之發展	197
佛教心理學淺測	207
佛教與西域	195
佛教之初輸入	201
佛陀時代及原始佛教教理綱要 （原題印度之佛教）	245
fu4（服）	
服從釋義	80
fu4chen2-（復陳-）	
復陳護督陸都督電	167
復陳陸兩督軍電	171
復陳陸兩督軍電	171
fu4da4-（復大-）	
復大總統國務院電	171
fu4duan4-（復段-）	
復段總理電	167
復段總理電	168
復段總理電	170

復段祺瑞電（謝絕列席善後會 議）	227
復段芝泉執政論憲法起草會事	240
fu4feng2-（復馮-）	
復馮上將軍電	163
復馮上將軍電	163
復馮上將軍電	167
fu4huang2-（復黃-）	
復黃溯初電	167
fu4li2-（復黎-）	
復黎大總統電	166
復黎大總統電	167
復黎大總統電	169
復黎大總統電	170
fu4liang2-（復梁-）	
復梁燕孫電	161
fu4tang2-（復唐-）	
復唐都督電	170

fu4zhang1-（復張-）	
復張東蓀書論社會主義運動	197
復張總長電	161
fu4zhuang1-（復莊-）	
復莊思緘電	161
fu4（賦）	
賦得荔實周天兩歲星	24
gai3（改）	
改革之動機安在	101
改鹽法議	114
改用太陽歷法議	113
改造發刊詞	194
gan1（甘）	
甘儕鶴山水軸	230
gan3（趕）	
趕緊組織‘會審凶手’的機關 啊	241

gan3 (感)		格致學沿革考略	72	公言報周年祝詞	178
感秋雜詩	128	ge4 (各)		公債政策之先決問題	116
gaol (高)		各國憲法異同論	52		
高青邱集	181	各省濫鑄銅元小史	113	gong1 (龔)	
高望公畫山	230			龔孝拱書橫額	229
高望公秋原獨立圖	234	gen4 (互)			
高望公山水軸	231	互古未聞之預算案	119	gong4 (共)	
				共和黨之地位及其態度	138
gao4 (告)		gengl (庚)		gu3 (古)	
告墓祭文 (祭李夫人)	244	庚戌秋冬間因若海納交于趙堯		古書真偽及年代	254
告小說家	157	生侍郎，從問詩古文辭，書訊		古議院考	34
		往復所以進行之者良厚，顧羈			
gao4 (誥)		海外迄未識面，輒爲長謠以寄		gu3 (谷)	
誥封榮祿大夫允初黃公畫像贊	108	遐憶	119	谷音	227
		庚戌歲暮感懷	122		
ge2 (革)				gu4 (顧)	
革命！俄羅斯革命！	71	gong1 (公)		顧問政治	89
革命相續之原理及其惡果	139	公博藤龔爲予作紫陽峰圖賦謝			
		疊韻	153	gual (瓜)	
ge2 (格)		公車上書請變通科學折	47	瓜分危言	53
格里森貨幣原則說略	113	公祭蔡松坡文	173		
		公祭康南海先生文	254	guan1 (關)	

關稅權問題	94
關於山東問題之談話	192
關於玄學科學論戰之“戰時國際公法”	218
guan1 (官)	
官制與官規	114
guan3 (管)	
管子傳	107
guang3 (廣)	
廣詩中賢歌	62
廣西致北京最後通牒電	159
廣西致各省通電	159
guil (歸)	
歸舟見月	129
gui3 (癸)	
癸丑三日邀群賢修契萬牲園拈蘭亭序分韻得激字。	138

gui4 (貴)	
貴定戴公略傳	180
guo2 (國)	
國幣法及施行條例理由	146
國產之保護及獎勵 (講演稿)	245
國風報敘例	110
國會開會期與會計年度開始期	121
國會期限問題	113
國會與義務	121
國會之自殺	139
國際立法條約集序	136
國際聯盟及其趨勢序	195
國際聯盟論序	192
國際聯盟與中國	189
國家論	52
國家思想變遷異同論	63
國家學綱領	70
國家原論	93
國家運命論	115
國民破產之噩兆	128
國民常識講義說略	121
國民常識學會章程	120

國民籌還國債問題	113
國民淺訓	160
國民十大元氣論 (一名《文明之精神》)	55
國民自衛之第一義 (一名國民制憲運動)	193
國體問題與外交	155
國體問題與五國警告	156
國體戰爭躬歷談	173
國性篇	134
國學小史	197
國學入門書要目及其讀法	216
國文語原解	98
guo4 (過)	
過渡時代論	63
過去一年間世界大事記	92
hai3 (海)	
海外殖民調查報告書	79
han1 (愍)	
愍山和尚手書遺偈軸	198

han2 (韓)
韓非子顯學篇釋義 252

han4 (漢)
漢曹全碑 234
漢耿勛碑 231
漢萊子侯殘石 177
漢孟璇殘碑 234
漢書藝文志諸子略考釋 247
漢司馬長元石門題名 179
漢祀三公山碑 232
漢武氏石闕銘 232
漢學商兌跋 24
漢鄭固碑 180
漢志諸子略各書存佚真偽表 252

hao3 (好)
好事近代思禮題小影寄思順
(二首) 242

he1 (呵)
呵旁觀者文 57

he2 (和)
和夏穗卿 27

he2 (何)
何龍友題畫詩爲兩仲寫扇 234
何媛雙臨張遷碑 227

he2 (荷)
荷庵除夕牙痛作詩調之 122

he4 (賀)
賀新郎 77

he4 (鶴)
鶴洲零拓本瘞鶴銘 157

hu2 (胡)
胡金竹手書詩卷 228

hu2nan2~ (湖南~)
湖南教育界之回顧 209
湖南省憲之實施 209

湖南時務學堂答問 43
湖南時務學堂學約 43
湖南時務學堂札記批 43

hu4 (護)
護國軍軍政府第一號宣言 162
護國軍軍政府第二號宣言 162
護國軍軍政府第三號宣言 164
護國軍軍政府第四號宣言 164
護國軍軍政府第五號宣言 164
護國軍軍政府上黎大總統電 162
護國軍軍政府致公使團領事團
第一電(代) 162
護國軍軍政府致公使團領事團
第二電(代) 162
護國軍軍政府致公使團領事團
第三電(代) 164
護國之設回顧談 213
護國運動中致蔡鍔第一書(→
致蔡~) 157

hu4 (滬)
滬案交涉方略敬告政府 241

huai2 (淮)		集句題甘白石花軸	251	寄懷何翮高外部	106
淮南子要略書後	247	集聯 (31 聯)	227	寄內四首	28
		集陶謝句書聯	230	寄汪穉卿	27
				寄趙堯生侍御以詩代書	151
huan4 (浣)		ji4 (記)		ji4 (祭)	
浣溪抄乙丑端午夕俄公園夜坐	242	記東京學界公憤事并述余之意		祭蔡松坡文	173
		見	91	祭海珠三烈文	173
huang2 (黃)		記東俠	41	祭麥孺博詩	152
黃帝以後第一偉人趙武靈王傳	81	記江西康女士	36	祭六君子文	55
黃梨洲朱舜水乞師日本辯	216	記蘭畹集	262	祭隆裕皇太後文 (代表世凱)	143
黃太公壽詞	194	記尚賢堂	39	祭湯濟武文	187
黃虛舟仿雲林秋山圖軸	231	記時賢本事曲子集	262		
		記自強軍	38	ji4 (稷)	
hui4 (會)				稷山論書詩序	219
會報序	40	ji4 (紀)		jial (加)	
		紀年公里	50	加藤博士天則百話	76
hui4 (惠)		紀事二十四首	60	jial (嘉)	
惠天牧行書吳梅村詩軸	228	紀夏殷王業	185	嘉應黃先生墓誌銘	108
				jial (佳)	
huo4 (霍)		ji4 (寄)			
霍布士學案	63	寄懷仲策弟美洲	100		
		寄懷若海即促其東渡用聞訊子			
ji2 (集)		剛篇韻	106		

佳人奇遇（政治小說） 49

jia3（甲）

甲寅冬假館著書于西郊清華學

校成歐洲戰役史論賦示校員及

諸生

149

甲寅上巳抱存修禊南海子分韻

得帶字

147

jian3（減）

減字目蘭花爲孺博提秦郎劃扇

30

jian4（見）

見于高僧傳中之支那著述

210

jiang1（將）

將神學堂緣起

68

將來百論

122

將去澳洲留別陳壽

62

jiang3（講）

講學社規則

194

jiang3（蔣）

蔣叔南游記序

199

蔣母楊太夫人墓誌銘

221

jiao3（僥）

僥辛與秩序

123

jiao4（教）

教育家的自家田地

208

教育應用的道德公準

213

教育與政治

208

教育政策私議

70

jie2（節）

節本明儒學案

91

節省政費問題

117

jie2（劫）

劫灰夢傳奇

67

jie2（羯）

羯南湖村招飲上野之薦亭以詩

爲令強成一章

52

jie4（戒）

戒纏足會敘

35

jin1（金）

金縷曲

29

金縷曲

99

jin3（錦）

錦愛鐵路問題

112

jin4（進）

進步黨擬中華民國憲法草案

139

進步黨政務部特設憲法問題討

論會通告書

139

進化論革命者頡德之學說

74

jin4（近）

近代學風之地理的分布

223

近世第一大哲康德之學說

78

近世第一女傑羅蘭夫人傳

74

近世歐洲四大政治學說

72

近世文明初祖二大家之學說

66

近世中國秘史序	86
近著第一輯序	211
jing1 (經)	
經國美談 (政治小說)	56
經世文新編序	46
jing1 (京)	
京報贈刊國文祝詞	157
jing3 (景)	
景祐六壬神定經二卷	183
jing4 (靜)	
靜春詞跋	262
jing4 (敬)	
敬告當道者	74
敬告留學生諸君	73
敬告國人之誤解憲政者	123
敬告國中談實業者	118
敬告我同業諸君	74
敬告我國國民	77

敬告政黨及政黨員	136
敬舉兩質義促國民之自覺	154
敬業與樂業	208
jiu4 (舊)	
舊拓懷任聖教序	232
舊拓文殊般若經	228
jiu4 (救)	
救災同志會公啓 (日地震)	220
jiu4 (就)	
就本年度財政現狀質問政府書	132
就幣制總裁通電	137
就日本侵佔山東問題質問政府	148
ju3 (舉)	
舉國皆我敵	65
jue2 (絕)	
絕交後之緊急問題	177
jun1 (軍)	

軍閥私斗與國民自衛	196
軍費問題答客難	137
軍機大臣署名與立憲國之務大	
臣副署	115
軍務院第一號布告	164
軍務院第二號布告	165
軍務院第六號布告	165
軍務院前大總統袁公函 (未發)	165
軍務院致各省公函 (未發)	165
kail (開)	
開明專制論	92
kang1 (康)	
康長素法國革命史論	95
ke1 (科)	
科學精神與東西文化	209
ke3 (可)	
可否南北會派改約代表	253

kong3 (孔)	
孔著上海領事裁判及會審制度	
識言	92
孔子	196
孔子教義實際裨益與今日國民	
者何在欲昌明之其道何由	151
孔子訟冤	71
ku1 (哭)	
哭孺博八首	152
哭湯濟武	187
ku3 (苦)	
苦痛中的小玩意兒	227
kui3 (傀)	
傀儡說	51
kuo4 (擴)	
擴充滇富銀行以救國利商議	174
la4 (臘)	
臘不盡二日遺懷	103

lan2 (蘭)	
蘭陵王至日寄蕙記時當在道中	26
lang4 (浪)	
浪淘沙	29
lao3 (老)	
老孔墨以後學派概觀	196
老子哲學	196
le4 (樂)	
樂利主義斗邊沁之學說	73
lei2 (雷)	
雷庵行贈湖村小隱	52
li2 (黎)	
黎洞石畫扇	230
黎二樵書世說新語	183
li4 (歷)	
歷代名人生卒年表序	255

歷史上中國民族之觀察	90
歷史上中華國民事業之成敗及	
今後革進之機運	195
歷史統計學	211
li4 (立)	
立憲法議	62
立憲國詔旨之種類及其在國法	
上地位	126
立憲九年籌備案恭跋	110
立憲政體與政治道德	112
li4 (利)	
利用外資與消費外資之辨	128
li4 (蒞)	
蒞國民黨歡迎會演說辭	133
蒞教育部演說詞(現代教育之	
弊端)	177
lian2 (聯)	
聯省會議宣言(代吳子玉)	201

liang2 (良)	
良知 (俗識) 與學識之調和	149
liang2bao3~ (梁保~)	
梁保三年伯八哀徵詩文啓	217
liang2qi3chaol~ (梁啓超~)	
梁啓超之國會談	178
liang2ren2~ (梁任~)	
“梁任公對於時局之痛語”	215
梁任公學術講演集 (第三輯)	
自序	217
梁任公之平和談	187
梁任公之興亞借款意見	172
liang2shi3~ (梁始~)	
梁始興忠武王碑	233
liang2yao4~ (梁藥~)	
梁藥亭笠屐尋芳圖軸	231
梁藥亭行書八言聯	198

liang2zhang1~ (梁章~)	
梁章冉賺蘭亭圖	228
liang2zhong1~ (梁忠~)	
梁忠璇經緯	199
liang3 (兩)	
兩廣護國軍募集軍資公啓	163
lie4 (列)	
列子批注	186
lin2 (林)	
林女子音樂教本序	207
林虛窗古木寒鴉軸	229
林虛窗畫扇	229
ling4 (令)	
令發律師証書	143
令各高等審檢廳	141
令各高等審檢廳縣知事幫審員	141
令各省高等檢察廳	140
令各省高等檢察廳	144

令各省高等檢察廳檢察長	144
令各省高等檢察廳檢察長	144
令各省高等審檢廳	141
令各省高等以下審檢廳等及新	
疆司法籌備處	144
令京師地方京內外高等審判廳	141
令京師地方內外高等審判廳	142
令京師高等審判廳等	142
令京師及沿 (鐵) 路線各省高	
等以下各級審檢廳等	142
令京師直隸高等審檢廳	141
令京外高等地方審判廳	144
令京外高等審判檢察廳	142
令京外高等以下各該審檢廳等	142
令京外各級檢察廳	140
令京外各級審檢廳	143
令京外各級審判廳等	142
令京外各級審判廳及各縣知事	
幫辦員	143
令請觀各員開具履歷赴部報到	143
令山東高等審檢廳	143
令順天府習藝所辦事員	143

令直隸高等審檢廳	143
liu2 (劉)	
劉荊州	61
劉宋劉懷民墓誌	181
劉蛻集	215
liu2 (留)	
留別澳洲諸同志六首	62
留別梁任南漢拂路盧	61
liu4 (六)	
六丑傷春	28
long2 (龍)	
龍游縣志序	245
lu2 (盧)	
盧梭學案	64
lu4 (陸)	
陸王學派與青年修養	253

lyu3 (旅)	
旅順逃竄俄艦之國際交涉	85
lun4 (論)	
論報館有益于國事	32
論幣制頒定之遲速系國家之存亡	113
論邊防鐵路	124
論大臣規避副署不足以逃責任	120
論地方稅與國稅之關係	113
論獨立	79
論俄羅斯虛無黨	81
論法律之性質	95
論佛教與群治之關係	76
論剛毅籌款事	55
論各國干涉中國財政之動機	108
論國民宜亟求財政常識	114
論國務院會議	135
論湖南應辦之事	45
論加稅	32
論膠濟鐵路與德國權力之關係	84
論教育當定宗旨	67
論今日各國待中國之善法	60

論今日整理財政宜先定國銳與地方銳之範圍	132
論進出口正負差之原理及其關係于中國國計之影響	85
論近世國民競爭之大勢及中國前途	55
論君政民政相嬗之理	41
論立法權	67
論美菲英杜之戰事關係于中國	55
論孟子稿	197
論民族競爭之大勢	67
論南洋公學學生退學事件	76
論內地雜居與商務關係	53
論七略別錄與七略	262
論請願國會當與請願政府并行	115
論商業會所之益	54
論審計院	135
論希臘古代學術	70
論小說與群治之關係	75
論學日本文之益	
論學生公憤事	73
論學術之勢力左右世界	66
論語公羊相通說	39

論支那獨立之實力與日本東方政策	54
論支那宗教改革	54
論直隸湖北安徽之地方公債	116
論政府違法借債之罪	126
論政府與人民之權限	68
論政府阻撓國會之非	117
論中國財政學不發達之原因及古代財政學說之一班	156
論中國成文法編制之沿革得失	94
論中國國民生計之危機	116
論中國國民之平格	79
論中國積弱由于防弊	34
論中國人種之將來	53
論中國宜講求法律之學	46
論中國與歐洲國體異同	53
論中國學術思想變遷之大勢	68
論中國之將強	39
論中英貿易	190
論專制政體有百害于君主而無一利	75
論資政院之天職	119
論宗教家與哲學家之長短得失	74

luo2 (羅)	
羅馬四論識	90
ma2 (麻)	
麻哈吳公略傳	180
man3 (滿)	
滿江紅	27
滿洲鐵路中立問題	112
mei3 (美)	
美國大統領選舉臆評	84
美國歡迎前大統理	116
美術與科學	206
美術與生活	208
mei4 (媚)	
媚外奇聞	68
meng2 (蒙)	
蒙學報、演義報合敘	42

meng4 (孟)	
孟祿講演集序	205
meng4 (夢)	
夢晚讀書錄	111
mi3 (米)	
米禁危言	116
mi4 (密)	
密呈總統總理財政情形文	179
min2 (民)	
民國初年的幣制改革	251
民選領事問題	73
ming2 (明)	
明季第重要人物袁崇煥傳	83
明情之交中國思想界及其代表人物	223
明拓同州本聖教序	232
明拓雁塔聖教序記	232

mo4 (墨)	
墨經校釋	198
墨經通解序	258
墨子學案	199
墨子之倫理學	84

na4 (那)	
那先比丘經書	196

nan2 (南)	
南海康先生傳	64
南海先生倦游歐美載渡日本同 居須磨浦之雙濤閣述舊抒懷敬 呈一百韻	128
南海先生七十壽言	254
南海先生詩抄按語	106
南海王公略傳	174
南陵徐氏覆小宛堂景宋本玉臺 新詠	227
南皮先生賜壽記	41
南宋六陵遺事	185

ni3 (擬)	
---------	--

擬大總統令(整頓司法)	145
擬發行國幣匯兌卷說帖	148
擬覓雙先生七十壽詩	151
擬譯書局章程并瀝陳開辦情性 折	48

ni4 (逆)	
逆臣廢弑之陰謀	78

nian4 (念)	
念奴嬌壽何梅夏	30

oul (歐)	
歐美政治革進之原因	136
歐游抵滬後之談話	192
歐游心影錄節錄	191
歐戰後思想之變遷	149
歐戰蠡測	150
歐洲地理大勢論	72
歐洲文藝復興史序	195
歐洲戰役史論	149
歐洲最近政局	93

peng2 (彭)	
彭春洲臨孔謙碣	229
pi1 (批)	
批神州大學代表張喜森等呈詞	141
批張鵬飛呈詞	141

pi4 (闕)	
闕復辟論	166

ping2 (平)	
平民教育孟祿特號序	202

ping2 (評)	
評胡適之中國哲學史大綱	205
評非宗教同盟	206
評孫中山	239
評新官制之副大臣	120
評一萬萬圓之新外債	119
評政府對於日俄和議之舉動	90
評資政院	120

po4 (破)	
---------	--

破蘭滅亡記	32
pu2 (葡)	
葡萄牙革命之原因及其將來	118
pu2 (菩)	
菩薩蠻	29
qi2 (齊)	
齊天樂	27
qi2 (其)	
其夕大風徹旦不寐重有感	103
qian2 (錢)	
錢選畫卷	230
qin2 (秦)	
秦泰山刻石殘字	230
qin4 (沁)	
沁園春乙丑送湯佩松	242

qing1 (清)	
清初五大師學術梗概	221
清代通史序	220
清代學術概論	195
清代學者整理舊學之總成績	225
清代政治之影響于學術者	220
清光祿大夫禮部尚書李公墓誌 銘	104
清華學校中等科四年級學生畢 業紀念冊序	150
清華研究院茶話會演說詞	251
清建威將軍浙江提督張公神道 碑銘	245
清平樂	26
清史簡例初稿	149
清學開山祖師之顧亭林	223
清議報敘例	49
清議報一百冊祝辭并論報館之 責任及本館之經歷	64

qing2 (情)	
情聖杜甫	207

qing3 (請)	
請飭一切書籍報章概准免納厘 稅呈	48
qiul (秋)	
秋蟬吟館詩抄序	156
秋夜	77
qu1 (屈)	
屈原研究	211
qu3 (曲)	
曲江集	215
qu4 (去)	
去國行	48
qu4 (趣)	
趣味教育與教育趣味	206
que4 (鵲)	
鵲橋仙	100
鵲橋仙	243

鵲橋仙自題小影寄思順	242
ren2 (人)	
人權與女權	211
人日立春	122
人生觀與科學	218
ren2 (仁)	
仁學序	50
ri4 (日)	
日本併吞朝鮮記	118
《日本國志》書後	35
日本橫濱中國大同學校緣起	43
日本預備立憲時代之人民	94
日本之朝鮮	88
日俄和議紀事本末	91
日俄戰役關於國際法上中國之地位及各種問題	85
日韓合併問題	116
ru2 (如)	
如何才能完成“國慶”的意義	244

如夢令	29
ru2 (儒)	
儒家哲學	258
儒家哲學及其政治思想	212
ruan3 (阮)	
阮文達撰焦理堂傳	217
阮元嘉瀛舟筆談	230
san1 (三)	
三十自述	76
三水梁太公重游澧水徵詩文啓	255
三先生傳	41
shang1 (傷)	
傷心之言	155
shang1 (商)	
商會議	52
shang4 (上)	
上陳寶箴書	43

上鄂督張制軍書	59
上海《時報》緣起及刊例	82
上海遇雪蕙仙	28
上南皮張尙書書	37
上攝政王書	108
上濤貝勒書	109
上粵督李傅相書	57
上資政院總裁論資政院權限說	
帖	102
上總統書(財政問題)	145
上總統書(國體問題)	153
shao4 (少)	
少年中國說	56
少年中國之男女	194
shao4 (邵)	
邵陽蔡共略傳	248
she4 (設)	
設置國際軍隊問題	204
she4 (社)	

社會主義論序	96
shen1 (申)	
申論國幣條例實行細則第二條	146
申論種族革命與政治革命之得失	93
申論中國不必行社會革命之理由	97
shen2 (什)	
什麼是文化	212
什麼是“我”	187
shen3 (沈)	
沈氏音書序	32
shen4 (慎)	
慎子 (四部叢刊本)	198
shengl (生)	
生計學學說沿革小史	70
生物學在學術界的位置	208

shengl (聲)	
聲明不黨之宣言	169
sheng3 (省)	
省憲法大綱	198
省制問題	134
sheng4 (聖)	
聖路易博覽會之各種會議	84
shil (尸)	
尸子廣澤篇呂氏春秋不二篇合釋	252
shil (師)	
師範大學第一次畢業同學錄序	225
shil (詩)	
詩八題	121
詩話	69
詩十二題	108
詩十五題	102

shi2 (時)	
時事新報五千號紀念辭	204
時事雜感	123
時務學堂札記殘卷序	205
shi2 (十)	
十六日誌慟	123
十五小豪傑 (原名《兩年間的假期》)	67
十種德性相反相成義	63
shi2 (實)	
實業與虛業	157
shi3 (史)	
史記貨殖列傳今義	39
史記中所述諸子及諸子書最錄考釋	247
shi4 (世)	
世界大勢及中國前途	101
世界大戰與中國	190
世界和平與中國	188

世界將來大勢論	89
世界近世史按語	80
世界末日記	75
世界史上廣東之位置	89
shi4 (市)	
市民與銀行	203
shi4 (試)	
試辦不纏足會簡明章程	38
shi4 (適)	
適可齋紀言紀行序	33
shi4 (釋)	
釋革	76
shoul (收)	
收回幹線鐵路問題	127
shou4 (壽)	
壽嚴幾道先生	136
壽姚茫父五十	240

shul (書)	
書感四首寄星洲寓公仍用前韻	60
書法指導	258
書聯	174
書劉道一烈士傳後	179
書十二月二十日僞上諭後	57
shu4 (述)	
述歸國後一年來所感	145
述歸五首	129
shuang1 (雙)	
雙鉤本褚書隨清娛墓誌	183
雙鉤唐搨定武落水蘭亭	181
雙濤閣日記	109
雙濤園讀書	117
雙濤園隨筆	110
shui3 (水)	
水調歌頭	27
shuol (說)	

說常識	112
說大毗婆沙	208
說燈	32
說動	45
說方志	226
說國風	110
說華嚴經	196
說淮	98
說“六足”“發智”	196
說群序	38
說四阿含	201
說希望	79
說幼稚	137
說政策	122
sil (司)	
司法儲才館季刊發刊詞	254
司法儲才館開館詞	253
司法部布告定期考驗并甄撥司	
法人員準則	142
司馬談論六家要指書後	252
sil (斯)	

斯巴達小志	73
斯片挪莎學案	64
si4 (四)	
四庫提要批語	24
si4 (似)	
似此遂足以破種界乎	67
song1 (松)	
松坡圖書館記	219
松坡圖書館勸捐啓	239
松陰文鈔	92
song4 (宋)	
宋刻禊帖跋	232
song4 (送)	
送土爾扈特王歸國	97
送一九一四年	149
sui2 (隋)	
隋李富娘墓誌	217

隋蜀通妻陶貴墓誌	233
隋蜀王美人董氏墓誌	233
隋蘇孝慈墓誌	182
隋王善來墓誌	182
sun1 (孫)	
孫與人弟子職注一卷	184
孫淵如篆書聯	228
suo3wei4 (所謂)	
所謂大限主義	87
所謂袁張內閣	101
tai2 (臺)	
台城路黃浦江送蕙仙歸寧之黔	
余南還矣	26
臺諫近事感言	115
tai4 (太)	
太古及三代載記	185
太平洋會議中兩種外論辟謬	203
太平洋遇雨	55

tai4 (泰)	
泰谷爾的中國名——竺震旦	225
tan2 (談)	
談判與宣戰	241
tan2 (譚)	
譚伶自繡像作漁翁乞題	153
tan2 (檀)	
檀香山賠款問題	73
tang1 (湯)	
湯母蔡太夫人壽言	155
tang2 (唐)	
唐道因法師碑	233
唐房彥謙碑	232
唐會澤大事記敘	174
唐李邕書靈岩寺碑頌	215
唐顏魯公書李玄靖碑	231
tao2 (陶)	

陶淵明	213
ti2 (題)	
題東歐女豪傑代羽衣女士	77
題洪範疏証	257
題敬鄉樓圖	260
題禮器碑	157
題宋石門羅漢畫像	244
題宋拓淳化閣帖	260
題姚廣孝爲中山王畫山水卷	151
題藝衡館日記	122
題袁海觀尙書所藏冬心畫梅	152
題越園畫雙松	257
題周養安篝燈紡讀圖	152
題莊思緘扶桑濯足圖	151
tian1 (天)	
天問閣集三卷存二卷其下卷存一條	183
天演學初祖達爾文之學說及其略傳	68
tie3 (鐵)	

鐵路國有問題	127
鐵路權之轉移	85
鐵血	62
tong1 (通)	
通電	168
通電	171
tong2 (同)	
同意與解散權	138
tong3 (統)	
統計學之原理與應用序	214
tong4 (痛)	
痛定罪言	154
tu2shulguan3 (圖書館)	
圖書館學季刊發刊詞	246
wai4 (外)	
外官制私議	120
外交方針質言	176

外交失敗之原因及今後國民之覺悟	191
外交歟內政歟	204
外債平議	118
外資輸入問題	85
wan3 (挽)	
挽蔡松坡聯	174
挽漱山檢書圖	250
挽王國維聯	256
wan3 (晚)	
晚清兩大家詩抄題辭	197
wan4 (萬)	
萬季庚申君遺事	184
萬木草堂書藏徵捐圖書啓	46
萬木草堂小學學記	41
wang1 (汪)	
汪白岸山水軸	230
汪容甫舊學蓄疑一卷	217

wang2 (亡)	
亡羊錄	54
亡友夏穗卿先生	225
wang2 (王)	
王荊公	106
王荊公選唐詩	227
王靜安先生紀念號序	258
王靜安先生墓前悼詞	256
王森然著中學國文教學概要序	253
王陽明知行合一之教	251
wei2 (違)	
違制論	127
wei2 (爲)	
爲陳達聯	221
爲籌制直統四年預算案事敬告	
臣及疆吏	124
爲川漢鐵路事敬告全蜀父老	127
爲創立文化學院事求助于國中	
同志	214
爲改約問題敬告友邦	246

爲貴卿書聯	252
爲國會期限問題敬告國人	117
爲滬案敬告歐美朋友	241
爲江蘇省議員摧殘教育事業警	
告江蘇人民	214
爲南開大學勸捐啓	204
爲請求列席和平會議敬告我友	
邦	187
爲什麼要注重敘事文字	258
爲松坡圖書館請續撥藏書呈	238
爲序倫書聯	257
爲學與做人	213
爲由甫書聯（錄陸子語）	93
wei4 (魏)	
魏韓顯宗誌	233
魏惠猛法師墓誌	234
魏李謀志	182
魏賈思伯碑	232
魏馬鳴寺碑	223
魏三體五經殘碑	222
魏石門銘	233
魏司馬景和妻孟夫人誌	233

魏俞玄志	182
魏元萇振興溫泉頌	233
魏元景造像殘石	234
魏張猛龍清頌碑	232
魏鄭道忠志	182
wen2 (文)	
文史學家的性格及其預備	222
文字獄與文明國	89
wen2 (聞)	
聞訃辭職書	166
聞英寇雲南俄寇尹犁感憤成作	127
wen4 (問)	
問答二十則	69
問東京留學界與監察員衝突事	
有感	96
wengl (翁)	
翁松禪畫牛卷	228
wo3 (我)	

我的病與協和醫院	248
我對於女子高等教育希望特別注重的幾種學科	206
我們該怎樣應付上海慘殺事件	241
wulhul~ (嗚呼~)	
嗚呼俄國之立憲問題	87
嗚呼韓國！嗚呼韓皇！嗚呼韓民	101
嗚呼四川教育界	86
嗚呼榮祿	79
wu2 (無)	
無產階級與無業階級	239
無槍階級對有槍階級	203
無業游民與有業平民	252
wu2 (吾)	
吾黨對於不換紙幣之意見	131
吾黨對於國民捐之意見	132
吾今後所以報國者	150
wu2 (吳)	

吳夢窗年齒與姜石帚	262
吳淞中國公學改辦大學募捐啓	194
wu3 (五)	
五年來之教訓	173
五十年中國進化概論	206
五四紀念日感言	193
wu4 (戊)	
戊申初度	104
戊戌政變記	49
戊戌政變紀事本末	51
xil (西)	
西南軍事與國際公法	165
西疆建置沿革序	150
西書提要	32
西書提要農學總序	33
西學書目表	33
西學書目表序例	33
西藏考一卷	183
西藏密約問題	73
西藏戡亂問題	112

西政叢書序	38
西政叢書	38
xia2 (俠)	
俠情記傳奇	75
xia4 (夏)	
夏威夷游記(舊題《汗漫錄》又名《半九十錄》)	55
xian1 (先)	
先進者之新覺悟與新任務	209
先秦學術年表	247
先秦政治思想	206
先秦政治思想史(一名中國聖哲之人生觀及其政治哲學)	212
先王父教諭公二十周忌率婦子遙祭禮成泣賦	131
xian4 (現)	
現今全世界第一大事	111
現今世界大勢論	70
現政府與革命黨	95

xian4 (憲)	
憲法起草問題答客問	155
憲法之三大精神	136
憲政淺說	110
xiang1 (湘)	
湘報序	216
湘亂感言	115
湘月壽何大	29
xiaol (曉)	
曉來	77
xie4 (謝)	
謝里父自書詩軸	228
謝秋娘	29
xin1 (辛)	
辛亥革命之意義與十年雙十節之樂觀	203
辛亥元旦	122
辛稼軒先生年譜	262

xin1 (新)	
新出現之兩雜誌	95
新大陸遊記節錄	83
新會譚公略傳	174
新軍滋事感言	114
新羅馬傳奇	72
新民叢報章呈	65
新民說 (一)	65
新民說 (二)	77
新民說 (三)	84
新民說 (四)	92
新民議	76
新史學	66
新釋名敘例	85
新太平洋發刊詞	204
新學偽經考序	39
新中國建設問題	129
新中國未來記	75
xing2 (行)	
行人失辭	69

xiong1 (匈)	
匈加力愛國者噶蘇士傳	69
xu1 (須)	
須磨首途遇雨口占	129
須磨寺訪梅	104
xu4 (續)	
續記俄國立憲問題	88
續論市民與銀行	204
續評資政院	122
續譯列國歲計政要序	39
xue1 (薛)	
薛稷書張元隱真庵記	183
xue2 (學)	
學生的政治活動	252
學生之自覺及其修養方法-在廣東高等師範學校之演說	173
學生自修之三大要義	177
學問的趣味與趣味的學問	254
學問獨立與清華第二期事業	239

學問之趣味	208
學校讀經問題	258
學新英國巨人克林威爾傳	78
學與術	128
xun2 (荀)	
荀子評諸子語匯解	252
荀子《勸學篇》講授稿	188
荀子正義篇	252
yal (雅)	
雅典小史	74
ya4 (亞)	
亞里士多德之政治學說	75
亞洲地理大勢論	69
yan2 (研)	
研究文化史的幾箇問題重要問題	213
yan2 (顏)	
顏李學派與現代學術思潮	221

yang2 (楊)	
楊仁山闡教篇	199
楊星吾留真譜	184
楊州慢送江逢辰歸山	30
yang2 (陽)	
陽明先生傳及陽明先生弟子錄序	216
yao2 (堯)	
堯舜爲中國中央君權濫觴考	64
yao2 (姚)	
姚花扇注	243
yao4 (要)	
要籍解題及其讀法	221
ye4 (葉)	
葉鞠裳語石	181
yil (一)	

一年來政界之波瀾	101
一年來之政象與國民程度之映謝	138
yil (醫)	
醫學善會敘	40
yi4 (異)	
異哉所謂國體問題者	154
異哉所謂支那教育權者	65
yi4 (憶)	
憶江南寶雲樓夏日即興	99
憶書六卷	223
yi4 (義)	
義烏吳氏家譜序	234
yi4 (譯)	
譯引政治小說序	50
yi4 (易)	
易經遵朱序	224

易余籥錄二十卷	217
yi4 (意)	
意大利建國三傑傳	71
意大利立憲政治之近況跋	97
意大利興國俠士傳序	46
意志之磨練	188
yi4 (瘞)	
瘞鶴銘跋	154
yi4 (毅)	
毅安弟乞書	100
yin1 (陰)	
陰陽五行說之來歷	204
yin2 (銀)	
銀行制度之建設	147
yin3 (尹)	
尹墨卿臨漢碑立軸	183

yin3 (飲)	
飲冰室藏書題跋	149
飲冰室師友論學狀識言	73
飲冰室文集自序	76
yin4 (印)	
印度佛教概觀	197
印度與中國文化之親屬的關係	225
ying1 (英)	
英杜和議遂成	71
英國政界劇爭記	111
英國之西藏	86
英日同盟論	67
ying3 (癭)	
癭公以唐道士索洞玄所書本際 經屬題	137
you2 (由)	
由大連夜乘汽車至奉天	130
由奉天卻至大連道中作	130

you2 (游)	
游春雜感	52
游臺灣詩詞	125
游臺灣書牘	126
游箱根浴溫泉作	52
游雲泉仙館書感	153
you4 (又)	
又佛教與西域	196
you4 (幼)	
幼達同年任神戶領事僅數月受 代去歌以送之	127
yong1 (庸)	
庸言題句	134
yong3 (永)	
永川黃公略傳	179
yu2 (與)	
與報館記者談話 (一)	171
與報館記者談話 (二)	172

與報館記者談話（三）	172
與曹仲珊論時事書	219
與德富蘇逢書	56
與東方雜誌記者之談話	172
與江孝通聯句	28
與碎佛書	36
與吳季清書	35
與嚴陵先生書	37
與英報記者之談話	155
yu2（余）	
余生錄一卷	184
余與此次對德外交之關係及其	
所主張	176
余之幣制金融政策	150
余之生死觀	87
yu2（虞）	
虞美人自題小影寄思順	242
yu3（禹）	
禹貢九州考	157

yu4（馭）	
馭藏政策之昨今	114
yue4（越）	
越南亡國史敘例	91
越南亡國史	91
越南小志	91
yue4（粵）	
粵漢鐵路交涉之警問	85
粵亂感言	127
yuan1（淵）	
淵實君譯中國詩集之變遷與戲	
曲之關係	97
yuan2（元）	
元旦放晴二日兩三日陰霾	104
元和惠氏舊藏明萬曆本略史	216
元夕	123
yuan2~（袁~）	
袁世凱之解剖	174

袁政府偽造民意密電書後	165
yuan2（原）	
原學	97
yun2（雲）	
雲貴檄告全國文（代）	158
雲貴致各省通電（代）	158
雲南致北京警告電（代）	156
雲南致北京最後通牒電（代）	156
za2（雜）	
雜答某報	94
zai4（在）	
在廣州歡迎會演說詞	164
在國際稅法平等會之演說	188
在江蘇教育總會之演說	175
在軍中敬兌國人	163
在上海總商會之演說	175
在上海南洋公學之演說	175
在上海中國青年會之演說	175
在武漢報界歡迎會上之談話	209

在協約國國民協會之演說	187
在中國公學之演說	192
zai4 (再)	
再呈請辭財政總長職文	179
再論錦愛鐵路問題	115
再論籌還國債	115
再評政府對於日俄和議之舉動	90
ze2 (責)	
責任內閣釋義	124
責任內閣與政治家	118
zen3 (怎)	
怎樣的涵養品格和磨練意志	225
zeng1 (曾)	
曾剛父詩集序	254
曾胡治兵語錄序	177
曾文正公嘉言抄序	174
曾文正公嘉言錄	174
zeng4 (贈)	

贈葆靈聯 (集昌黎句)	153
贈別鄭秋蕃兼謝惠劃	61
zhan4 (戰)	
戰國載記	186
zhan4 (湛)	
湛甘泉自書詩軸	228
zhang1 (張)	
張博望班定遠合傳	70
張穆之畫扇	229
張穆之柳浪浴鴛圖軸	231
張恰鐵路問題	113
張潤之先生六十雙壽詩并序	240
張鐵橋畫馬長卷	228
張退菴先生壽序	195
張藥房行書軸	229
zhe4 (浙)	
浙江書局覆畢校本呂氏春秋	185
zhe4 (鷓)	

鷓鴣天丁卯中秋李夫人三周忌日	256
zhen1 (箴)	
箴立法家	134
zhen3 (枕)	
枕上作	104
zheng3 (整)	
整理濫發紙幣與利用公債	147
zheng4 (政)	
政變近聞	51
政黨與政治上之信條	128
政策與政治機關	134
政府大政方針宣言書	141
政局藥言	177
政論章程	101
政聞社社約	101
政聞社宣言書	101
政治家大家伯倫知理之學說	80
政治家之修養	246

政治上之對抗力	135
政治上之監督機關	102
政治學理摭言	74
政治與人民	101
政治運動之意義及價值	194
政治之基礎與言論家之指針	150

zheng4 (鄭)	
鄭裝裝劃引	155

zhi1 (支)	
支那內學院精刻校本玄裝傳書後	224

zhi1 (知)	
“知不可而爲”主義與“爲而不有”主義	204
知恥學會敘	41
知命盡性	147
知命與努力	255
知新報敘例	36

zhi3 (指)	
----------	--

指導之方針及選擇研究題目之商榷	243
-----------------	-----

zhi4 (志)	
志未酬	64

zhi4 (誌)	
誌三代宗教禮學	186
誌語言文學	186

zhi4 (治)	
治標財政策	132
治國學的兩條大路	214
治始于道路說	35
治外法權與國民思想能力之關係	90

zhi4bai3- (致柏-)	
致柏原文太郎	48
致柏原文太郎	61

zhi4bao3- (致保-)	
致保皇總會諸兄書	59

zhi4bei3- (致北-)	
致北京圖書館書	256
致北京圖書館書	256
致北京圖書館書	261

zhi4cai4- (致蔡-)	
(護國運動中)致蔡鍔第一書	157
致蔡鍔第二書	158
致蔡鍔第三書	158
致蔡鍔第四書	158
致蔡鍔第五書	158
致蔡松坡電	165
致蔡松坡電	168
致蔡松坡電	170

zhi4cao2- (致曹-)	
致曹琨吳佩孚書	207

zhi4cen2- (致岑-)	
致岑督司令電	169
致岑西林電	170
致岑西林電	171

zhi4chang2~ (致長~)	
致長福麥孟華書	103
zhi4chen2~ (致陳~)	
致陳伯笙黃慧之書	80
致陳都督陸都督岑都司令電	170
致陳督軍電	170
致陳漢第 (仲怒) 書	256
致陳漢第書	257
致陳漢第書	257
致陳陸兩都督電	166
致陳陸兩督軍電	170
致陳陸兩督軍電	170
致陳叔通範靜生書	160
致陳叔通黃溯初張東蓀書	215
致陳叔通，劉厚生等六君書	160
致陳叔通書	182
致陳叔通書	182
致陳叔通書	184
致陳叔通書	184
致陳叔通書	202
致陳三立熊秉三書	41

zhi4da4~ (致大~)	
致大理院長函	144
zhi4de2~ (致德~)	
致德富蘇峰書	82
zhi4dian1~ (致滇~)	
致滇中將士書	159
zhi4dong3~ (致董~)	
致董康先生聘任爲法律編察會顧問書	146
zhi4duan4~ (致段~)	
致段國務卿電	164
致段國務卿電	166
致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	176

致段祺瑞書	176
致段祺瑞書	179
致段總理電	168
致段總理電	168
致段執政書	241
zhi4fan4~ (致範~)	
致範靜生電	170
zhi4feng2~ (致馮~)	
致馮上將軍電	165
致馮上將軍電	166
致馮上將軍電	169
致馮上將軍電	169
致馮上將軍電	171
zhi4gang3~ (致港~)	
致港澳同人書	60
zhi4gaol~ (致高~)	
致高夢旦陳叔通書	205
致高夢旦書	216
致高夢旦書	220

致高夢旦，張元濟書	219
zhi4ge4~（致各~）	
致各都督電	170
致各都督各總司令電	160
致各都督各總司令電一	163
致各都督各總司令電二	163
致各都督各總司令電	163
致各都督各總司令電	163
致各都督各總司令電	165
致各都督各總司令電	166
致各都督各總司令電	166
致各都督各總司令電	167
致各都督各總司令電	168
致各都督各總司令電	168
致各都督各總司令電	169
致各都督各總司令電	169
致各都督各總司令電	169
致各都督各總司令電	169
致各都督各總司令電	170
致各督軍各總司令電	171
zhi4guang3~（致廣~）	

致廣東民黨領袖電（代）	162
致廣東民黨領袖電（代）	162
致廣東各界電	164
致廣東各軍各縣電	163
致廣州各界電（代）	162
zhi4guo2~（致國~）	
致國民外交協會電	189
zhi4hai2~（致孩~）	
致孩子們書	245
致孩子們書	247
致孩子們書	247
致孩子們書	247
致孩子們書	248
致孩子們書	248
致孩子們書	249
致孩子們書	249
致孩子們書	249
致孩子們書	250
致孩子們書	250
致孩子們書	250
致孩子們書	250

致孩子們書	250
致孩子們書	251
致孩子們書	253
致孩子們書	253
致孩子們書	253
致孩子們書	253
致孩子們書	253
致孩子們書	254
致孩子們書	254
致孩子們書	254
致孩子們書	255
致孩子們書	255
致孩子們書	255
致孩子們書	255
致孩子們書	256
致孩子們書	257
致孩子們書	257
致孩子們書	257
致孩子們書	258
致孩子們書	258
致孩子們書	259
致孩子們書	260

zhi4he2~ (致何~)	
致何穗田書	80
致何天柱 (擎一) 書	44
zhi4hu2~ (致胡~)	
致胡適書	195
致胡適書	242
致胡適書	260
zhi4huang2~ (致黃~)	
致黃溯初書	156
致黃溯初張東蓀張君邁書	207
致黃爲之書	58
zhi4ji2~ (致籍~)	
致籍亮仿陳幼蘇熊鐵崖劉希陶書	155
致籍亮儕電	167
致籍亮儕胡海門電	166
致籍亮儕胡海門電	167
致籍亮儕蹇季常書	200
致籍亮儕書	158
致籍亮儕書	173

致籍亮儕書	173
致籍亮儕書	205
zhi4jian3~ (致蹇~)	
致蹇季常梁崧生書	239
致蹇季常電	167
致蹇季常電	171
致蹇季常電	172
致蹇季常書	170
致蹇季常書	175
致蹇季常書	175
致蹇季常書	181
致蹇季常書	182
致蹇季常書	182
致蹇季常書	184
致蹇季常書	185
致蹇季常書	200
致蹇季常書	207
致蹇季常書	211
致蹇季常書	211
致蹇季常書	212
致蹇季常書	215
致蹇季常書	219

致蹇季常書	219
致蹇季常書	224
致蹇季常書	225
致蹇季常書	225
致蹇季常書	226
致蹇季常書	226
致蹇季常書	239
致蹇季常書	240
致蹇季常書	240
致蹇季常書	258
致蹇季常張一麟熊秉三範靜生書	200
zhi4jiang1~ (致江~)	
致江翊雲林宰平書	152
致江翊云 (庸) 書	251
致江翊云書	251
zhi4jiang3~ (致蔣~)	
致蔣百里書	192
致蔣百里書	194
致蔣百里書	202
致蔣百里張東蓀舒新城書	203

致蔣百里張東蓀舒新城書	203	致蔣智由書	99	致康有爲書	54
致蔣百里張東蓀舒新城	204	致蔣智由書	100	致康有爲書	57
致蔣觀雲書	82	致蔣智由書	100	致康有爲書	58
致蔣智由及社中諸君	105	致蔣智由書	103	致康有爲書	58
致蔣智由及學習館諸君書	105	致蔣智由書	105	致康有爲書	59
致蔣智由書	78	致蔣智由書	105	致康有爲書	59
致蔣智由書	79	致蔣智由書	105	致康有爲書	59
致蔣智由書	82	致蔣智由書	105	致康有爲書	71
致蔣智由書	83	致蔣智由書	106	致康有爲書	71
致蔣智由書	83	致蔣智由書	107	致康有爲書	71
致蔣智由書	83	致蔣智由徐佛蘇及社員諸君書	103	致康有爲書	80
致蔣智由書	84	致蔣智由徐佛蘇黃與之	100	致康有爲書	81
致蔣智由書	85	致蔣智由徐佛蘇黃與之	100	致康有爲書	82
致蔣智由書	87	致蔣智由徐佛蘇書	98	致康有爲書	87
致蔣智由書	95	致蔣智由徐佛蘇吳仲遙書	100	致康有爲書	96
致蔣智由書	96			致康有爲書	96
致蔣智由書	96	zhi4kang1~ (致康~)		致康有爲書	96
致蔣智由書	97	致康廣仁、徐勤 (君勉) 書	35	致康有爲書	96
致蔣智由書	98	致康有爲書	29	致康有爲書	97
致蔣智由書	98	致康有爲書	32	致康有爲書	100
致蔣智由書	98	致康有爲書	34	致康有爲書	103
致蔣智由書	98	致康有爲書	35	致康有爲書	104
致蔣智由書	99	致康有爲書	35	致康有爲書	104

致康有爲書	105
致康有爲書	105
致康有爲書	106
致康有爲書	107
致康有爲書	109
致康有爲書	110
致康有爲書	113
致康有爲書	115
致康有爲書	117
致康有爲書	131
致康有爲書	135
致康有爲書	137
致康有爲書	140
致康有爲書	142
致康有爲書	152
致康有爲書	173
致康有爲書	218
致康有爲書	218
致康有爲書	218
zhi4li2~ (致黎~)	
致黎大總統辭助位電	172
致黎(元洪)大總統電	166

致黎大總統段總理陳總長電	169
致黎大總統段總理電	169
致黎大總統及各都督各總司令 電	164
zhi4li3~ (致李~)	
致李蕙仙(梁的夫人)書	48
致李蕙仙書	48
致李蕙仙書	49
致李蕙仙書	49
致李蕙仙	51
致李蕙仙書	53
致李蕙仙書	53
致李蕙仙書	60
致李邱泉章行嚴電	168
致李俠和電	161
致李耀漢電	178
致李仲揆袁守和書	246
致李仲揆袁守和書	248
致李仲揆袁守和書	248
致李仲揆袁守和書	249
致李仲揆袁守和書	251

zhi4liang2bo2~ (致梁伯~)	
致梁伯強黃溯初書	193
致梁伯強籍亮儕等十人書	193
致梁伯強籍亮儕等書	193
致梁伯強籍亮儕黃溯初蘭志先 書	193
zhi4liang2ji4~ (致梁季~)	
致梁季寬電	178
zhi4liang2jun1~ (致梁君~)	
致梁君力書	58
zhi4liang2qi3~ (致梁啓~)	
致梁啓勛書	107
致梁啓勛書	107
致梁啓勛書	107
致梁啓勛書	108
致梁啓勛書	184
致梁啓勛書	184
致梁啓勛書	189
致梁啓勛書	190
致梁啓勛書	190

致梁啟勛書	191	致梁思成書	262	致梁思順書	137
致梁啟勛書	224	致梁思成書	259	致梁思順書	137
致梁啟勛書	231	致梁思成書	260	致梁思順書	137
致梁啟勛書	242	致梁思達書	259	致梁思順書	137
致梁啟勛書	242	致梁思順（令嫻）書	130	致梁思順書	137
致梁思勛書	256	致梁思順書	130	致梁思順書	137
		致梁思順書	130	致梁思順書	138
zhi4liang2sil~（致梁思~）		致梁思順書	130	致梁思順書	138
致梁思成梁恩永書	168	致梁思順書	130	致梁思順書	138
致梁思成梁思永書	211	致梁思順書	132	致梁思順書	138
致梁思順梁思成等書	240	致梁思順書	132	致梁思順書	139
致梁思順梁思成等書	244	致梁思順書	132	致梁思順書	153
致梁思順梁思成等書	244	致梁思順書	132	致梁思順書	153
致梁思順梁思成梁思永梁思莊書	240	致梁思順書	132	致梁思順書	153
致梁思順梁思成梁思永梁思莊書	244	致梁思順書	133	致梁思順書	154
致梁思順梁思莊書	239	致梁思順書	133	致梁思順書	154
致梁思成林徽書	259	致梁思順書	134	致梁思順書	154
致梁思成書	246	致梁思順書	134	致梁思順書	155
致梁思成書	247	致梁思順書	135	致梁思順書	155
致梁思成書	218	致梁思順書	135	致梁思順書	156
致梁思成書	219	致梁思順書	136	致梁思順書	156

致梁思順書	158	致梁思順書	188	致梁思順書	212
致梁思順書	159	致梁思順書	189	致梁思順書	212
致梁思順書	159	致梁思順書	189	致梁思順書	212
致梁思順書	159	致梁思順書	189	致梁思順書	213
致梁思順書	159	致梁思順書	190	致梁思順書	214
致梁思順書	159	致梁思順書	190	致梁思順書	214
致梁思順書	159	致梁思順書	190	致梁思順書	214
致梁思順書	159	致梁思順書	190	致梁思順書	215
致梁思順書	160	致梁思順書	190	致梁思順書	218
致梁思順書	160	致梁思順書	191	致梁思順書	218
致梁思順書	160	致梁思順書	191	致梁思順書	219
致梁思順書	160	致梁思順書	191	致梁思順書	219
致梁思順書	161	致梁思順書	191	致梁思順書	219
致梁思順書	161	致梁思順書	191	致梁思順書	220
致梁思順書	163	致梁思順書	191	致梁思順書	220
致梁思順書	164	致梁思順書	191	致梁思順書	220
致梁思順書	171	致梁思順書	192	致梁思順書	220
致梁思順書	171	致梁思順書	192	致梁思順書	221
致梁思順書	172	致梁思順書	193	致梁思順書	223
致梁思順書	172	致梁思順書	193	致梁思順書	224
致梁思順書	173	致梁思順書	199	致梁思順書	224
致梁思順書	187	致梁思順書	200	致梁思順書	224
致梁思順書	188	致梁思順書	212	致梁思順書	239

致梁思順書	247	zhi4lin2~ (致林~)		致陸陳兩總督電	169
致梁思順書	248	致林宰平，黃晦聞書	262	致陸都督電	161
致梁思順書	249	致林宰平書	186	致陸都督電	162
致梁思順書	254	致林宰平書	187	致陸榮廷書	158
致梁思順書	255	致林宰平書	187	致陸榮廷譚浩明陳炳焜電	178
致梁思順書	255	致林宰平書	214		
致梁思順書	255	致林宰平書	240	zhi4lyu3~ (致呂~)	
致梁思順書	256	致林宰平書	240	致呂都督童師長周參謀長電	168
致梁思順書	256	致林宰平書	240		
致梁思順書	258	致林宰平書	242	zhi4luo2~ (致羅~)	
致梁思順書	258	致林宰平書	262	致羅惇融轉袁世凱書	130
致梁思順書	260			致羅素電	241
致梁思順書	260	zhi4liu2~ (致劉~)		致羅孝高書	60
致梁思順書	260	致劉都督電	167	致羅文干先生等聘任為法律編	
致梁思順書	260	致劉都督電	167	察會編察員書	146
致梁思順書	260			致羅總司令電	171
致梁思順書	262	zhi4long2~ (致龍~)			
致梁思永書	251	致龍都督電	162	zhi4ma3~ (致馬~)	
致梁思忠書	249	致龍濟光書	156	致馬良書	135
		致龍子誠張堅伯電(代)	161	致馬良書	135
zhi4liang2zi3~ (致梁子~)				致馬司令電	161
致梁子剛書	58	zhi4lu4~ (致陸~)			
		致陸陳兩都督電	169	zhi4mai4~ (致麥~)	

致麥孟華書	114
致麥思順書	151
zhi4mei3~(致美~)	
致美洲各部帝國憲政會書	107
zhi4pin3~(致品~)	
致品川彌二郎書	48
zhi4qiul~(致邱~)	
致邱菽園書	57
致邱菽園書	59
zhi4quan3~(致犬~)	
致犬養毅	158
致犬養毅書	178
zhi4ren2~(致任~)	
致任志清胡石青書	249
致任志清(可澄)書	248
致任志清書	249
zhi4shi3~(致史~)	

致史地學會書	226
zhi4su4~(致肅~)	
致肅王善耆書	107
致肅王善耆書	107
zhi4sun1~(致孫~)	
致孫眉書	60
致孫眉書	60
致孫中山書(二封)	54
致孫中山書	56
致孫中山書	59
zhi4tan2~(致譚~)	
致譚督辦岑伯著電	162
zhi4tang1~(致湯~)	
致湯覺頓電	160
致湯覺頓書	118
致湯覺頓書	119
致湯覺頓書	119
致湯覺頓書	148
致湯覺頓書	148

zhi4tang2~(致唐~)	
致唐常才狄楚青書	58
致唐常才狄楚青書	58
致唐常才狄楚青書	59
致唐常才狄楚青書	59
致唐都督電	160
致唐都督電	163
致唐都督電	163
致唐都督電	164
致唐都督電	167
致唐劉各督軍戴省長電	171
zhi4tao2~(致陶~)	
致陶遷造像	182
zhi4wang1bo2~(致汪伯~)	
致汪伯棠林宗孟電	189
致汪伯棠林宗孟電	189
致汪伯棠林宗孟電	190
zhi4wang1kang1~(致汪康年~)	

致汪康年韓雲台詒年梁啓勛書	34
致汪康年（穰卿）書	25
致汪康年書	25
致汪康年書	26
致汪康年書	27
致汪康年書	28
致汪康年書	30
致汪康年書	30
致汪康年書	30
致汪康年書	30
致汪康年書	31
致汪康年書	31
致汪康年書	31
致汪康年書	31
致汪康年書	31
致汪康年書	31
致汪康年書	34
致汪康年書	34
致汪康年書	34
致汪康年書	42
致汪康年書	42
致汪康年書	42
致汪康年書	42

致汪康年書	42
致汪康年書	43
致汪康年書	44
致汪康年書	44
致汪康年書	44
致汪康年書	44
致汪康年書	44
致汪康年書	44
致汪康年書	45
致汪康年書	45
致汪康年書	45
致汪康年書	46
致汪康年書	58
致汪康年汪詒年韓雲台書	35
致汪康年汪詒年書	34
致汪康年汪詒年書	68
zhi4wanglrang2~（致汪穰~）	
致汪穰卿麥孺博書	36
zhi4wanglyi2~（致汪詒~）	
致汪詒年龍澤厚書	40
致汪詒年書	37
致汪詒年書	40

致汪詒年書	40
致汪詒年書	41
致汪詒年書	44
致汪詒年書	44
致汪詒年書	44
致汪詒年書	44
致汪詒年書	44
zhi4wanglyou3~（致汪有~）	
致汪有齡先生聘任爲法律編查 會副會長書	145
zhi4wang2~（致王~）	
致王國維書	238
致王國維書	239
致王國維書	243
致王國維書	246
zhi4wu2~（致吳~）	
致吳祿貞書	129
致吳佩孚書	243
致吳子玉書	201

zhi4wu3~ (致伍~)		致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	92
致伍秩庸星使書	37	致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	93
		致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	93
zhi4xia4~ (致夏~)		致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	93
致夏曾佑 (穗卿) 書	25	致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	93
致夏曾佑書	26	致夏曾佑書	47	致徐佛蘇書	94
致夏曾佑書	26			致徐佛蘇書	98
致夏曾佑書	26	zhi4xiang1~ (致鄉~)		致徐佛蘇書	98
致夏曾佑書	28	致鄉中父老書	141	致徐佛蘇書	99
致夏曾佑書	28			致徐佛蘇書	99
致夏曾佑書	29	zhi4xiao1~ (致肖~)		致徐佛蘇書	99
致夏曾佑書	29	致肖立誠雷若時書	200	致徐佛蘇書	99
致夏曾佑書	29			致徐佛蘇書	99
致夏曾佑書	29	zhi4xiong2~ (致熊~)		致徐佛蘇書	103
致夏曾佑書	29	致熊秉三電	168	致徐佛蘇書	104
致夏曾佑書	33	致熊秉三賽季常電	167	致徐佛蘇書	105
致夏曾佑書	36	致熊秉三賽季常徐佛蘇電	166	致徐佛蘇書	107
致夏曾佑書	37			致徐佛蘇書	108
致夏曾佑書	38	zhi4xu2fo2~ (致徐佛~)		致徐佛蘇書	114
致夏曾佑書	44	致徐佛蘇，範靜生，劉厚生，		致徐佛蘇書	119
致夏曾佑書	45	陸叔通等書	161	致徐佛蘇書	124
致夏曾佑書	46	致徐佛蘇侯雪舫黃與之書	119	致徐佛蘇書	124
致夏曾佑書	47	致徐佛蘇黃與之書	120	致徐佛蘇書	208

致徐佛蘇書 210

zhi4xu2jun1~ (致徐君~)

致徐君勉書 79

zhi4xu2jin3~ (致徐謹君~)

致徐謹書 59

致徐勤書 79

致徐勤書 79

致徐勤書 79

致徐勤書 82

致徐勤書 129

致徐勤書 129

zhi4xu2chagn1~ (致徐昌~)

致徐世昌總統書 192

zhi4yan2~ (致顏~)

致顏駿人書 202

zhi4yang2~ (致楊~)

致楊度書 99

zhi4yao2~ (致姚~)

致姚詠白電 179

zhi4ye4~ (致葉~)

致葉揆初陳叔通徐振飛等書 262

致葉湖南麥曼宣麥孟華羅孝高

書 59

致葉湖南麥孟華麥仲華(曼宣)

書 59

致葉湖南麥孺博書 58

致葉惠伯書 58

zhi4yu2~ (致與~)

致與慮諸賢書 172

zhi4yu2~ (致余~)

致余樾園書 145

zhi4yuan2~ (致袁~)

致袁世凱電 130

致袁世凱電 131

致袁世凱書 131

致袁世凱書 139

致袁世凱書 139

致袁世凱書 140

致袁世凱書 147

致袁世凱書 156

致袁守和(同禮)書 246

致袁守和書 248

致袁守和書 249

致袁守和書 249

致袁守和書 251

致袁守和書 260

致袁守和書 261

zhi4zhang1~ (致張~)

致張東蓀, 陳筑山書 224

致張東蓀蔣百里書 202

致張東蓀書 192

致張東蓀書 193

致張東蓀書 193

致張東蓀書 194

致張東蓀書 194

致張東蓀書 194

致張東蓀書 195

致張東蓀書 200

致張東蓀書	207
致張東蓀書	210
致張東蓀書	211
致張東蓀書	215
致張東蓀書	250
致張國淦張君勵書	177
致張國淦書	177
致張國淦書	247
致張堅伯電	161
致張鳴歧（堅白）書	108
致張佩嚴電	167
致張勛書	175
致張勛書	175
致張一麟陳漢第書	145
致張一麟書	148
致張一麟書	148
致張一麟書	152
致張一麟書	155
致張一麟書	179
致張一麟書	179
致張一麟書	202
致張元濟陳叔通書	184
致張元濟高夢旦書	210

致張元濟，高夢旦書	219
致張元濟，高夢旦書	226
致張元濟（菊生）書	206
致張元濟書	216
致張元濟書	217
致張元濟書	220
致張元濟書	223
致張元濟書	224
致張元濟書	224
致張元濟書	248
zhi4zheng4~（致政~）	
致政聞社中同志書	105
zhi4zhi1~（致知~）	
致知新報同人書	58
致知新報同人書	59
zhi4zhoul~（致周~）	
致周孝懷電	161
致周印昆書	148
zhi4zhuo1~（致卓~）	

致卓君庸書	257
致卓君庸書	257
zhong1（中）	
中德國際前途觀	175
中俄交涉與時局之危險	123
中俄之內亂外患	72
zhong1guo2~（中國~）	
中國不亡論	95
中國道德之大原	134
中國地理大勢論	70
中國地理沿革圖序	206
中國都市小史	245
中國法理學發達史論	93
中國佛法興衰沿革說略	196
中國改革財政私案	109
中國改約問題與協定稅率	95
中國各報存佚表	65
中國工藝商業考提要	40
中國古代材幣考	106
中國關稅問題	189
中國國會制度私議	105

中國國民特性	189
中國國債史	88
中國貨幣問題	83
中國積弱溯源論	61
中國近三百年學術史	226
中國考古學之過去及將來	249
中國歷史研究法	204
中國歷史研究法補編	250
中國歷史上革命之研究	83
中國歷史上民族之研究	208
中國歷史上人口之統計	83
中國立國大方針	131
中國奴隸制度	246
中國前途之希望與國民責任	124
中國史敘論	63
中國四十年來大事記	65
中國文化史——社會組織篇	244
中國外交方針私議	118
中國文明之傳播	97
中國印度之交通（一名一千五 百年前之中國留學生）	202
中國與土耳其之異	152
中國韻文里頭所表現的情感	205

中國之武士道	86
中國之多數政治	90
中國之文藝復興	189
中國之美文及其歷史	226
中國殖民八大偉人傳	89
中國專制政治進化史論	70
中國最近市面恐慌之原因	118
中華大字典序	149
中華圖書館協會成立會演說詞	240
中秋前夕送蕭立誠歸國	101
中日改約問題與最惠國條款	95
中日交涉匯評	151
中西學門經書七種	46
中學國史教本改造案并目錄	213
zhou1（舟）	
舟抵大連望旅順	129
舟中作詩呈別南海先生	88
zhou1（周）	
周八寸瑑璧題詞	175
《周末學術余議》附識	69

周孝懷居憂以母太夫人事略見 詒敬題其後奉唁	153
zhu1（朱）	
朱君文伯小傳	227
朱蘭嵎林李龍眠所畫東坡笠屐 像	231
朱舜水先生年譜	221
zhu1（殊）	
殊諭與立憲政體	121
zhu1（諸）	
諸子考証及其勃興之原因	203
zhu3（主）	
主張國民動議制憲之理由	196
zhu4（鑄）	
鑄幣計劃	148
zhuan1（專）	
專設憲法案起草機關議	136

zhuang1 (莊)	
莊子天下篇釋義	252
zhuang4 (狀)	
狀別二十六首	55
zi1 (諮)	
諮議局權限職務十論	112
zi1 (資)	
資政院第一次提出之議案	120
資政院章程質疑	117
zi3 (子)	
子剛自哈爾濱歸上海寄詩聞訊	106
子墨子學說	84
子所雅言詩書執禮至子不語怪力亂神	24
zi4 (自)	
自鑑序	221
自立會序	53

自勵二首	62
自臨張猛龍碑	129
自臨張表碑	231
自臨張遷碑	234
自題新中國未來記	77
自由乎？死乎？	88
自由講座制之教育	198
自由書（一）	54
自由書（二）	57
自由書（三）	63
自由書（四）	66
自由書（五）	74
自由書（五）	81
自由書（六）	83
自由書（七）	90
自由死自由不死	89
自由意志	187
自治！菲律賓自治！	71
zou4 (奏)	
奏爲時局艱危請定期開設國會	106
zu3 (組)	

組織蔡公遺孤教養會呈湘省長文	173
zu3 (祖)	
祖國大航海家鄭和傳	91
zui4 (最)	
最苦與最樂	188
zui4 (罪)	
罪言	135
zun1 (尊)	
尊皇論	51
zuo4 (作)	
作官與謀生	152
作文教學法	207
zuo4 (做)	
做人的方法與做學問的方法	255

付録 4 梁啓超関係論文目録

- ① 本論文目録は、梁啓超に関連する日本、香港、台湾、中国で発表されたものを収録してある。
- ② 配列は発表年順になっている。
- ③ 収録年限は二〇〇〇年までである。
- ④ 遺漏があるかとは思いますが、御寛恕願いたい。

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
001	清代學術概論	渡辺秀方訳			讀畫書院	1922
002	梁啓超の支那史に関する謬論	浅野利三郎	歴史教育	3-6	日本書院	1928
003	梁啓超の中国武士道論	布施知足	東亞	7-6	東亞經濟調査局	1934
004	梁啓超の歴史学	神谷政男	歴史学研究	105	歴史学研究会	1942
005	新中国建設への努力ー梁啓超と日本	鈴木俊	国民の歴史	1-3	実業之日本社	1947
006	清代學術概論校勘記	戸田浩暁			立正大文学研究室	1949
007	梁啓超の變法運動	市古宙三	国史學	54	國學院大國史學會	1951
008	梁啓超の大同思想	坂野長八	和田博士還曆記念東洋史論叢			1951
009	梁啓超の思想的立場	佐藤震二	東京支那學會報大會臨時號			1951
010	梁啓超ー中国近代史の研究手びき(15)	永井算巳	大安	5-7		1959
011	梁啓超ー中国文学・思想・語学基本資料解題(15)	中国文化研究会同人	大安	5-8		1959
012	梁啓超的生平及其思想與著作(1)	左舜生	新中國評論	30-2		1966
013	梁啓超的生平及其思想與著作(2)	左舜生	新中國評論	30-3		1966
014	梁啓超的生平及其思想與著作(3)	左舜生	新中國評論	30-4		1966
015	梁啓超的生平及其思想與著作(4)	左舜生	新中國評論	30-5		1966
016	梁啓超的生平及其思想與著作(5)	左舜生	新中國評論	30-6		1966
017	梁啓超的生平及其思想與著作(6)	左舜生	新中國評論	31-1		1966
018	梁啓超的生平及其思想與著作(7)	左舜生	新中國評論	31-2		1966
019	梁啓超的生平及其思想與著作(8)	左舜生	新中國評論	31-3		1966

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
020	梁啓超迎拒虛無主義	張朋園	大陸雜誌	38-8		1969
021	黃遵憲與梁啓超	王德昭	新亞書院學術年刊	11(建校二十周年紀念特大號)		1969
022	「時務報」に見える梁啓超の日本に関する言論	許常安	斯文	62		1970
023	梁啓超新史學試論	汪榮祖	中央研究院近代史研究所集刊	2		1971
024	梁啓超の政治思想－「日本亡命から革命派との論戦まで」	坂出祥伸	關西大學文學論集	23-1		1973
025	民主憲政の旗手梁啓超－梁啓超誕辰百年紀念感言－	嚴靜文	明報	8-4		1973
026	從癸丑修楔說到紀念梁啓超王羲之梁啓超修楔時的心情－	牟潤孫	明報	8-4		1973
027	期待另一個梁啓超－綜評四本有關梁啓超的著作	江庸振	歷史學報(臺灣)	2		1974
028	梁啓超および「佳人之奇遇」	大村益夫	人文論集(早稻田大学)	11		1974
029	「清代學術概論」讀感	王逸祥	東方雜誌復刊	8-1		1974
030	梁啓超先生著作考	周億孚	珠海學報	7		1974
031	梁啓超在民國初年的師友關係	張朋園	歷史學報(臺灣)	3		1975
032	梁啓超の立憲政策論	橫山英	廣島大學文學紀要	35		1976
033	梁啓超論廖季平	平川	四川文獻	163		1977
034	梁啓超後期思想的評價問題	胡嘯	復旦大學(社會科學)	1979-5		1979
035	清末における梁啓超の近代國家論	木原勝治	立命館文學	418・419・420・421(三田村博士古稀記念東洋史論叢)		1980
036	評梁啓超的佛教救世思想	杜繼文	世界宗教研究	6		1981
037	梁啓超のアジア觀－とくに日本觀を中心として－	楠瀬正明	廣島大學東洋史研究室報告	3		1981
038	論梁啓超的情感説	姚全興	文學評論叢刊	9		1981

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
	飲冰室詩話（中国古典文学理論批評専著選輯）	舒蕪校点			人民文学出版社	1982
039	康有為、譚嗣同、梁啓超不屬桐城派	孫文光	江淮論壇	1982-6		1982
040	試論梁啓超の語文教育思想	陳剛・沈寶良・沈偉麟	歷史研究	1982-7		1982
041	美哉，少年中國	李凌	讀書	1982-11		1982
042	梁啓超の治學風格—重讀《清代學術概論》—	柯安	讀書	1982-2		1982
043	梁啓超の佛學思想	高振農	中國哲學史研究	1982-4		1982
044	梁啓超の學術比較研究	黃葉	讀書	1982-7		1982
045	論梁啓超の史觀	鐘珍維	華南師範大學學報(社會科學)	1982-4(總第35期)		1982
046	從戊戌到辛亥梁啓超の民主政治思想	王好立	歷史研究	1982-1		1982
047	《少年中國說》評析	徐新民	徐州師範學院學報(哲學社會科學)	1983-3(總第35期)		1983
048	簡論梁啓超戊戌變法前後的報刊活動和辦報主張	郭亞夫	四川大學學報叢刊	18(新聞學論集)		1983
049	試論梁啓超對第一次思想解放運動的貢獻	袁偉時	中山大學學報(哲學社會科學)	1983-4(總第89期)		1983
050	陳天華《獅子吼》批駁梁啓超《新中國未來記》	王鑒清	求索	1983-4(總第14期)		1983
051	戊戌變法失敗後梁啓超の思想轉變	胡偉希	史學月刊	1983-2(總第142期)		1983
052	梁啓超後期哲學中的人格主義	王左峰	哲學研究	1983-11		1983
053	梁啓超在清末的政治宣傳	耿雲志	近代中國人物 — (近代史研究) 專刊—			1983
054	梁啓超小傳	鍾賢培	中國近代文學研究	1		1983
055	梁啓超與護國運動	曹靖國	東北師大學報(哲學社會科學)	1983-6(總第86期)		1983

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
056	論梁啓超民國初年的政治思想	寶成關	史學集列	1983-4(總第13期)		1983
057	關於梁啓超早期思想評價的幾個問題——與(中國近代哲學史)編者商榷一	蔣俊	論中國哲學史—宋明理學討論會論文集—			1983
058	梁啓超進取性及保守性與康德哲學的關係	陳嘉健	學術研究	1983-2(總第57期)		1983
059	梁啓超論孟子遺稿		學術研究	1983-5(總第60期)		1983
060	梁啓超佛學思想述評	唐文權	華中師院學報(哲學社會科學)	1983-4(總第44期)		1983
061	梁啓超與韓國的英雄主義	葉乾坤	中韓關係史國際研討會論文集—960-1949—			1983
062	論梁啓超戊戌後思想上的兩次反覆	劉福祥, 越矢元	學術月刊	1983-10(總第173期)		1983
063	從戊戌到辛亥梁啓超的民主政治思想	王好立	紀念辛亥革命七十周年青年學術討論會論文選(上)			1983
064	應實事求是評價梁啓超——(梁啓超傳)讀後感——	陳佔標	學術研究	1983-4(總第59期)		1983
065	關於梁啓超論孟子遺稿	李建	學術研究	1983-5(總第60期)		1983
066	論一九〇〇年前後康梁思想的分歧	王有為	學術月刊	1984-3(總第178期)		1984
067	梁啓超與日本政治小說在中國的傳播及評價	陳應年	中日文化與交流	1		1984
068	建國以來梁啓超研究中幾個問題的概述	何永傳	中山大學學報(哲學社會科學)	1984-1(總第90期)		1984
069	評“以復古為解放”說——讀梁啓超(清代學術概論)——	李錦全	求索	1984-3(總第19期)		1984
070	評梁啓超的“近三百年”中國學術史論	蕭蓬父, 黃衛平	社會科學戰線	1984-3(總第27期)		1984
071	評梁啓超對建史學思想的批判——兼評其對歷史的意義與目的的論述——	劉振嵐	北京師院學報(社會科學)	1984-1(總第44期)		1984

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
072	近代中國的風雲與梁啓超的變幻	李華興	近代史研究	1984-2(總第20期)		1984
073	梁啓超(異哉！所謂國體問題者)－文真義何在？	曾業英	貴州社會科學	1984-3(總第24期)		1984
074	梁啓超における西洋と傳統	別府淳夫	倫理學	2		1984
075	梁啓超の文體についての一考察	張美慧	大東文此大學創立六十周年記念中國學論集			1984
076	梁啓超世界史述簡評	高冀	史學月刊	1984-3(總第149期)		1984
077	梁啓超的倫理思想	張錫勤	中國哲學	12		1984
078	梁啓超民初時期的憲政思想與保衛共和制度的鬥爭	董守義	遼寧大學學報(哲學社會科學)	1984-5(總第69期)		1984
079	梁啓超與翻譯	袁錦翔	武漢大學學報(社會科學)	1984-1(總第59期)		1984
080	梁任公之生平事跡及其史學(上)	張開乾	臺北市立師範專科學校學報	15		1984
081	論梁啓超的英雄史觀	劉振嵐	南開史學	1984-2		1984
082	清夫士大夫思想演變的縮影－讀《忘山廬日記》－	李侃	歷史研究	1984-2(總第168期)		1984
083	《西學書目表》及梁啓超的西學思想	王英中	華南師範大學學報(社會科學)	1984-4(總第52期)		1984
084	《梁啓超年譜長編》簡介	辛建	史學月刊	1984-5(總第151期)		1984
085	戊戌變法前後梁啓超的愛國思想淺析	蘇中立，塗光久	華中師院學報(哲學社會科學)	1984-4(總第50期)		1984
086	梁啓超《新民說》倫理思想初探	沈善洪，王鳳賢	學術月刊	1984-11(總第186期)		1984
087	梁啓超在反對“二十一條”鬥爭中的愛國言行	董方奎	華中師院學報(哲學社會科學)	1984-4(總第50期)		1984
088	論1903年前梁啓超的國民道德思想	李雙璧	貴州社會科學	1984-5(總第25期)		1984
089	日本康、梁遺迹訪問	湯志鈞	文物	1985-10(總第353期)		1985
090	論戊戌維新運動及康有為、梁啓超	廣東人民出版社				1985
091	試論梁啓超散文的愛國主義的時代特色	郭一鳴	暨南學報(哲學社會科學)	(總第24期) 1985-3		1985

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
092	辛亥時期梁啓超的改良思想	曾永玲	史學月刊	1885-6(總第158期)		1985
093	矛盾的梁啓超：一個心理學的解釋	康綠島	漢學研究	3-1(總號第5號)		1985
094	梁啓超における啓蒙思想の理念－その形成と問題－	佐藤一樹	中國文化(漢文學會會報)	43		1985
095	梁啓超介紹西方社會主義學說的幾個問題	楊漢鷹	江漢論壇	1985-2(總第54期)		1985
096	梁啓超論1848年歐洲革命	辛益	河南大學學報(哲學社會科學)	1985-1(總第82期)		1985
097	梁啓超與時代	Levenson, J. R. (au.)・劉偉	中國社會科學院研究生院學報	1985-5(總第29期)		1985
098	論梁啓超在中國近代資產階級“史學革命”中的貢獻	張錫勤	求是學刊	1985-1(總第44期)		1985
100	試論康有為梁啓超的教育與人才思想	葉曉昀	揚州師院學報(社會科學)	1986-4(總第65期)		1986
101	魯迅と梁啓超－「國民性」「病根」問題と小説觀について－	片山智行	伊藤漱平教授退官記念中国學論集			1986
	清末ナショナリズムと国家有機體説	横山英	広島大学文学部紀要	45卷		1986
102	簡評梁啓超史學思想的變化	李玉華	史學月刊	1986-1(總第159期)		1986
103	梁啓超史學理論體系新探	胡逢祥	學術月刊	1986-12(總第211期)		1986
104	胡適與梁啓超－兩代知識分子的親和與排拒－	張朋園	中央研究院近代史研究所集刊	15(下)(紀念郭廷以先生逝世十週年論文集)		1986
105	梁啓超における桐城派	佐藤一郎	史學	56-3		1986
106	梁啓超的進化史觀	鄭柏林	學術研究	1986-3(總第76)		1986
107	梁啓超的進化史觀和地理史觀	劉珍嵐	中國文化研究集刊	3		1986
108	梁啓超與晚清西學	吳嘉勛	史林	1986-1(總第1期)		1986
109	梁啓超與海外華僑	鐘珍維・萬發雲	華南師範大學學報(社會科學)	1986-3(總第59期)		1986
110	從《庸言》看梁啓超	曾景忠	天津社會科學	1986-6(總第32期)		1986

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
111	青年梁啓超の自由學說	馮契	學術月刊	1987-1(總第212期)		1987
112	想起梁啓超的一段話	楊康葆	上海師範大學學報(哲學社會科學)	1987-1(總第31期)		1987
113	中國傳統文化與近代解放汨流—讀梁啓超(清代學術機論)與《中國近三百年學術史》—	李錦全	學術研究	1987-1(總第80期)		1987
114	梁啓超教育革新思想初探	黃新憲	教育研究	1987-4(總第87期)		1987
115	梁啓超多變論	英珣	歷史研究	1987-4(總第188期)		1987
116	梁啓超抵湘日期考	蔡明松	求索	1987-6(總第40期)		1987
117	梁啓超倫理思想的演變	何亞將	南京大學學報	1987(哲學專輯)		1987
118	梁啓超學術討論會概述	馬鼎盛	近代史研究	1987-1(總第37期)		1987
119	梁啓超對寫代教學的貢獻	徐振宗	北京師範大學學報(社會科學)	1987-2(總第80期)		1987
120	梁啓超與日本明治小說	夏曉虹	北京大學學報(哲學社會科學)	1987-5(總第123期)		1987
121	論梁啓超的「人才主義」思想	雷慧兒	大陸雜誌	75-4		1987
122	梁啓超學術討論會論點綜述	厲士	學術研究	1987-1(總第80期)		1987
123	晚清知識份子引介西洋史的若干問題—以梁啓超史學思想為中心—	林正珍	歷史學報(國立臺灣師範大學)	16		1988
124	梁啓超“破壞主義”思想透視	蔡開松	求索	1988-6(總第46期)		1988
125	梁啓超中西文化觀的演變	王俊明	北方論叢	1988-3		1988
126	梁啓超與清代學術史—(清代學術概論)疏證發凡—	祁龍威	揚州師院學報(社會科學)	1988-2(總第71期)		1988
127	論人的近代化與梁啓超的「新民」理論	陳中凡	學術研究	1988-5(總第90期)		1988
128	論梁啓超的啓史觀	張啓勤	中國哲學史研究	1988-3(總第32期)		1988
129	論梁啓超的“道德革命”思想	汪林茂	杭州大學學報(哲學社會科學)	1988-1		1988

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
130	論梁啓超對我國中西文化比較研究的貢獻	周行易	學術研究	1988-1(總第86期)		1988
131	護國運動における啓啓蔡師弟の貢獻についての一考察	張美慧	名古屋外國語大學紀要	1		1989
132	梁啓超《新民說》的文化尋根	胡代勝	江漢論壇	1989-2(總第102期)		1989
133	梁啓超《新民說》的再認識	崔志海	近代史研究	1989-4(總第52期)		1989
134	梁啓超先生及其家啓新會茶坑啓	高信	逢甲學報	22		1989
135	梁啓超的報刊編輯思想	里明	史學月刊	1989-5(總第181期)		1989
136	梁啓超的法國大革命觀	許明龍	歷史研究	1989-2(總第198期)		1989
137	梁啓超戊戌變法前後的教育思想	孫石月, 王青梅	山西師大學報(社會科學)	1989-4(總第65期)		1989
138	梁啓超利用外資思想述論	郭漢民, 張干丁	湖南師範大學社會科學學報	1989-1(總第69期)		1989
139	梁啓超佚札十七封	馬以君	華南師範大學學報(社會科學)	1989-1(總第71期)		1989
140	梁啓超與近代中國學術文化的更新	周佳榮	香港中國近代史學會會刊	3		1989
141	梁啓超與早期中國無政府主義	湯庭芬	近代史研究	1989-3(總第51期)		1989
142	論梁啓超在中國傳播西方哲學的啓蒙意義	啓見德	安徽師大學報(哲學社會科學)	1989-3(總第70期)		1989
143	論梁啓超三次啓離政治宣言	周武	華東師範大學學報(哲學社會科學)	1989-2(總第82期)		1989
144	論梁啓超的“國民觀”	沙磊	學習與探索	1989-4.5(總第63.64期)		1989
145	孫中山與梁啓超關於中國現代化的選擇	耿雲志	歷史研究	1990-5(總第207期)		1990
146	但開風氣不為師—論梁啓超的文學史地位一	夏曉虹	文藝研究	1990-3(總第67期)		1990
147	梁啓超《飲冰室詩話》探索	林明德	輔仁學志(文學院之部)	19		1990

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
148	梁啓超の西洋思想家論 ― その「東學」との関連において―	宮村治雄	中國一社會士文化	5		1990
149	梁啓超最早一篇議論報紙的文章	何炳然	新聞研究資料	51		1990
150	梁啓超中西文化觀的典型意義	謝剛, 元青	南開學報(哲學社會科學)	1990-4(總第96期)		1990
151	梁啓超的資產階級黨報理論和出版自由觀	張昆	新聞研究資料	51		1990
152	梁啓超的美學思想	鄒革	西北師大學報	1990-2(總第66期)		1990
153	梁啓超比較邏輯思想述評	曾祥雲	福建論壇(文史哲)	1990-1(總第56期)		1990
154	梁啓超和《時務報》的變法宣傳特色	何炳然	新聞研究資料	49		1990
155	梁啓超佛學思想概述	天祥	學施研究	1990-5(總第102期)		1990
156	梁啓超對傳統史學的態度及其新史主張	林德政	歷史學報(國立成功大學)	16		1990
157	梁啓超與孫中山歷史觀之比較研究	閻小波	社會科學戰線	1990-3(總第51期)		1990
158	梁啓超蒞湘緣由辨異	蔡開松	求索	1990-3(總第55期)		1990
159	論戊戌時期梁啓超的民權民智思想	劉振嵐	北京師範學院學報(社會科學)	1990-3(總第74期)		1990
160	論梁啓超的文化觀 ― 世界主義和國家主義的衝突與調和―	黃碑	華東師範大學學報(哲學社會科學)	1990-5(總第91期)		1990
161	傳統民族主義的近代性轉變 ― 試論梁啓超的國家民族主義思想―	劉雲波	求索	1990-5(總第57期)		1990
162	康有為、梁啓超對法國大革命認識比較論	李永清	史學月刊	1991-2(總第190期)		1991
163	從龔自珍到梁啓超 ― 近代雜文發展的一個抽樣分析―	張俊才	河北師範大學學報(社會科學)	1991-1(總第52)		1991
164	《中國近代三百年學術史・輯佚書》校注失誤十一則	曹書杰	歷史文獻研究	2		1991

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
165	新民理論與近代理想人格	關健瑛	求是學刊	1991-2(總第81期)		1991
166	辛亥革命前夕梁啓超的西學宣傳	唐文權	史學月刊	1991-5(總第193期)		1991
167	戊戌時期梁啓超對進化史觀的運用	劉振嵐	南開史學	1991-1		1991
168	戊戌政變前、梁啓超の變革論—「民權」「群」「大同」を中心に—	藤谷浩悦	史境	22		1991
169	梁啓超の新文體と徳富蘇峰(1)	大原信一	東洋研究	97		1991
170	梁啓超的“開明專制”思想新采	彭南生	華中師範大學學報(哲學社會科學)	1991-3		1991
171	梁啓超對清代學術史研究的貢獻	陳祖武	清史論叢	8		1991
172	梁啓超為什麼放棄美式共和方案	董方奎	華中師範大學學報(哲學社會科學)	1991-3		1991
173	梁啓超與晚清小說界革命	林明德	輔仁學志(文學院之部)	20		1991
174	梁啓超與《越南亡國史》的關係—《中國大百科全書》勘誤一則—	周佳榮	明報	26-4(總第304期)		1991
175	梁啓超與中國近代化	李華興	歷史研究	1991-3(總第211期)		1991
176	梁啓超與民初政治	胡繩武	近代史研究	1991-6(總第66期)		1991
177	論梁啓超進化史觀及其變化	王也揚	天津社會科學	1991-1(總第57期)		1991
178	論梁啓超的法律思想	王咸宣	山西大學學報(哲學社會科學)	1991-2(總第52期)		1991
179	從總體特色看梁啓超小說理論的歷史價說	翁家禧	古代文學理論研究	15		1991
180	淺談梁啓超起的早期目錄著作	甄小泉	河北師範大學學報(社會科學)	1991-2(總第53期)		1991
	清末《政論》《國風報》的立憲宣傳—兼談梁啓超這個時期的思想變化—	何炳然	新聞研究資料	58卷		1992

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
181	康有為、梁啓超論英國殖民統治下的印度	林承節	史學月刊	1992-1(總第195期)		1992
182	從《物質救國論》看康梁的原則分歧	李國俊	史學月刊	1992-2(總第196期)		1992
183	福澤諭吉與梁啓超近代化思想比較	高力克	歷史研究	1992-2(總第216期)		1992
184	張元濟致梁啓超、李石曾、蔡元培等書簡手跡		出版史科	28		1992
185	也談《異哉所謂國體問題者》之真義	元青	貴州文史叢刊	1992-2(總第45期)		1992
186	也論梁啓超的“流質易變”	郭馳	學術月刊	1992-7(總第278期)		1992
187	略談梁啓超論兒童教育	程禹文	北京師範學院學報(社會科學)	1992-2(總第85期)		1992
188	梁啓超新文體的產生	易樹人	江漢論壇	1992-7(總第143期)		1992
189	梁啓超先生對我國圖書館事業的貢獻	劉司斌	中國圖書館學報	1992-2(總第18卷第82期)		1992
190	梁啓超的財政生涯述略	元青	天津師大學報	1992-5(總第104期)		1992
191	梁啓超的民權思想	管彥波	晉陽學刊	1992-4(總第73期)		1992
192	梁啓超對封建文學的批判	蔣玲，鄒冠秀，郭劍波	上海師範大學學報(哲學社會科學)	1992-1(總第51期)		1992
193	梁啓超與近代墨學	羅檢秋	近代史研究	1992-3(總第69期)		1992
194	論梁啓超的政治品格與學術品格	吳前進	史林	1992-3(總第27期)		1992
	教育救国与教育強国—梁啓超關於教育社会作用的思想述評一	張燕鏡	教育研究	7号(總第162號)		1993
195	建國以來梁啓超文學思想研究述評	冼心福	學術研究	1993-3		1993
196	福澤諭吉和梁啓超的政治革新觀比較	徐劍梅	北京大學學報(哲學社會科學)	1993-2		1993
197	「過渡時代」に見る梁啓超の“過渡”觀	若杉邦子	中國文學研究論集	22		1993

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
198	試論梁啓超《導哉所謂國體問題者》—文的內涵與要害	劉振嵐	首都師範大學學報(社會科學)	1993-3		1993
199	趣味：梁啓超對人生的美學設計—論梁啓超後期的趣味理論—	宋錚	福建論壇(文史哲)	1993-3(總第76期)		1993
200	辛亥革命後の梁啓超の思想—士人主導の運動から“國民運動”へ—	有田和夫	東京外國語大學論集	47		1993
201	輿論之驕子 天縱之文豪—紀念梁啓超誕生 120周年—	孫文鏘	暨南學報(哲學社會科學)	15-3(總第56期)		1993
202	梁啓超《清代學術概論》の出色成就	陳其泰	學術研究	1993-6(總第121期)		1993
203	梁啓超の今文經學	鄭匡民	大東文化大學中國學論集	12		1993
204	梁啓超新民思想述論	胡維革	東北師大學報(哲學社會科學)	1993-3(總第143期)		1993
205	梁啓超早期史學思想與浮田和民的《史學通論》	蔣俊	文史哲	1993-5(總第218期)		1993
206	梁啓超的維新觀與心學	吳雁南	近代史研究	1993-3(總第75期)		1993
207	梁啓超的佛教史研究	天祥	學術研究	1993-2(總第117期)		1993
208	梁啓超民族主義思想研究	劉曉辰	天津社會科學	1993-5(總73期)		1993
209	論梁啓超二十世紀初鼓吹革命	劉雲波	文學月刊	1993-2(總202期)		1993
210	從《新民說》看梁啓超對傳統文化深層結構的反思	楊奮澤, 馬永山	內蒙古大學學報(哲學社會科學)	1993-2(總第81期)		1993
211	章太炎與梁啓超	元青	天津師大學報	1995-6(總第123期)		1995
212	中國國民性的更新：梁啓超《新民說》析論	周佳榮	香港中國近代文學會會刊	8		1996
213	梁啓超對中國近代化的貢獻	郭漢民	湖南師範大學社會科學學報	25-4(總114期)		1996
214	晚年梁啓超與現代新儒家	董留福	天津社會科學	1996-6(總第91期)		1996
215	1903：梁啓超的國家學說和經濟構想	李喜所	學術研究	1996-1(總第134期)		1996

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
216	一篇湮沒七十余載的重要佚文：首次發表《梁啓超對於順天時報啓事》原稿	吳銘能	北京大學學報(哲學社會科學)	1996-2(總第174期)		1996
217	辛亥革命後梁啓超之共和思想：國家與社會的制衡	Zarrow, Peter (a u、)	學術研究	1996-6(總第139期)		1996
218	梁啓超建立新式企業制度思想探析	劉仁坤	求是舉刊	1996-3(總第112期)		1996
219	梁啓超社會主義觀再認識	董方奎	華中師範大學學報(哲學社會科學)	35-5(總第123期)		1996
220	梁啓超“禁早婚”思想述評：梁啓超提高民族文化素質思想研究之二	蕭承罡	廣東社會科學	1996年增刊		1996
221	梁啓超《新民說》論綱	張錫勤	求是學刊	1996-5(總第114期)		1996
222	梁啓超と社會進化論	佐藤慎一	法學	59-6		1996
223	梁啓超にとってのルネッサンス	末岡宏	中國思想史研究	19		1996
224	梁啓超的文化思想	焦潤明	傳統文化與現代化	1996-2(總第20期)		1996
225	梁啓超的日本觀	焦潤明	近代史研究	1996-1(總第91期)		1996
226	梁啓超的學術思想：以墨子學為中心之公析	黃克武	中央研究院近代史研究所集刊	26		1996
227	梁啓超對近世中國“文化重演”現象的詮釋	馮天瑜	學術月刊	1996-5(總第324期)		1996
228	論梁啓超對封建科舉教育的批判	程禹文	首都師範大學學報(社會科學)	1996-2(總第109期)		1996
229	學術的良知和嚴謹：梁啓超《年譜》和《手蹟》校讀感言	吳銘能	北京大學學報(哲學社會科學)	1996-3(總第175期)		1996
230	從啓蒙思想看梁啓超的小說理論及其侷限	蔡長林	中國文學研究	10		1996
231	近年來梁啓超研究綜述	張衍前，於志國	文史哲	1996-2(總第233期)		1996
232	梁啓超與五四運動	崔志海	近代史研究	1997-1(總第97期)		1997
233	華路開山 功在其後：梁啓超戊戌評議述略	黃保信	河南大學學報(社會科學)	37-5(總第158期)		1997

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
234	維新時期梁啓超的女子教育思想	杜學元	西南師範大學學報(哲學社會科學)	1997-5(總第95期)		1997
235	試析梁啓超的師範教育改革思想	趙國權	河南大學學報(社會科學)	37-6(總第159期)		1997
236	中國近代國家觀念溯源：關於伯倫知理《國家論》的翻譯	Bastid-Bruguiere, Marie (au.)	近代史研究	1997-4(總第100期)		1997
237	巴黎和會期間梁啓超一封重要來電辨析	劉振嵐	首都師範大學學報(社會科學)	1997-6(總第119期)		1997
238	梁啓超《戊戌政變記》成書考	狹間直樹	近代史研究	1997-4(總第100期)		1997
239	梁啓超における「自由」と「國家」：加藤弘之との比較において	小松原件子	學習院大學文學研究年報	44		1997
240	梁啓超の『清史商例第一書』について	馬場將三	東洋大學大学院紀要(文學研究科)	34		1997
241	梁啓超の陽明學說：一九二〇年代を中心に	竹内弘行	名古屋學院大學外國語學部論集	9-1		1997
242	梁啓超科技形象初論	戴建平	社會科學輯刊	1997-5(總第112期)		1997
243	梁啓超論人的社會化	周好	江海學刊	1997-2(總第188期)		1997
244	梁啓超和《清代學術概論》	朱維鈺	學術集林	11		1997
245	論梁啓超的《新民說》	周建超	歷史檔案	1997-3(總第67期)		1997
246	論梁啓超的政府干預思想	楊宏雨	華東師範大學學報(哲學社會科學)	1997-3(總第131期)		1997
247	關於中西文明“結婚論”的產生：探討梁啓超在中西文藝理論交流中的選擇	殷國明	華東師範大學學報(哲學社會科學)	1997-6(總第134期)		1997
248	論章炳麟梁啓超墨迹釋文書	周策縱	學術集林	10		1997
249	論戊戌變法後的康有為與梁啓超	齊春風	社會科學輯刊	1997-6(總第113期)		1997
250	共同研究 梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本	狹間直樹編			みすず書房	1999

	論文名	著者	掲載誌	号・期・日月	出版社	出版年
251	梁啓超の康有為への入門徒弟をめぐって	竹内弘行	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
252	万木森々『時務報』時期の梁啓超とその周辺	村尾進	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
253	「新民説」略論	狭間直樹	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
254	梁啓超と文明の視座	石川禎浩	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
255	梁啓超の「西洋」摂取と権利・自由論	土屋英雄	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
256	梁啓超と日本の中国哲学	末岡宏	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
257	梁啓超の仏学と日本	森紀子	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
258	梁啓超の経済思想	森時彦	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
259	梁啓超と史伝—東アジアにおける近代精神史の奔流	松尾洋二	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
260	近代文学形成期における梁啓超	斎藤希史	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
261	『新中国未来記』をめぐって—梁啓超における革命と変革の理論	山田敬三	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
262	啓蒙の行方—梁啓超の再評価について	井波陵一	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
263	梁啓超と〈近代の超克〉論	中村哲夫	共同研究 梁啓超 思想受容と明治日本	西洋近代	みすず書房	1999
264	梁啓超のアジア認識—地理学から殖民地構想へ—	吉川次郎	人文論集（東京都立大学 人文学部）	311		2000

